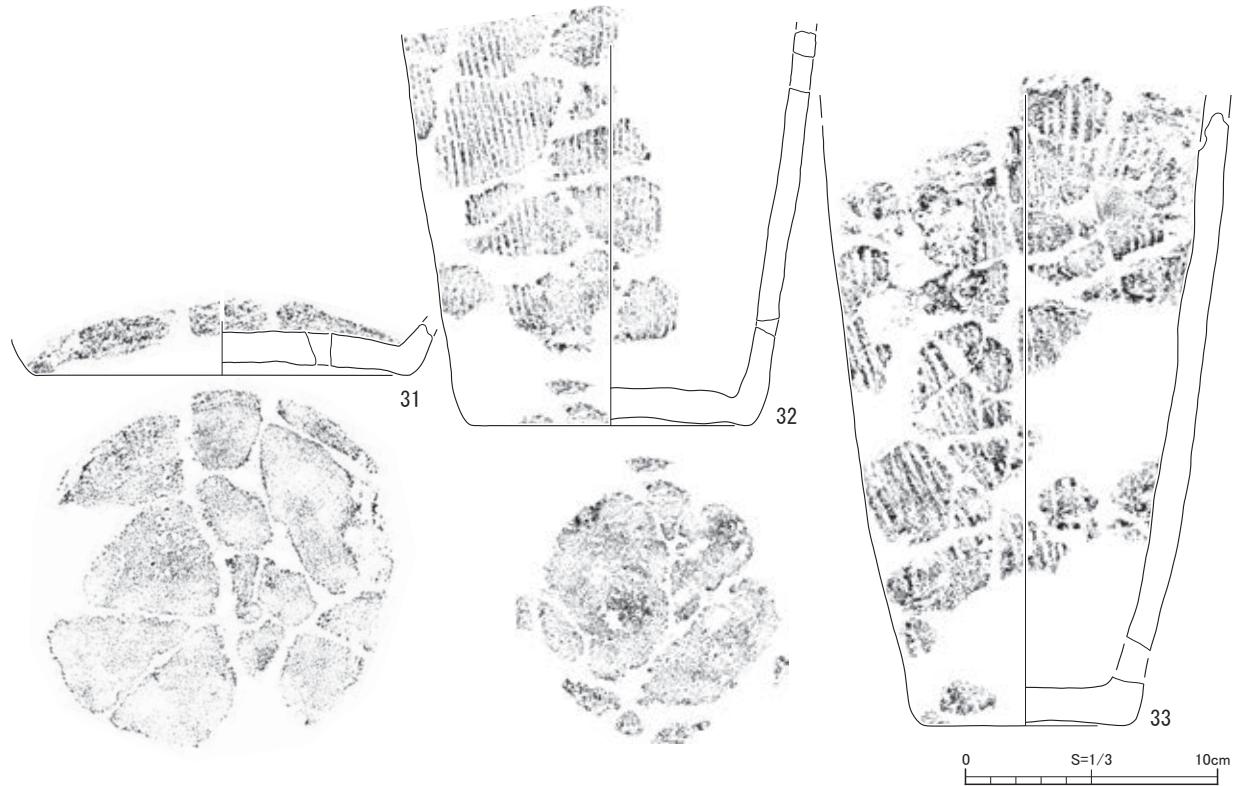


図VI-99 積穴住居跡 (98) H-13 (8)



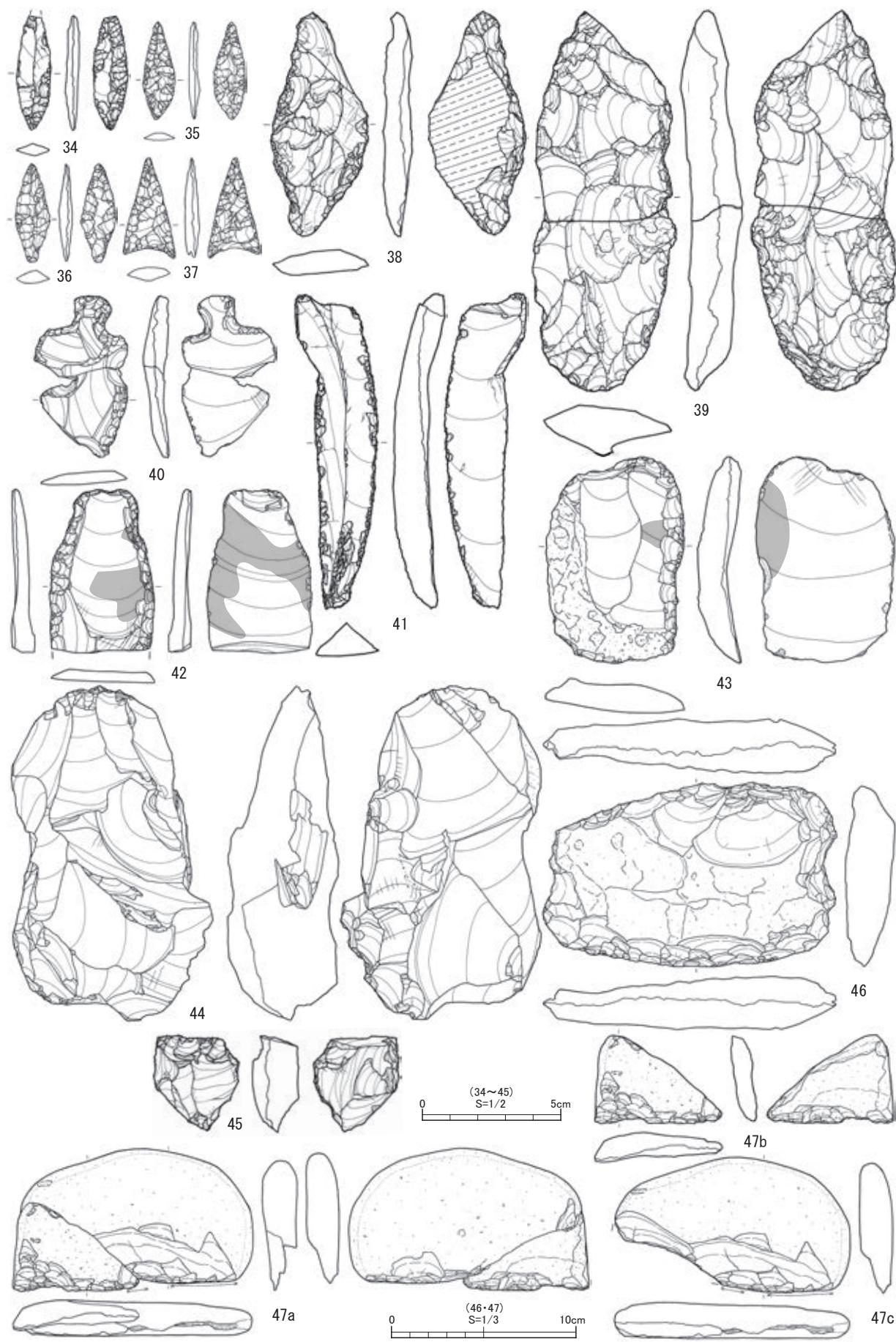
図VI-100 竪穴住居跡 (99) H-13(9)



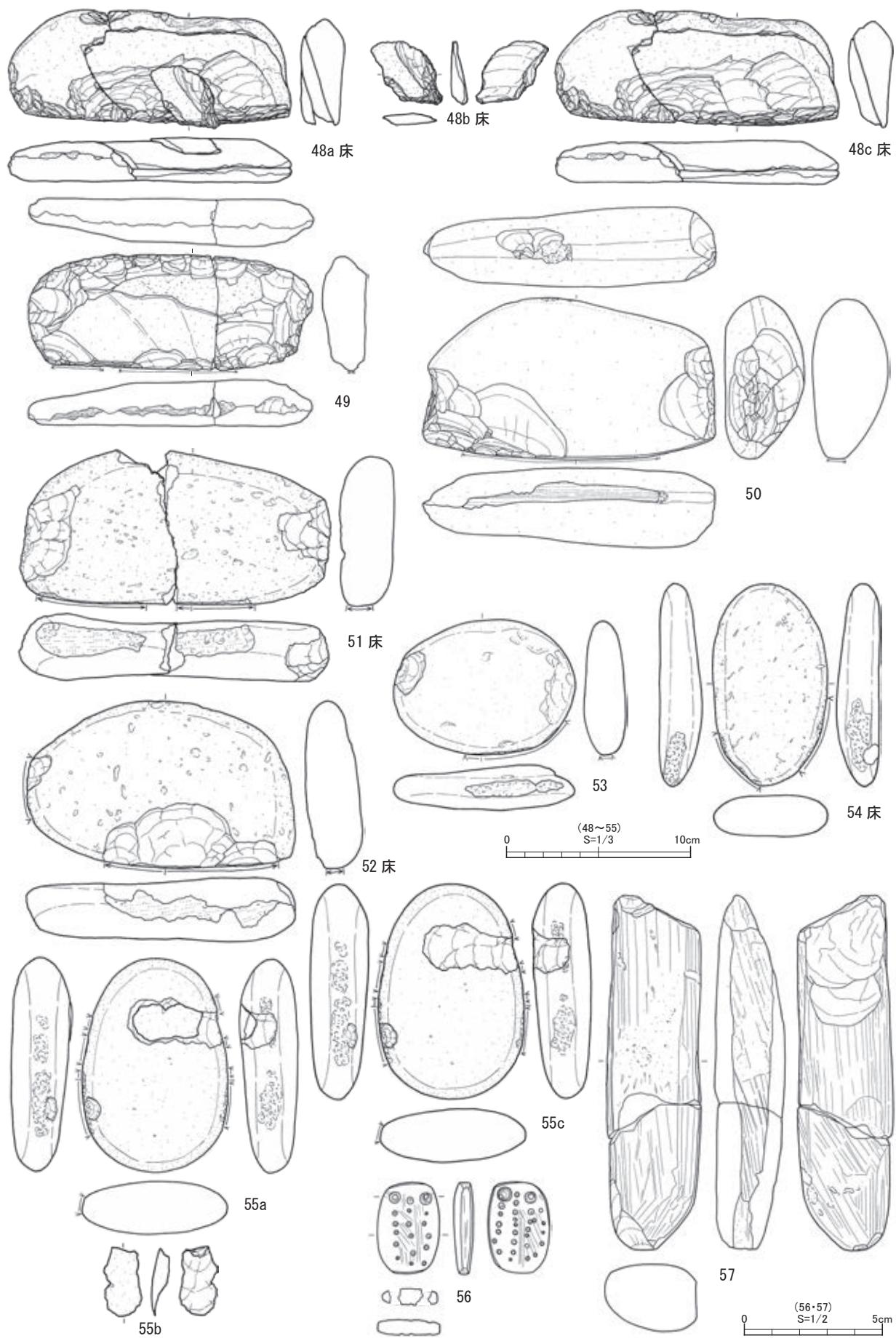
図VI-101 穫穴住居跡 (100) H-13(10)

される。19・21は横方向、20は鋸歯状の縄線文。22・23は平行沈線が描かれ、22はその下位に縄線がある。24の口縁部は3本の縄線で区画される。5は4本の沈線で区画された口縁部には異段合撫(LR・RのR撫り)、胴部には単軸絡条体5類、底部付近にはLR斜行縄文が施文される。6～11・25・26は口縁部文様区画帯がないもの。6は口縁部に単軸絡条体5類、胴部に単軸絡条体1類、7は口縁部にLR斜行縄文、胴部に単軸絡条体1類、8は口縁部に単軸絡条体1類、胴部にLR斜行縄文、9は口縁部に貝殻条痕文、胴上部に単軸絡条体1類、下部に段の違う縄RLR・R、10は全体に単軸絡条体5類、11は結束第1種羽状縄文が4段と、間に自縄自巻Lが縦位に施文される。これらは35cm以下の小型のもので、10・11はバケツ形である。25は多軸絡条体のみ、26は貝殻条痕文が施文される。28・29は風化により文様が不明瞭で、28の口縁部には不整綾絡文と縦の縄線の区画が確認できる。29は2本1組の沈線で口縁部が区画される。30～33は底部。30はRLR斜行縄文が施文される。31は底径が15cmほどの大型のもの。32・33は単軸絡条体1類が施文される。1・12・13・14は円筒下層b1～b2式、2～10・15～29は円筒下層b2式、11は円筒下層d1式。30～33は円筒下層b1～c式。

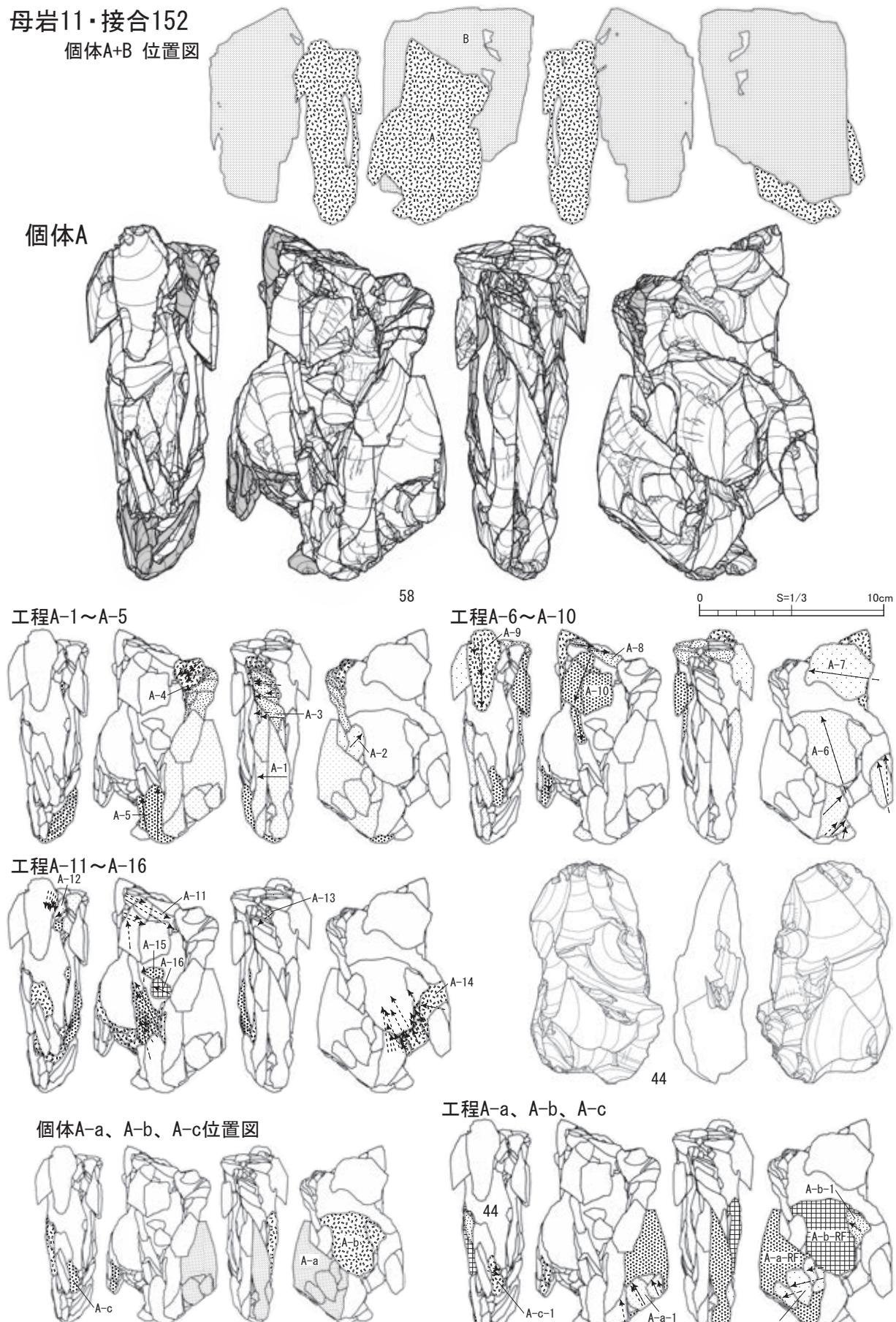
石器：34～37は石鏃。34はI a類、35はI b類、36はII a類、37はIII c類である。34は石刃状の素材である。38・39は石槍。どちらも粗い加工の段階で折損している。40はつまみ付きナイフ。ポイントフレイク状の素材で折損後、再加工されている。41～43はスクレイパー。41・42はI b類、43はIV類。44・45は石核I b類。46～49は扁平打製石器。46はI類、47はIII類、48・49はIV類。47aの下縁の状況から、47b欠損後も47cは使用され、47bも加工された可能性がある。48aは本体48cと刃部の剥落剥片48bの接合資料で、剥落後も使用により下縁部の剥落が見られる。最終的に48cは層理面で大きく剥落し、遺棄されている。49の下縁は潰れ、細い平坦面が形成される。50～52はすり石。50・51はI a類、52はI b類。50の正面には剥落が見られる。52は下面平坦面の偏る右側に剥落が伴う。53～55はたたき石。53はI b類、54・55はI c類。55aは本体55cに敲打の



図VI-102 竪穴住居跡 (101) H-13(11)

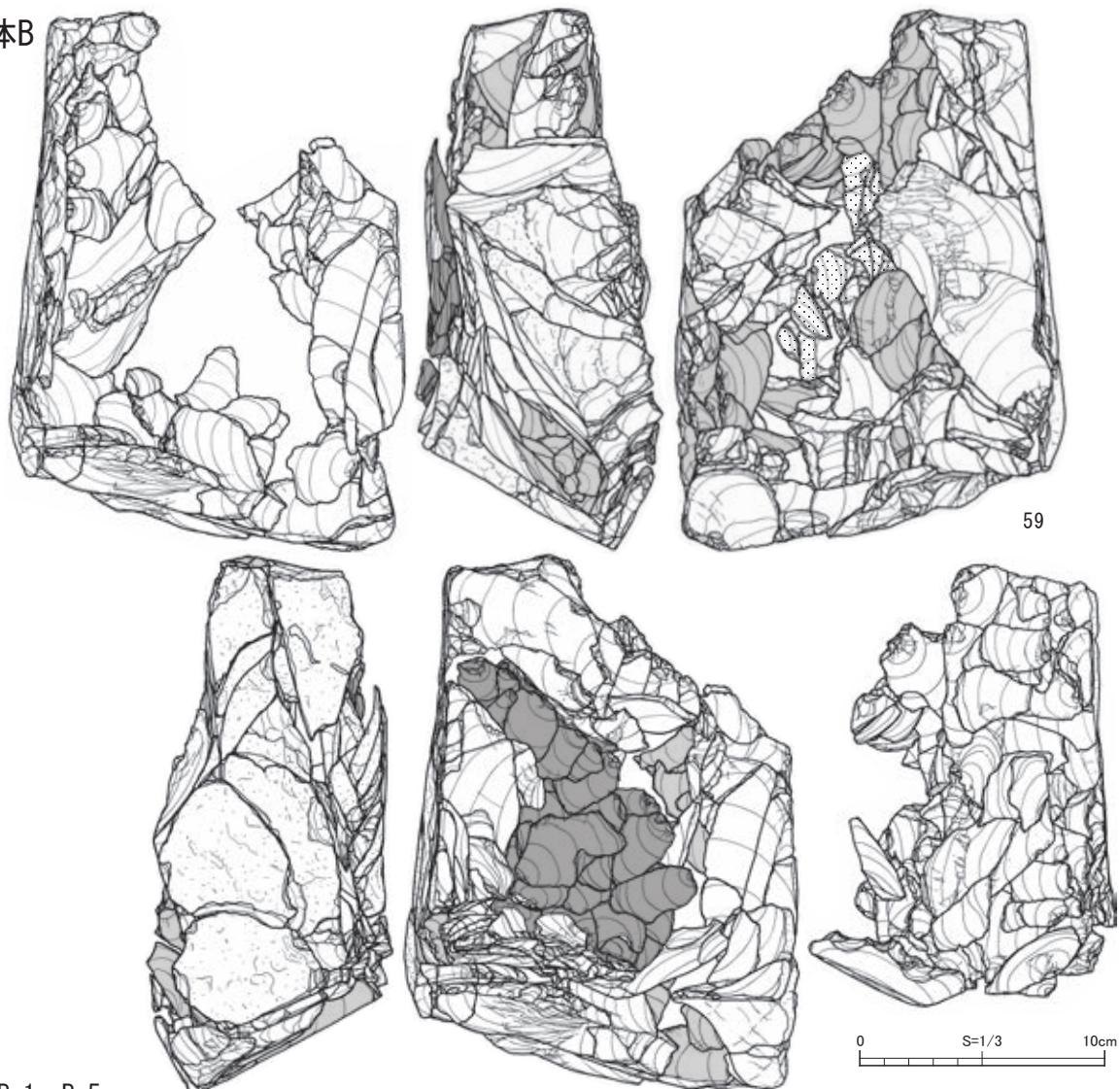


図VI-103 竪穴住居跡 (102) H-13(12)

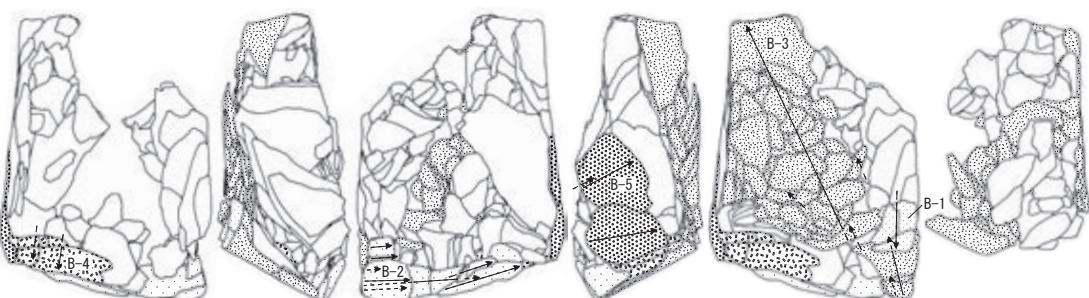


図VI-104 竪穴住居跡 (103) H-13(13)

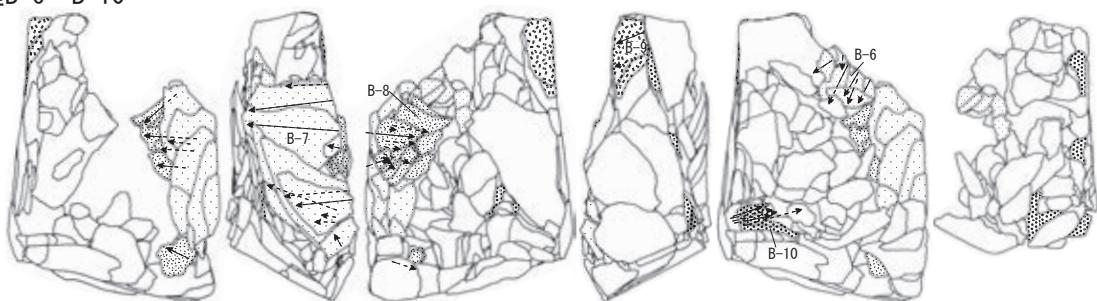
個体B



工程B-1～B-5

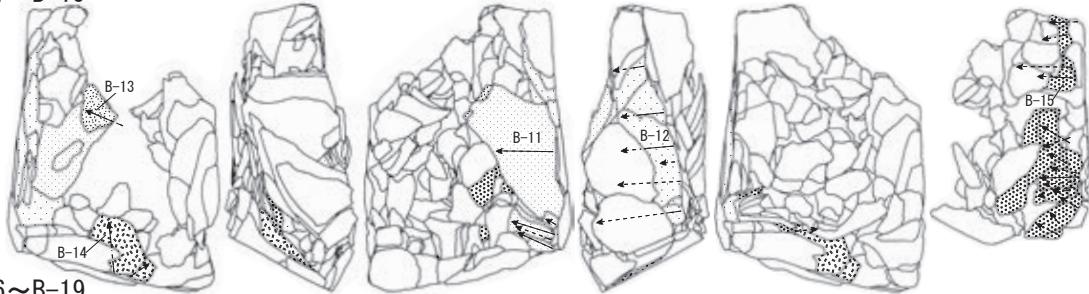


工程B-6～B-10

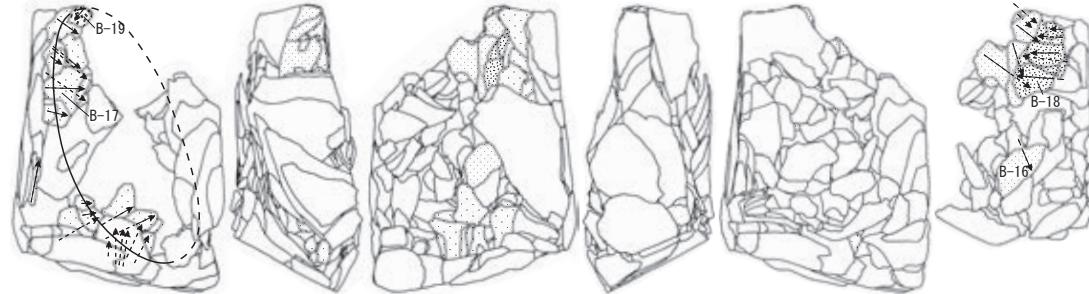


図VI-105 竪穴住居跡 (104) H-13(14)

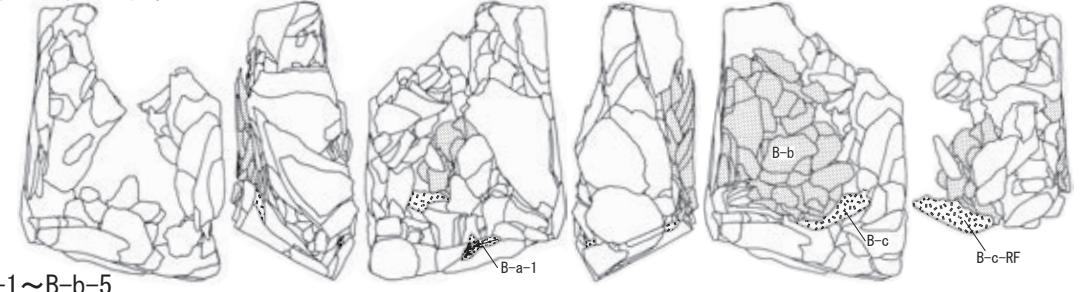
工程B-11～B-15



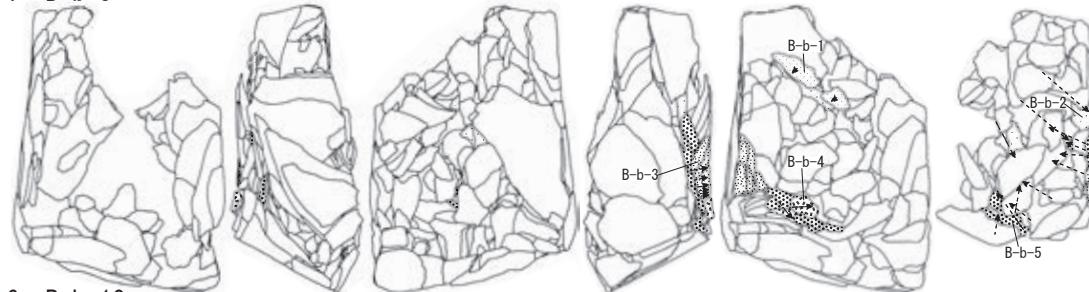
工程B-16～B-19



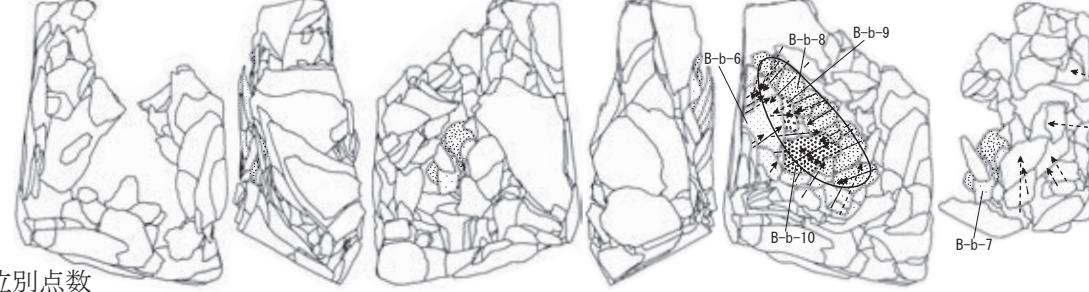
個体B-a、B-b、B-c位置図



工程B-b-1～B-b-5



工程B-b-6～B-b-10



出土層位別点数

工程	A	B										A+B 計													
		A-1		A-2 ~5	A-6		A-7 ~9	A-10		A-11～16		A 小計	B-2		B-3			B-4 ~19	B 小計						
		A-a	A-1 小計		A-b	A-6 小計		A-c	A-10 小計	・石核	B-a	B-2 小計	B-b	B-c	B-3 小計										
H-13	RM層			1				2	1		1	3(C1)	8	1	1	1	7	8	24	33	41				
H-13 HFC-1	覆土1層	2	7(R1)	9	11	6	2(R1)	8	6	2	2	34	70	2	7	3	10	8	48	1	57	95	164	234	
	覆土2層			2	2	5			2	1	2	3	9	21	1	1	1	22	22	30	54	75			
計		3	10	13	17	6	2	8	10	4	2	6	46	100	3	9	3	12	9	77	1	87	149	251	351

R:Rフレイク、C:石核

図VI-106 竪穴住居跡 (105) H-13 (15)

際に剥落した剥片 55b が接合する。56 は垂飾。長さ 3～4 cm 程の小型扁平礫を表面の研磨により隅丸長方形に整形した後、上部 2 か所に両面 2 方向から穿孔し、正面には縦 3 列、裏面には 4 列の列点状の窪みで装飾される。裏面の 4 列は左右 2 列がそれぞれ U 字状につながり、羽のように見える。形態・模様からフクロウを模したと考えられる。57 は石製品。軟質の石材で、ほぼ全面研磨により棒状に整形される。

58・59（母岩 11・接合 152）は接合資料。全体（図版 198-60）は 23.2 × 18.0 × 16.3 cm、個体 A（58）は 19.0 × 11.9 × 7.2 cm、個体 B（59）は 21.8 × 15.9 × 10.0 cm。個体 A・B は節理面で接合するが、原石採取地において、すでに分割された状態で採取されたか、その場で分割して持ち帰ったか、遺跡で分割したかは不明である。全体形状は表面が白色で珪化が進んでいない面と節理面で構成される角礫である。

個体 A は石核調整（工程 A-1～4・7・8・11～13・16）と主に両面での長軸方向の剥離（工程 A-5・6・9・10・14・15）がある。後者の工程の縦長剥片は欠落するものがあり、目的剥片として抜き出され、使用されたと考えられる。表裏面での長軸方向の剥離によって石核（44）は I b 類になる。また、やや大型の剥片である個体 A-a～c はそれぞれ工程 A-a-1・2、工程 A-b-1、工程 A-c-1 の剥離後、二次加工ある剥片（A-a-RF、A-b-RF）として遺棄される（A-c の本体は出土せず）。

個体 B はほぼ直方体で各辺を中心に剥離が進められる（工程 B-1～12）。裏面右下部からの剥離（工程 B-3）では裏面を大きく取り込む剥片（個体 B-b）が剥離され、15 cm ほどの薄手の石槍に加工される。本体は次第に両面調整状の加工に変化し、18 cm ほどの石槍に加工されているが、個体 B-b とともに遺跡からは出土していない。そのほか、工程 B-2、B-3 の剥片がそれぞれ個体 B-a、B-c に加工され、B-a の本体は未検出、B-c は二次加工ある剥片が出土している。 （鈴木）

豊穴住居跡 14（H-14）（図VI-107～109、表VI-2、図版 72・73）

確認・調査：調査区西側の標高 27.4m 付近の高位部に位置する。H-2 周堤（RM 層）掘り下げ後、V 層上面で褐色土の広がりを確認した。H-2 周堤の土層観察用に残したベルト（C-D）と直交するベルト（A-B）を残し、内部を掘り下げた。覆土上部（RM 層）の北東部から 2 cm 以下を主体とする扁平な円礫で構成される 400 点ほどの小砂利のまとまりが検出された。また、ベルトの断面の覆土中から P-22・23 が検出されている。

土層：大きく上下に分けられ、上部は H-2 の周堤（RM 層・1 層）、下部は屋根土の崩落土とみられる褐色土（2・3 層）である。中央には褐色土の貼り床層（4 層）が分布する。RM 層と屋根土の間に自然堆積土が見られず、廃絶後早い段階で周堤が形成されたと考えられる。

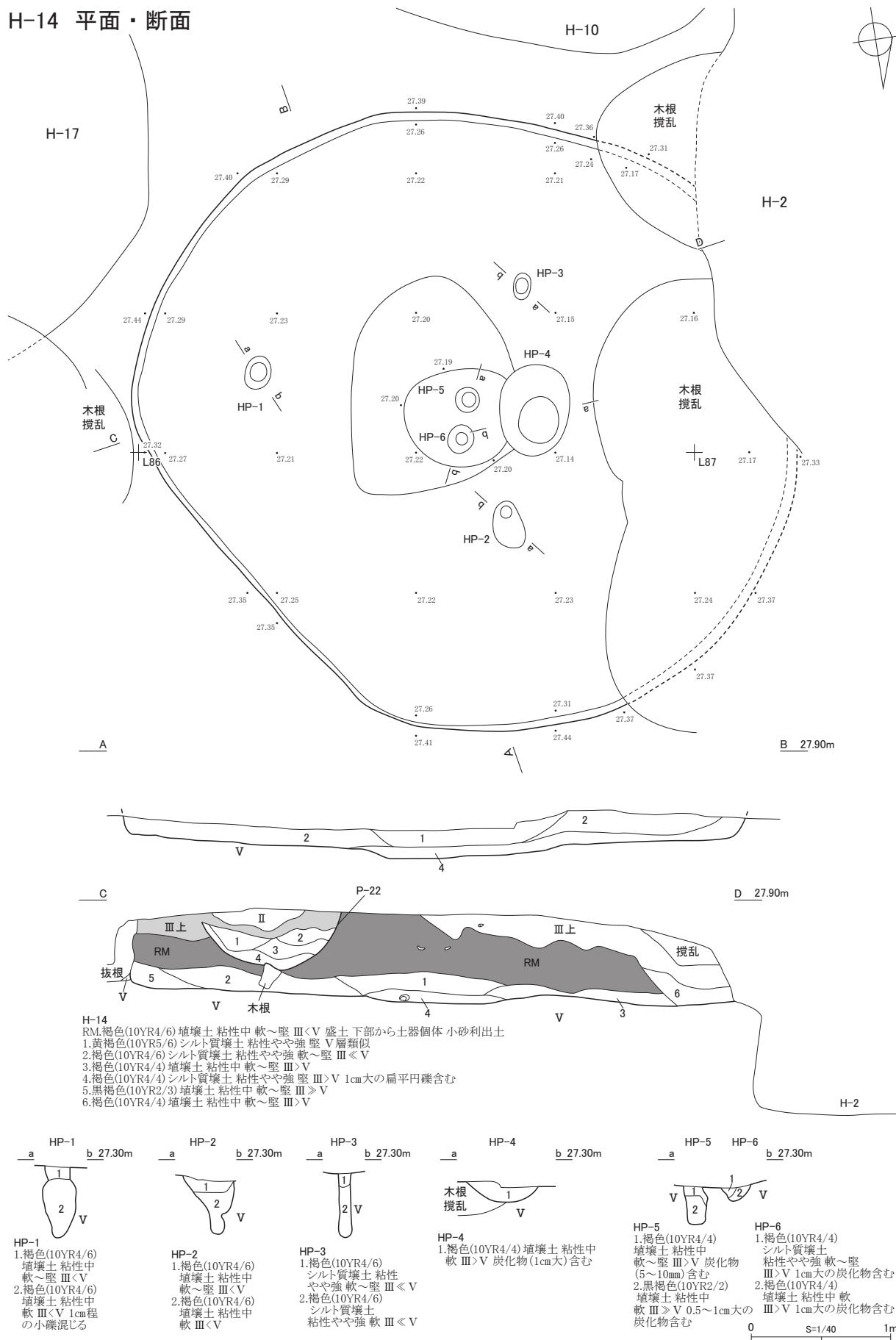
床面・壁：床面中央には貼り床が認められる。貼り床上面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は長円～隅丸方形である。

付属遺構：北東部が攪乱を受けているため、柱穴の配列など判然としないが、HP-1 は柱穴の可能性がある。HP-5 は中央にあり、浅い柱穴状である。HP-4 は長径 66 cm の浅い皿状のピットで、そのほかはそれぞれ特徴が異なる。床面に炉跡は検出されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は 1,337 点で、土器等が 677 点、石器等が 660 点である。土器等は II 群 b 類のみで 677 点が、石器等は石鏃 1 点、石槍 1 点、両面調整石器 1 点、つまみ付きナイフ 1 点、スクレイパー 3 点、石錐 1 点、R フレイク 5 点、剥片 235 点、石核 1 点、石のみ 1 点、礫 410 点が出土した。床面からは石鏃・石槍・石核などが出土している。

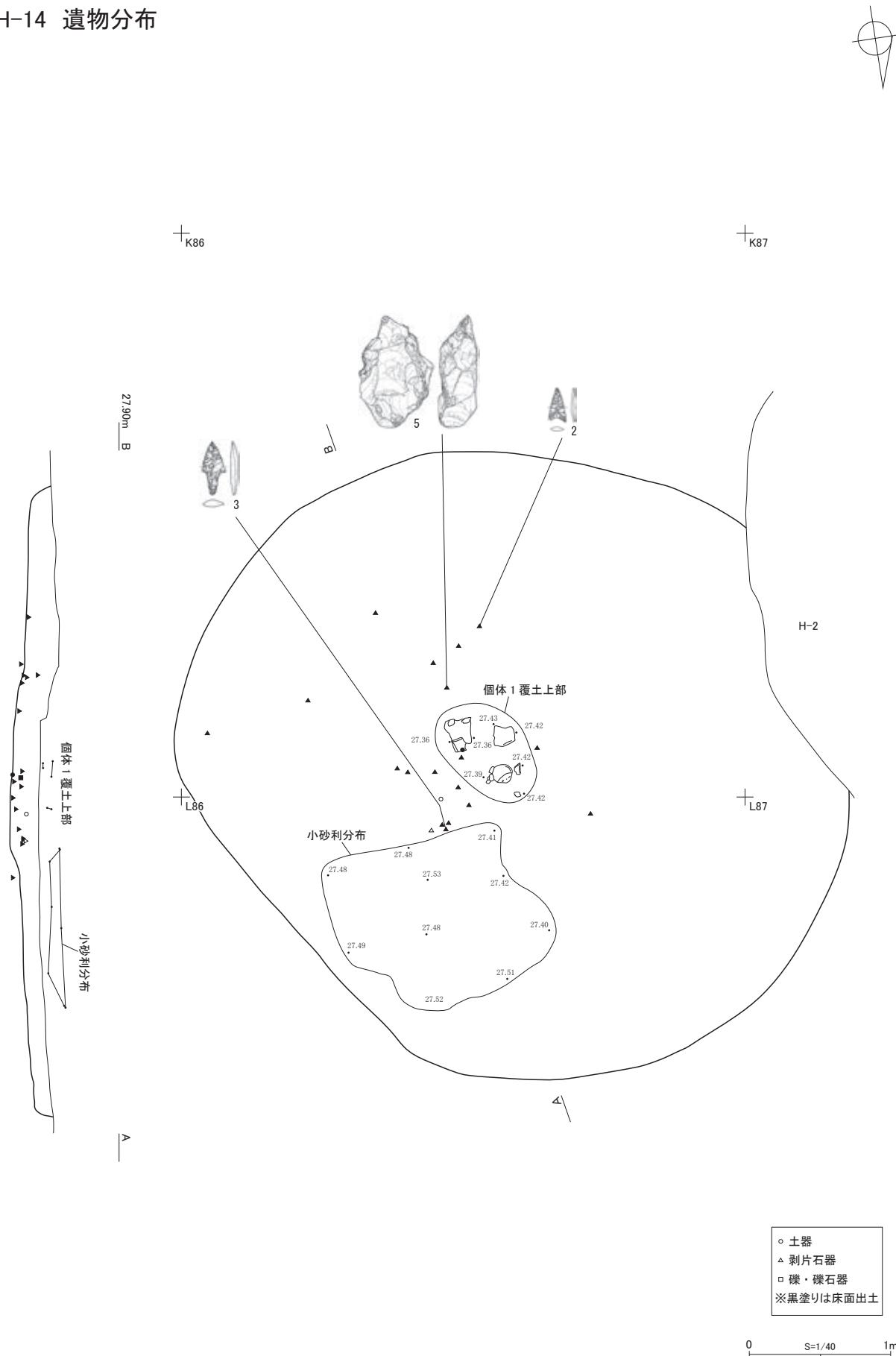
時期：床面検出の炭化物からは 4,960 ± 20 yr BP (K04-D19) の年代測定値が得られている。年代値はやや古く、RM 層との層位的関係や遺物・住居構造などから縄文時代前期後半円筒下層 b1～c 式期と

H-14 平面・断面

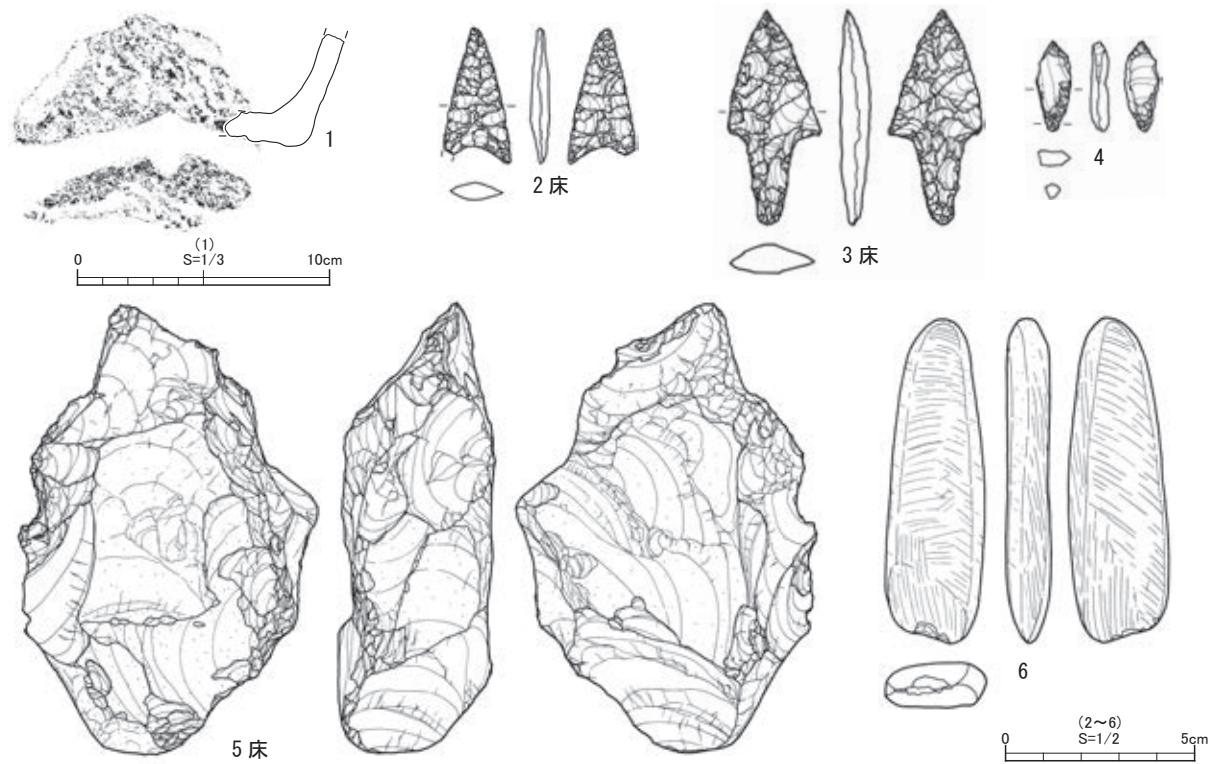


図VI-107 竪穴住居跡 (106) H-14(1)

H-14 遺物分布



図VI-108 竪穴住居跡 (107) H-14(2)



図VI-109 竪穴住居跡 (108) H-14 (3)

考えられる。

掲載出土遺物：(図VI-109-1～6、図版200)

土器：1はII群b類、円筒下層b1～b2式の底部片。

石器：2は石鏃IIIc類。3は明瞭な返しのある石槍。4はめのう製の小型の石錐。刃部に摩耗が見られる。5は石核VII類。上部に交互剥離が見られるが、剥離頻度は低い。6は石のみ。全体に擦痕が残るが、素材の形状をほとんど残し、刃部のみ丁寧に整形される。

(鈴木)

竪穴住居跡15 (H-15) (図VI-110～113、表VI-2、図版74・75)

確認・調査：調査区西側の標高27.4m付近の高位部に位置する。H-1周堤(RM層)掘り下げ後、V層上面でRM層の落ち込みを確認した。その中に直交するように土層観察用のベルトを設定し、四分割して調査を行った。北東部の覆土中からは焼土(HF-1)が検出された。

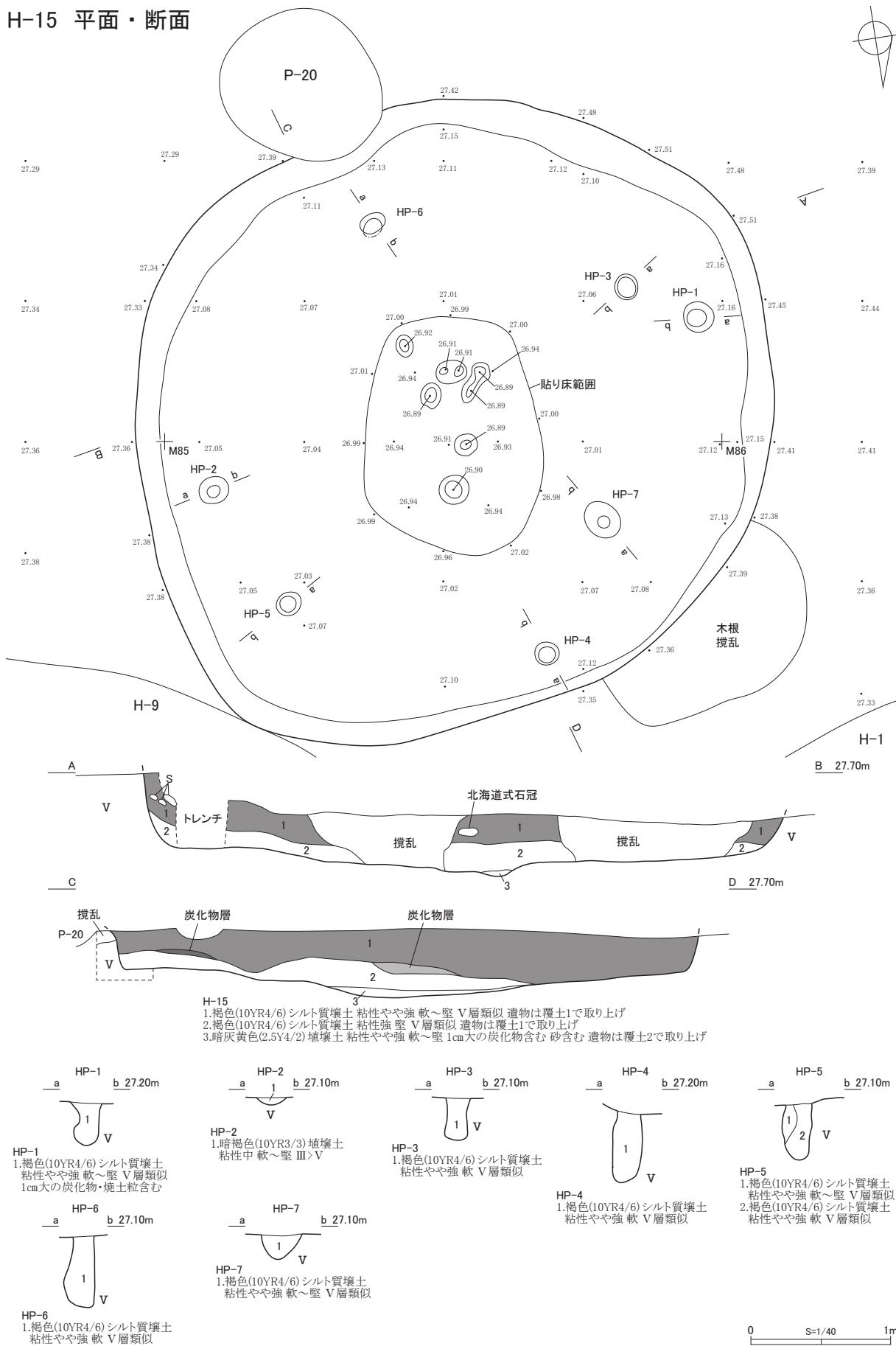
土層：大きく上下に分けられ、上部はH-1の周堤(RM層の覆土1)、下部は屋根土の崩落土である褐色土層(覆土2)である。床面中央には砂の混じる暗灰黄色の貼り床層(3層)が分布する。

床面・壁：貼り床の上面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は不整円～隅丸方形である。貼り床の下部には6か所の窪みが検出された。

付属遺構：主柱穴5基(HP-1・3～6)、浅い小型のピット2基(HP-2・7)がある。柱穴の配列では4本柱と考えられ、HP-4～6のほか、HP-1・3のどちらかか、もしくはどちらかに移設された可能性がある。床面に炉跡は検出されなかった。

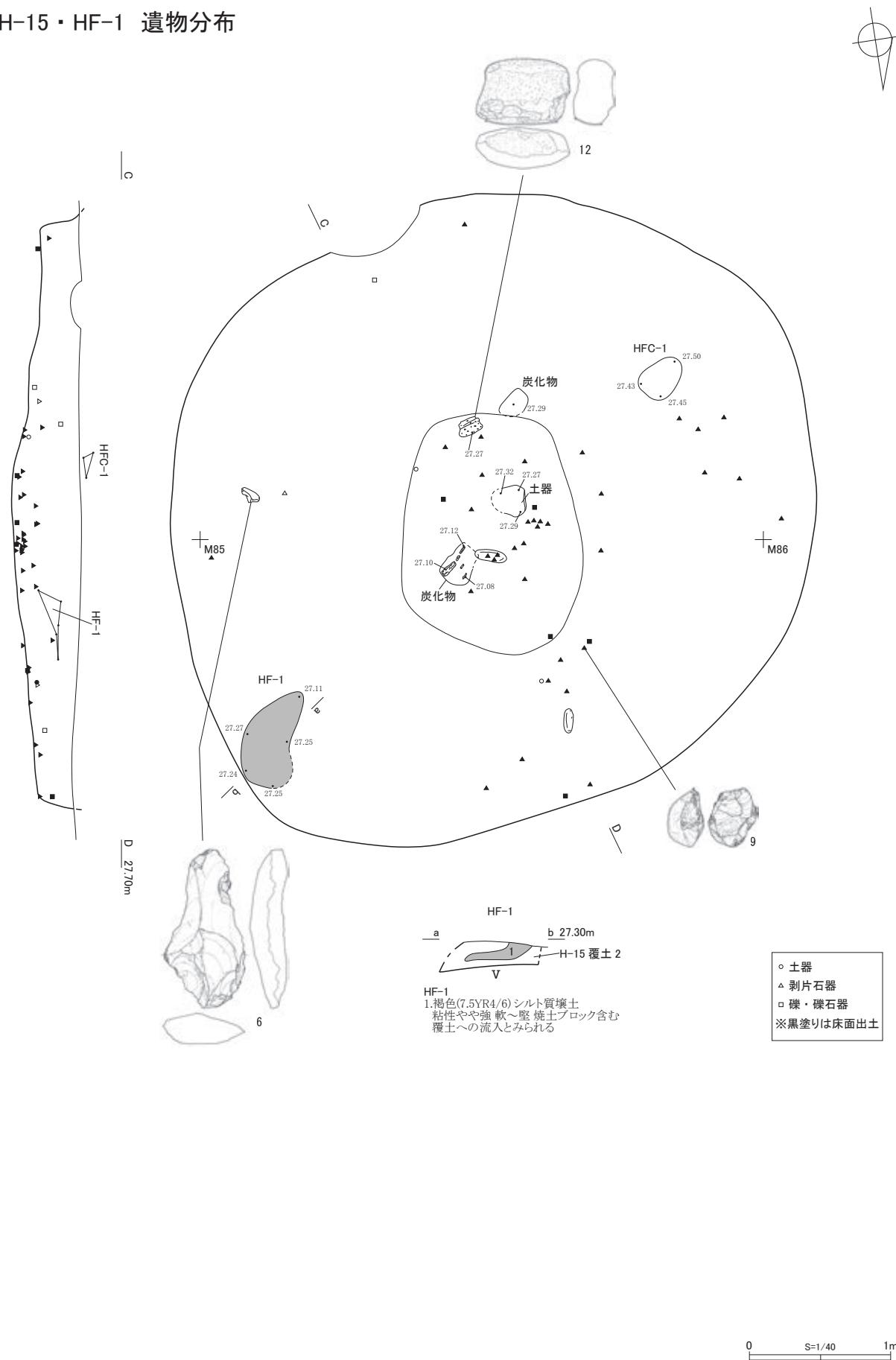
遺物出土状況：出土遺物の総数は1,849点で、土器等が479点、石器等が1,370点である。土器等はII群b類477点、焼成粘土塊2点が、石器等は石鏃1点、石槍1点、両面調整石器6点、スクレイパー1点、Rフレイク6点、剥片906点、石核13点、北海道式石冠1点、扁平打製石器1点、石鋸1点、たたき石2点、砥石1点、原石1点、石錐1点、加工痕のある礫1点、礫423点、垂飾2点、石製品2点が出土した。

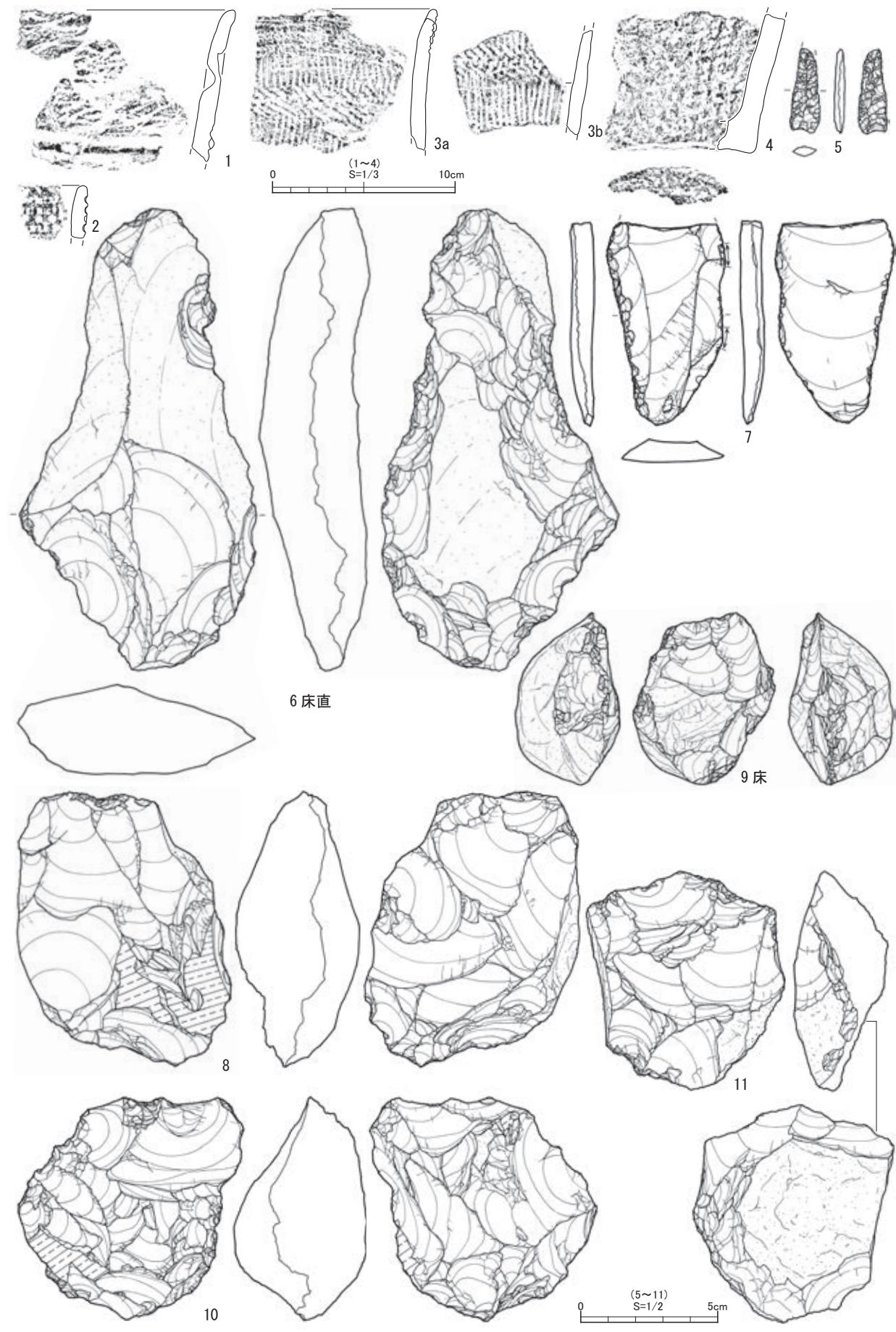
H-15 平面・断面



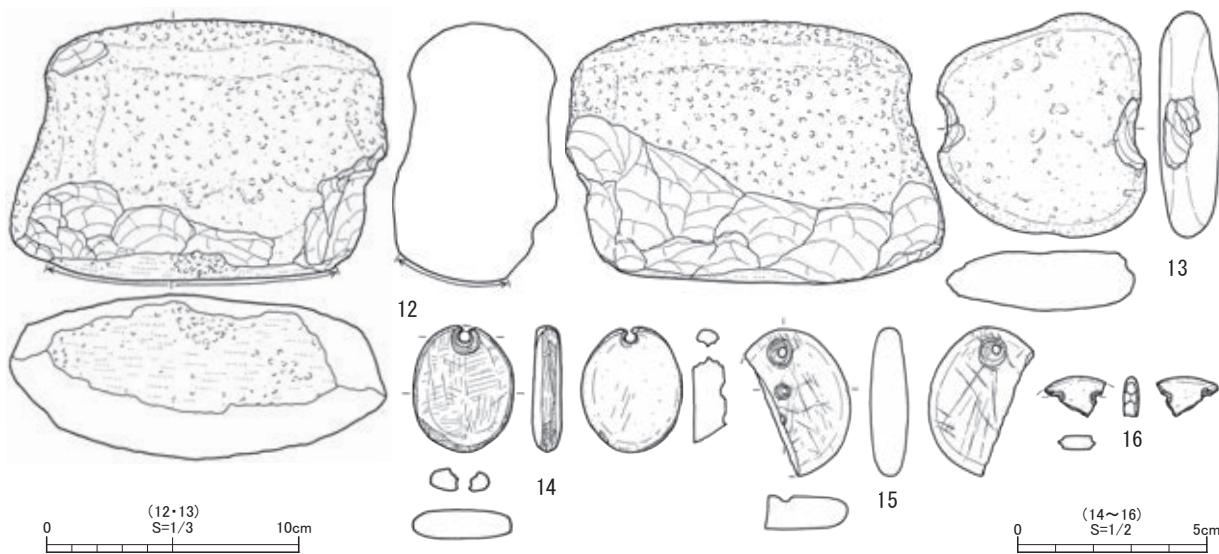
図VI-110 竪穴住居跡 (109) H-15(1)

H-15・HF-1 遺物分布





図VI-112 積穴住居跡 (111) H-15 (3)



図VI-113 壇穴住居跡 (112) H-15 (4)

覆土中から炭化物・北海道式石冠・剥片集中 (HFC-1) などが検出され、床面からは両面調整石器・石核などが出でた。

時期:床面直上層出土の炭化物からは $4,760 \pm 30$ yrBP (K04-D20) の年代測定値が得られている。遺物・年代測定値から縄文時代前期後半円筒下層 b1 ~ c 式期と考えられる。

掲載出土遺物: (図VI-112-1 ~ 図VI-113-16、図版 200)

土器: 1 ~ 4 は II 群 b 類。1 は円筒下層 b2 式。上下を沈線で縁取られた、指頭圧痕のある隆帶で区画された口縁部に、単軸絡条体 5 類が横方向に施文され、鋸歯状の沈線が描かれる。2 は円筒下層 b1 ~ c 式で、横方向の押引き文が複数列見られる。3 は円筒下層 d1 式。口縁部は逆擦りの 2 本 1 組の縄線が 3 段あり、胴部には結束第 1 種斜行縄文が見られる。4 は円筒下層 b1 ~ c 式の底部で、RLR 斜行縄文が施文される。

石器: 5 は石鏸 III b 類。6 は両面調整石器。素材角礫の原石面が大きく残り、剥離の初期段階で遺棄される。7 はスクレイパー I b 類。右側縁の張り出した 2 か所には上下方向の擦痕を伴う摩耗があり、溝切り状の作業に使用されている。8 ~ 11 は石核。8 は I b 類、9 ~ 11 は II a 類。9 は 7 cm ほどの小型の原石素材。11 は砂が凝集した原石外皮が残る。12 は北海道式石冠。全面敲打で整形され、持ち手部分の稜が高い位置にある。下面との角度が鋭角になる裏面側の剥落が激しく、右側縁角を欠損する。13 は石錐。対向する縁辺に打ち欠きによる抉りが作られる。14 ~ 15 は垂飾。どちらも素材の形状を大きく変えず、14 は側面が作出されるが、15 は素材の丸みが残る。14 は整形後、正面側から穿孔されるが上縁に達して壊れている。15 は両面から穿孔され、断面は両面すり鉢状である。左下部は欠損しているが、正面中央縦に窪みが 2 か所確認できる。表面には擦痕より深い単独の傷が複数残る。16 は全体が不明なため石製品とした。自然礫の 2 か所に断面が両面ともすり鉢状の穿孔が認められる。

(鈴木)

壇穴住居跡 16 (H-16) (図VI-114 ~ 117、表VI-2、図版 76 ~ 78)

確認・調査: 調査区北西側の標高 27m 付近の高位部に位置する。H-1 ~ 4 の掘り上げ土の RM 層を除去し、III 層 ~ V 層まで掘り下げた段階で RM 層の落ち込む範囲を確認した。遺構を想定して Q ライン (A-B) とこれに直交する任意のラインに土層観察用のベルトを設定し、落ち込み範囲の掘り下げを行った。なおベルト位置は H-3 との間にある攪乱範囲や一輪車による排土搬出路を避ける都合上、遺構長軸から外れる結果となった。RM 層および下位のにぶい黄褐色 ~ 暗褐色土を掘削して床面・壁を検出し、

竪穴住居跡であることを確認した。土層堆積状況を記録した後にベルトを除去し、床面精査を行なつて付属遺構の検出に努め、竪穴構造を記録した。H-16はH-3に接するが、その範囲全てが攪乱により破壊され、平面検出状況や土層断面で切り合い関係を確認することができなかつた。また竪穴範囲は北側遺構外に続いており、調査した面積は遺構全体の6割程度とみられる。平面形は円形ないし橜円形、大きさは復元で4.5～5m程度と推測される。

土層：竪穴はRM層直下のⅢ下層から掘り込みが認められるが、高位部全体の観察からⅢ下層はRM層堆積前の削平が確認されている。削平と竪穴構築の先後関係は不明で、構築面も断定することができない。RM層は竪穴の窪み全体を埋めるように堆積しており、厚い箇所では0.8mを超える。1～6層は住居廃絶からRM層堆積の間に形成された覆土で、1～4層は黄褐色土（V層）を主体とし掘り上げ土の投げ込みもしくは屋根土などの崩落、5・6層は暗褐色土で住居廃絶直後の流入土とみられる。また7層は南西側の段状に高い床面上に堆積するが、断面観察からH-16が営まれた際には埋め戻され、4・7層界が壁をなしていたと考えられる。別遺構の覆土の可能性も考えられるが、壁平面形状が連続的であることから、H-16構築時に掘り過ぎた範囲を7層で埋め戻したものと理解した。

床面・壁：床面は概ね水平であるが、中央部で低く壁際でややせり上がる。また竪穴中央部には灰黄褐色および黒褐色の砂が貼られた範囲と、その周囲に暗褐色に汚れた範囲が認められた。壁はやや急角度に立ち上がる。

付属遺構：付属遺構は主柱穴と砂ピットがある。また上述のように竪穴中央部には砂壌土の貼り床がみられた。主柱穴はHP-1・4で、規模は径25×深さ50cm、形状は概ね円筒形だが底面は丸みを帶び、床面から垂直に掘り込まれている。位置は壁から0.5mほど内側に2.5mの間隔で配置されている。主柱穴は調査区外にも配置が推測され、4本主柱穴と考えられる。

砂ピットは7基でHP-2・3・5～9である。規模は径20cm以下・深さ20cm以下を主体とし、位置は砂貼り床・汚れた床面の範囲にまとまっている。同範囲には灰白色砂のブロックや礫の配置もみられる。竪穴中央部の貼り床・砂ピット・礫配置の付属施設の構造はH-9にも認められ、特徴的である。砂ピットの堆積状況には、①砂が単層で詰まっているもの（HP-2・3・8・9）、②底面～下部に砂が詰まり上部に黄褐色土や貼り床の黒褐色砂壌土が貼られるもの（HP-5・6）、③底部～下部が黄褐色土で上部に砂が詰められたもの（HP-7）のバラエティがみられる。砂壌土の貼り床は1.25×0.9mのやや不整な範囲にみられ、堆積は若干窪んだ箇所に5cmほどの厚さで認められた。また窪みの底面は細かく凹凸していた。

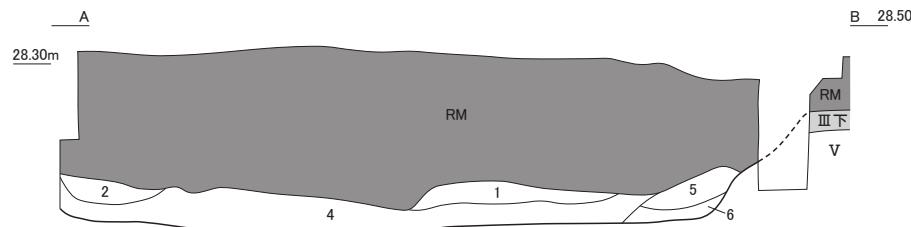
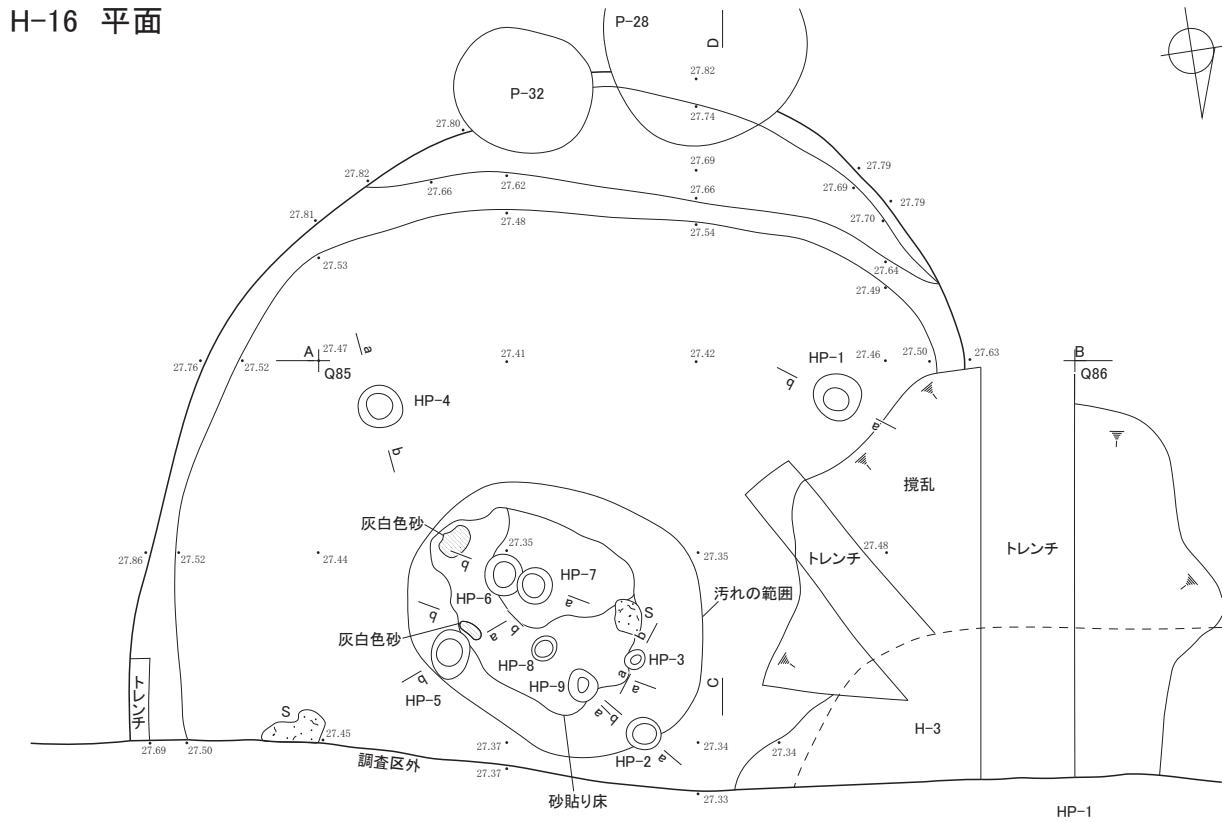
遺物出土状況：出土遺物の総数は1,506点で、土器等が427点、石器等が1,079点である。土器等はⅡ群b類のみで427点が、石器等は石鏃5点、石槍1点、両面調整石器4点、つまみ付きナイフ1点、スクレイパー9点、石錐1点、Rフレイク11点、剥片1,010点、石核8点、扁平打製石器5点、たたき石1点、石皿5点、原石2点、加工痕のある礫1点、礫15点が出土した。出土土器は床面・覆土共にⅡ群b類で占められる。また床面からは扁平打製石器3点と石皿など礫石器のほか、凝灰岩の大型礫が出土している。

時期：出土遺物、RM層との層位的関係、住居構造から、縄文時代前期後半円筒下層b1～c式期と考えられる。
(坂本)

掲載出土遺物：(図VI-116-1～図VI-117-19、図版200・201)

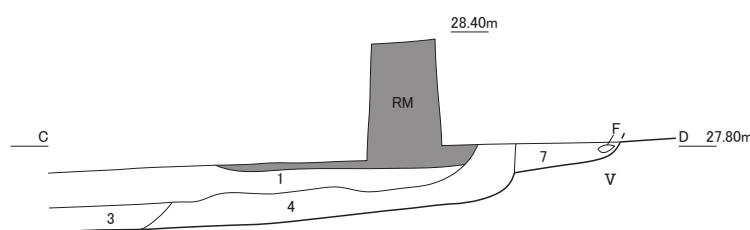
土器：1～5はⅡ群b類。1は円筒下層b2式。器形はバケツ形で、口縁部には単軸絡条体5類が施文され、口縁部下の段差にはその原体の側面圧痕が縦に連続的に押捺される。胴部には段の違う縄文RLR・Lが斜めに施文される。2～5は円筒下層b1～c式。2は不整綾絡文、3は縄線文、4は段の違う縄文

H-16 平面



H-16

- 1.にぶい黄褐色(10YR4/3)埴壌土 粘性強 堅 ロームブロック主体土 ロームブロックやや粗い
- 2.灰黄褐色(10YR4/2)埴壌土 粘性強 すこぶる堅 褐色土とロームブロックが斑状に混じる
- 3.褐色(10YR4/4)埴壌土 粘性強 堅 ローム主体土 比較的均質
- 4.にぶい黄褐色(10YR4/3)埴壌土 粘性強 堅~やや軟 褐色土~黄褐色土中にロームブロック散在
- 5.暗褐色(10YR3/3)埴壌土 粘性強 堅 粗くロームブロック混じる 三角堆積土
- 6.暗褐色(10YR3/4)埴壌土 粘性強 堅 ロームブロック主体に褐色土斑状に混じる 壁崩落土
- 7.褐色(10YR4/6)埴壌土 粘性強 堅 ローム主体土 遺物含 別遺構の覆土の可能性
- RM:褐色(10YR4/6)埴壌土 粘性強 堅 ローム主体土 炭化物散在5%



H-16HP-5

- 1.にぶい黄褐色(10YR4/3)埴壌土 粘性中 堅 ロームと暗褐色~黒褐色の砂が斑状に混じる炭化物含1%
- 2.黄褐色(2.5Y5/3)砂 粘性なし すこぶる堅 純粹な砂が詰まる
- 3.黄褐色(2.5Y5/4)砂~砂壌土 粘性なし 堅 砂にはローム粘土と炭化物混じる
- 4.灰オーリーブ色(5Y5/2)砂 粘性なし すこぶる堅 純粹な砂が詰まる

H-16HP-6

- 1.オリーブ黒色(5Y3/1)砂壌土 粘性弱 やや軟 上位の砂貼床の土
- 2.にぶい黄褐色(10YR5/3)砂 粘性なし すこぶる堅 純粹な砂が詰まる

H-16HP-7

- 1.オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂 粘性なし すこぶる堅 純粹な砂
- 2.にぶい黄褐色(10YR5/3)砂 粘性弱~なし すこぶる堅 HP-6の2層とロームブロックが混じる

H-16HP-8

- 1.オリーブ黄色(5Y6/3)砂 粘性なし すこぶる堅 純粹な砂層 きゅうぎゅうに詰まる

H-16HP-9

- 1.褐色(10YR4/4)壤土 粘性弱 やや軟 砂貼床の土とロームブロックが混じる

H-16HP-1

- 1.黄褐色(10YR5/6)埴壌土 粘性中~強 堅 均質なローム主体土
- 2.褐色(10YR4/4)埴壌土 粘性強 堅~やや軟 褐色土とロームブロックが斑状に混じる
- 3.褐色(10YR4/6)埴壌土 粘性強 軟 ローム主体のボンボンの土

HP-2

H-16HP-2

- 1.灰オーリーブ色(5Y6/2)砂 粘性なし すこぶる堅 グライ化した砂か

HP-3

H-16HP-3

- 1.黄褐色(2.5Y5/3)砂 粘性なし すこぶる堅 炭化物粒含む

HP-4

H-16HP-4

- 1.褐色(10YR4/4)埴壌土 粘性強 軟 ローム主体でボンボンの土
- 2.にぶい黄褐色(10YR4/3)埴壌土 粘性強 軟 壤色土とローム粒が混じりあうボンボンの土

砂貼床

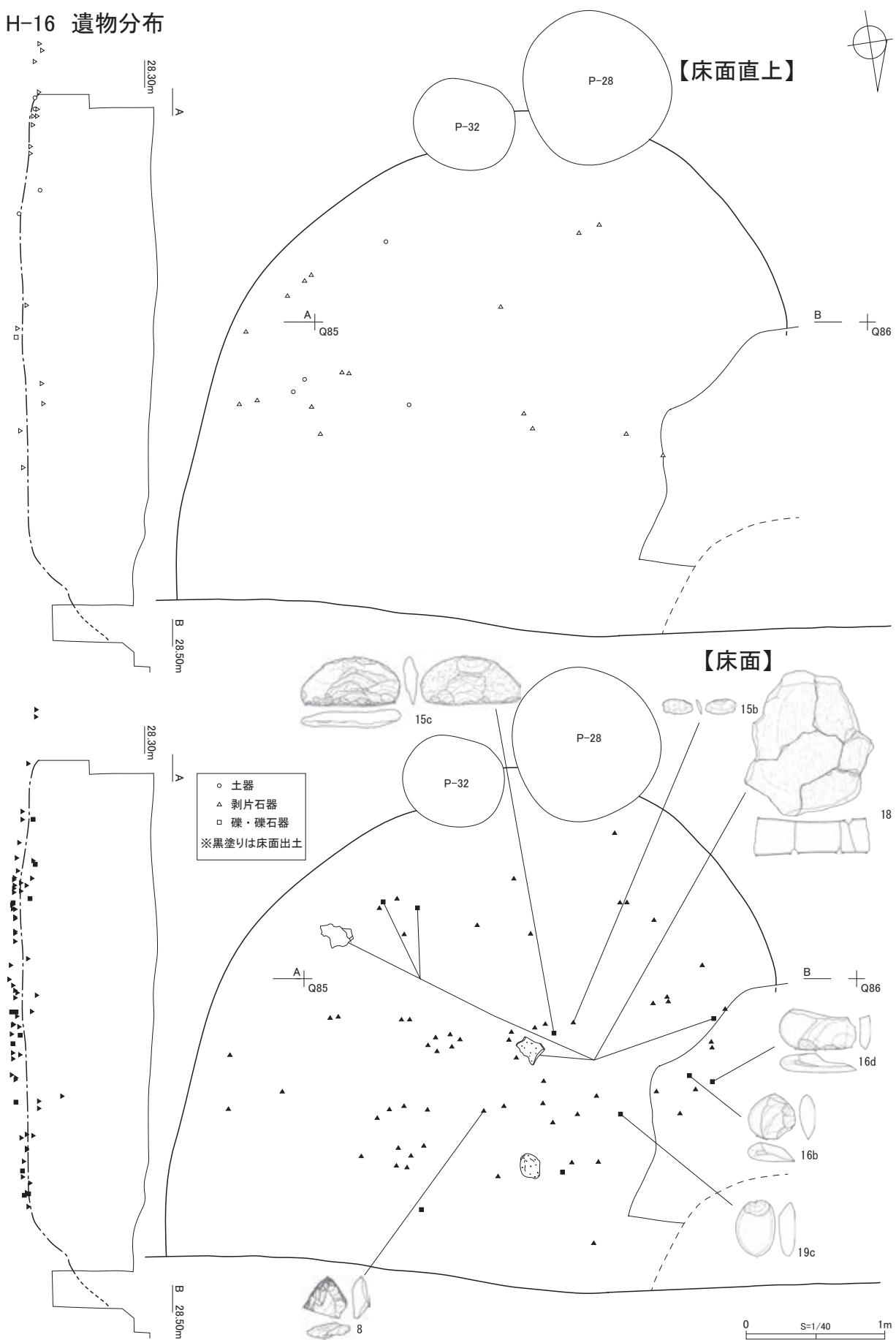
H-16砂貼床

- 1.灰黄褐色(10YR5/2)埴壌土 粘性中 壓 ロームと砂が斑状に混じる土
- 2.黒褐色(10YR3/1)砂壌土 粘性中 壓 HP-2,3覆土にみられる灰白色の砂質土主体 砂が若干混じるが、黒褐色の砂質土主体

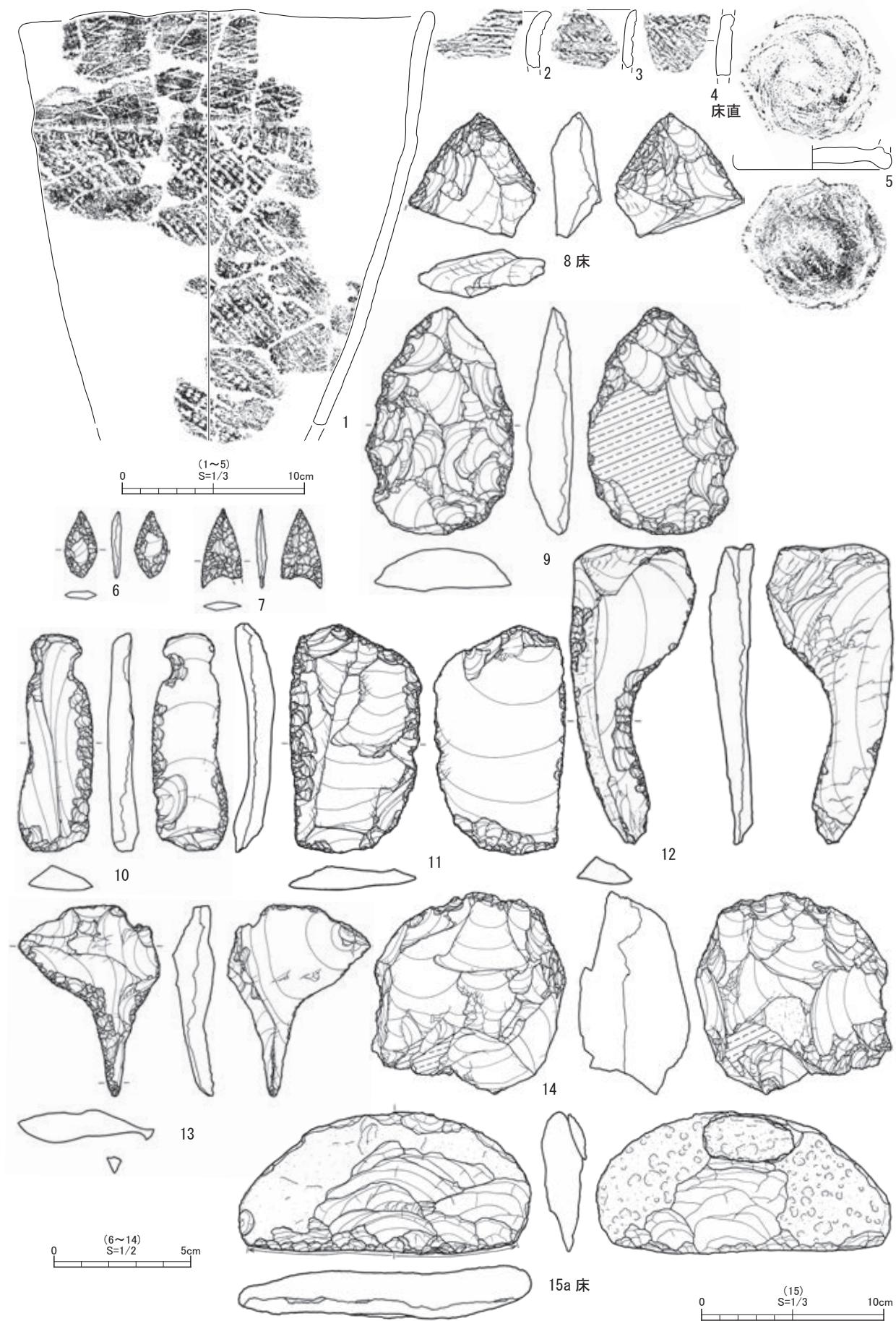
0 S=1/40 1m

図VI-114 積穴住居跡 (113) H-16(1)

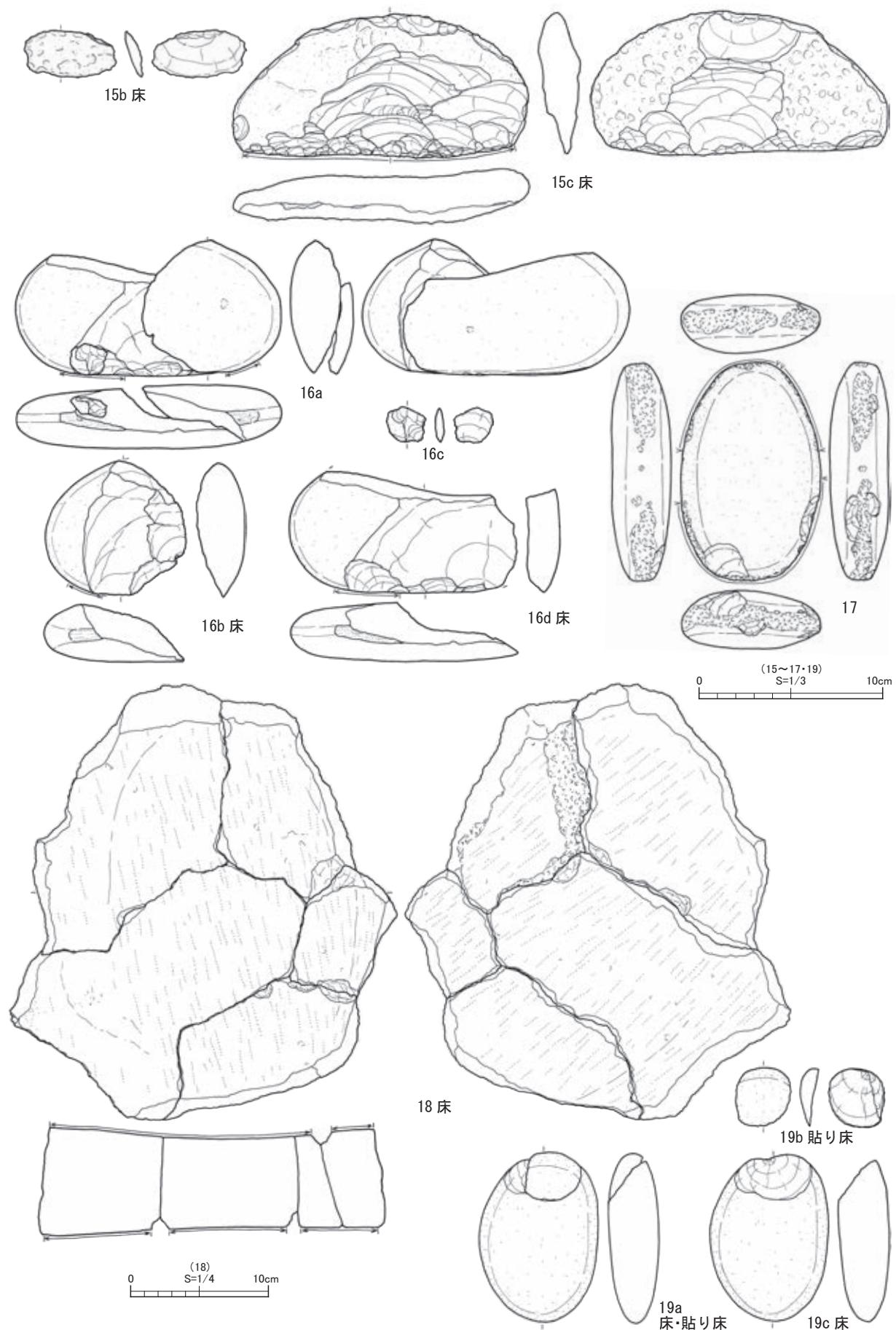
H-16 遺物分布



図VI-115 竪穴住居跡 (114) H-16 (2)



図VI-116 積穴住居跡 (115) H-16(3)



図VI-117 竪穴住居跡 (116) H-16(4)

RLR・L の上に同原体の側面圧痕が施される。5 は底面のみで側面は剥落する。

石器：6・7 は石鏃。6 は I a 類、7 は III c 類。6 は両面に素材面が残る。8 は石槍の先端部で粗い加工段階で折損している。9 は両面調整石器。幅広で裏面に大きく節理面が残る。10 はつまみ付きナイフ。縦長剥片の素材先端側につまみ部が作出される。11・12 はスクレイパー。11 は II 類、12 は III 類。13 は石錐。ウートゥルパッセにより細長く突き出た部分を刃部として加工している。14 は石核 II a 類。15・16 は扁平打製石器 III 類。15a は本体 15c の裏面上縁中央に剥片が接合している。正面上縁にも剥離があることから敲打による剥落と考えられる。16a は剥片との接合資料。下縁部の敲打により 16b が破損している。その後も、16d には 16c を含めて剥落があり、再利用されたようである。17 はたたき石 I d 類。敲打痕はあばた状である。18 は石皿。5 点の破片が接合している。周縁部はすべて破断面で、一部縁辺が丸くなる部分がある。被熱とみられる赤化が認められる。表裏面には皿状の浅いすり面が形成されている。19a は加工痕のある礫 19c と剥片 19b の接合資料。打点が明瞭で敲打ではなく、打ち欠きである。

(鈴木)

豎穴住居跡 17 (H-17) (図VI-118・119、表VI-2、図版 79・80)

確認・調査：調査区西側の標高 27.4m 付近の高位部に位置する。周辺の RM 層・III 層掘り下げ後、V 層上面で暗褐色土の広がりを確認した。その中心に直交するように土層観察用のベルトを設定し、四分割して調査を行った。

土層：覆土は屋根土の崩落土である暗褐色土（1 層）のみである。

床面・壁：床面中央はやや落ち込み、壁は斜めに立ち上がる。平面形は隅丸三角形に近い。

付属遺構：直径 20 cm 前後の HP-1・2・5・8 は柱穴とみられ、HP-7・9 も 10 cm 強で柱穴の可能性がある。それらの配列は不整で、本来の本数は不明である。その他中央付近に浅い楕円形のピット 2 基 (HP-3・4)、浅い小ピット 2 基 (HP-6・10) が検出された。床面に炉跡は検出されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は 235 点で、土器等が 62 点、石器等が 173 点である。土器等は II 群 b 類のみで 62 点が、石器等は両面調整石器 2 点、スクレイパー 1 点、R フレイク 2 点、剥片 137 点、石核 1 点、扁平打製石器 1 点、たたき石 3 点、礫 26 点が出土した。

床面からは両面調整石器やスクレイパーなどが出土した。

時期：出土遺物、RM 層との層位的関係、住居構造から縄文時代前期後半円筒下層 b1～c 式期と考えられる。

掲載出土遺物：(図VI-119-1～3、図版 201)

土器：1 は II 群 b 類。多軸絡条体の縦回転施文で、内面はよく磨かれ、内底面断面は丸い。円筒下層 d1～d2 式。

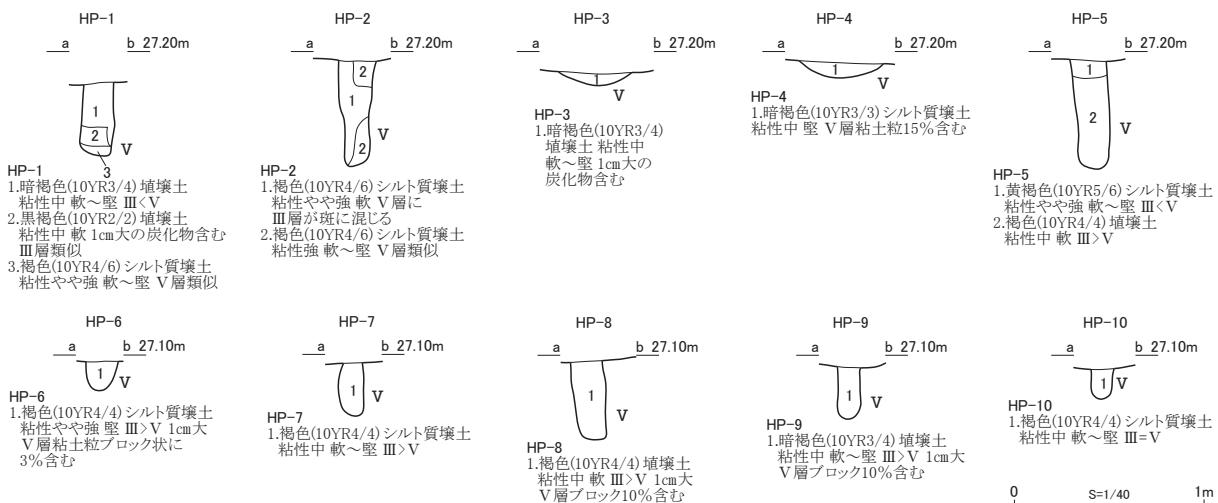
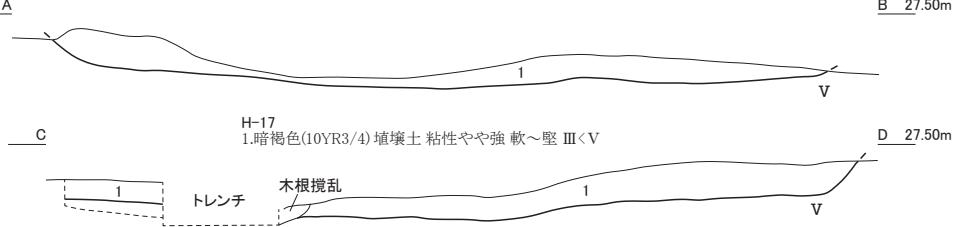
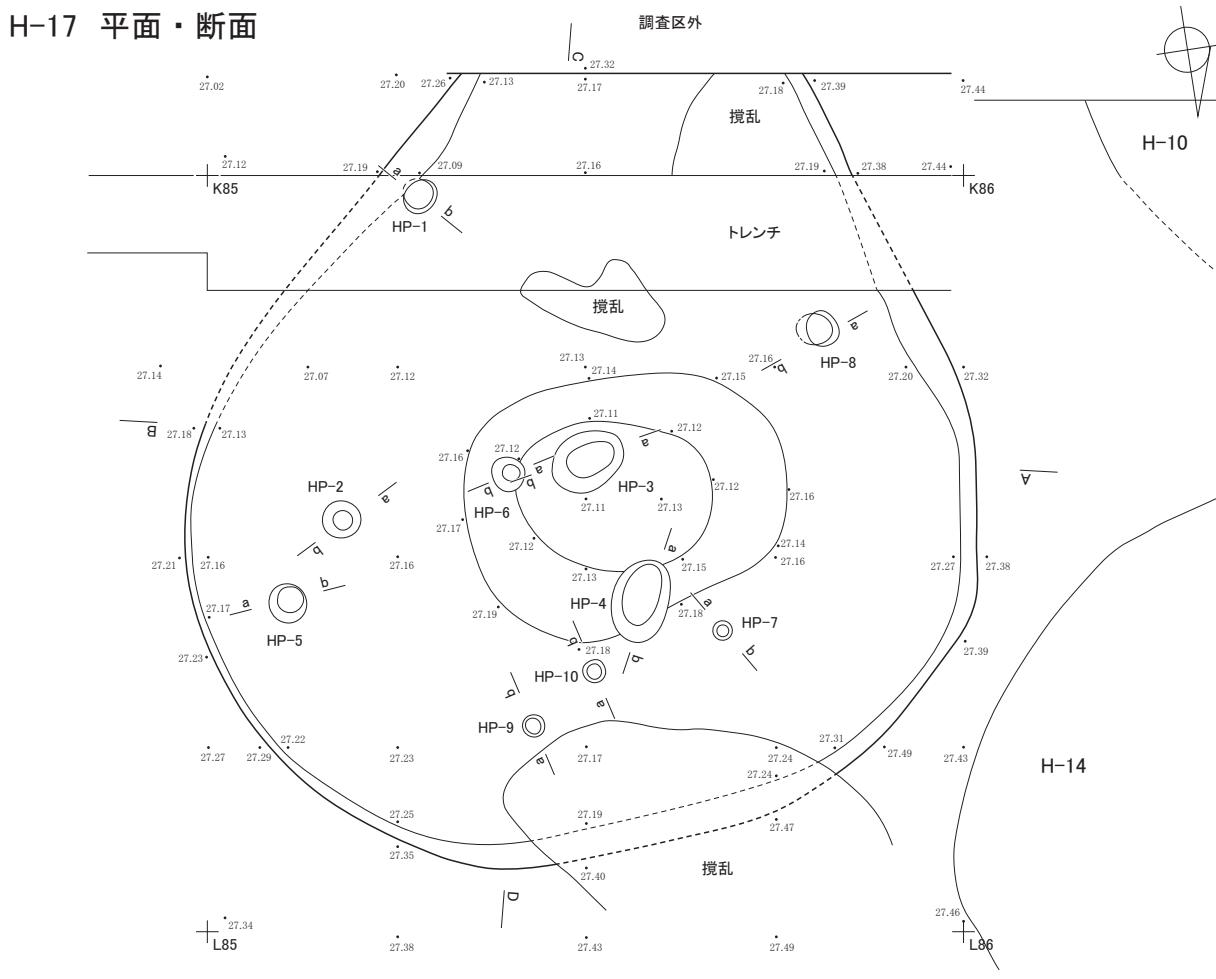
石器：2 は両面調整石器。正面に砂の凝集した外皮が残り、それが原因で折損している。3 はたたき石 I a2 類。

(鈴木)

豎穴住居跡 18 (H-18) (図VI-120・121、表VI-2、図版 81)

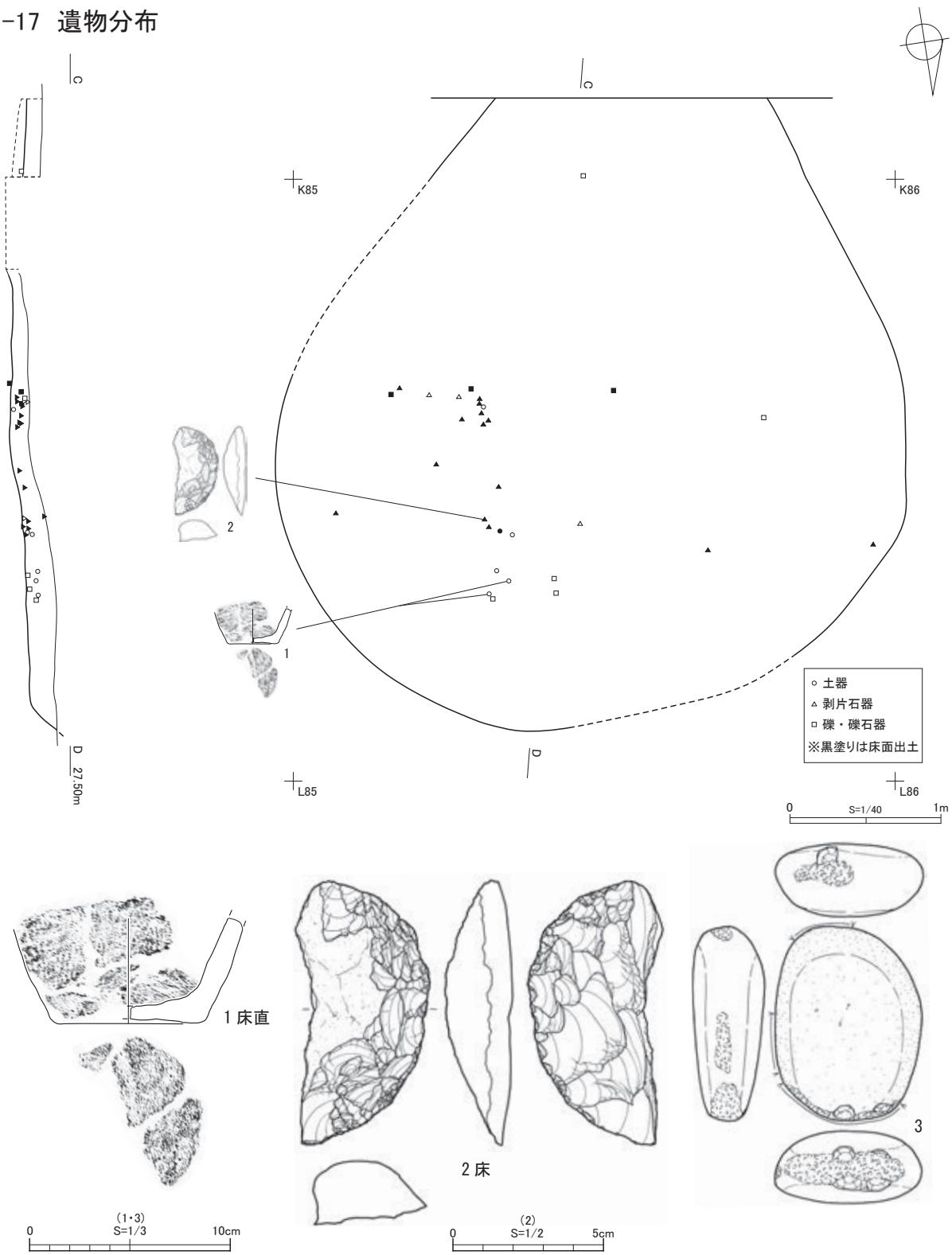
確認・調査：調査区北西側の標高 27m 付近の高位部に位置する。H-4 調査で南西壁を検出した際、壁面に豎穴の断面を確認した。H-4 周堤盛土と考えられる RM 層を掘削して下位の III 下～V 層を検出し、その検出面に RM 層およびぶい黄褐色～褐色土が楕円形に落ち込む豎穴の範囲を確認した。任意の 2 方向のライン (A-B, C-D) に土層観察用のベルトを設定し、覆土の掘り下げ、床・壁の検出を行った。またこの過程で RM 層を掘り込んだ P-33 を確認し、調査した。H-18 堆積状況の記録後にベルトを除去し、床面精査を経て付属遺構の確認・調査を進めた。豎穴住居跡は北側を H-4 と H-19 に切られるが、H-19 の床面が H-18 より高く構築されていたため、H-19 の範囲まで H-18 の床面を検出することがで

H-17 平面・断面



図VI-118 竪穴住居跡 (117) H-17(1)

H-17 遺物分布



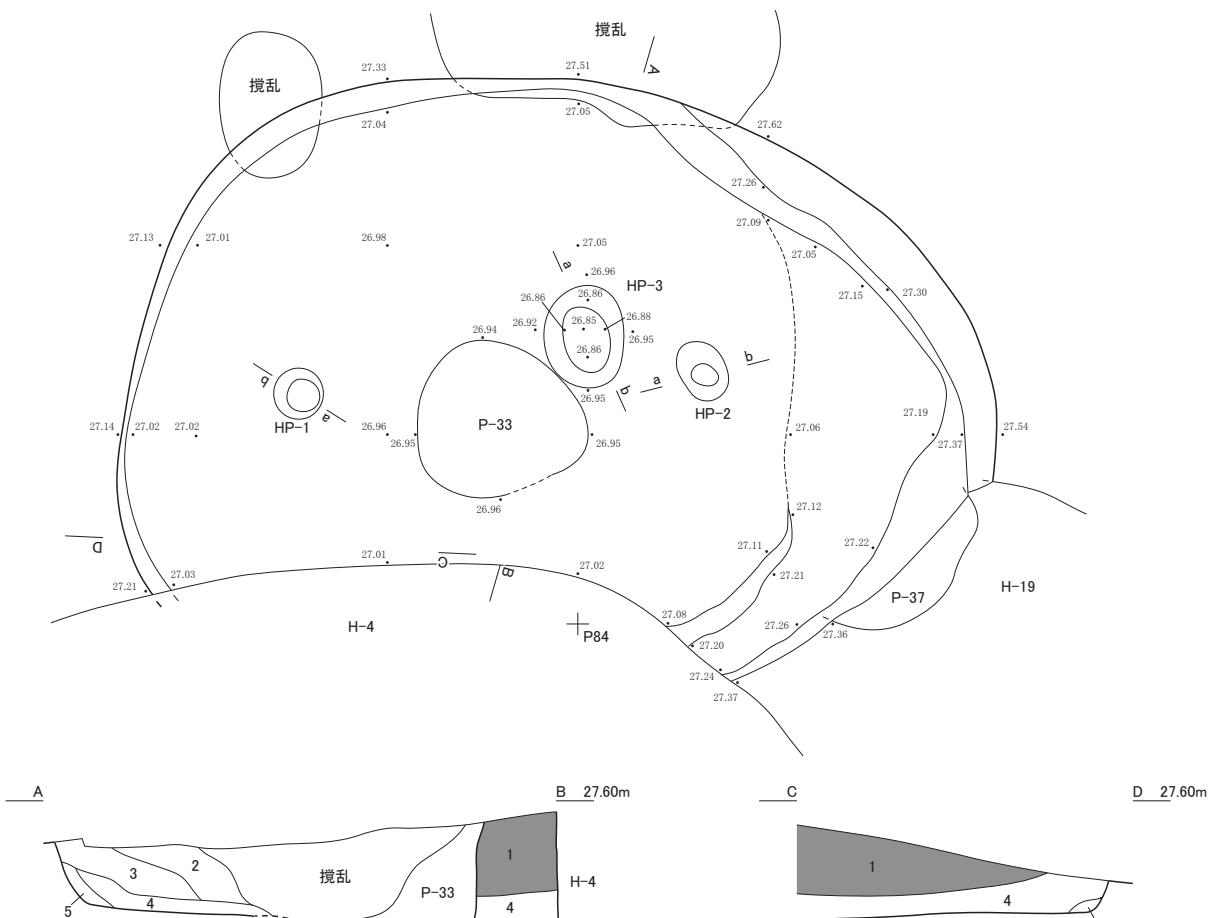
図VI-119 堪穴住居跡 (118) H-17(2)

きた。調査では構築時の7割程度を確認できたとみられる。堪穴形状は楕円形、大きさは復元で長軸4.6×3.6m前後、長軸は南東-北西方向に認められる。

土層: 覆土は上下に分けられ、上部はH-4周堤盛土と考えられるRM層(1層)、下部は流入土や壁崩落土とみられる2・3・5・6層、屋根土や他遺構の掘り上げ土の可能性が考えられる4層で構成される。

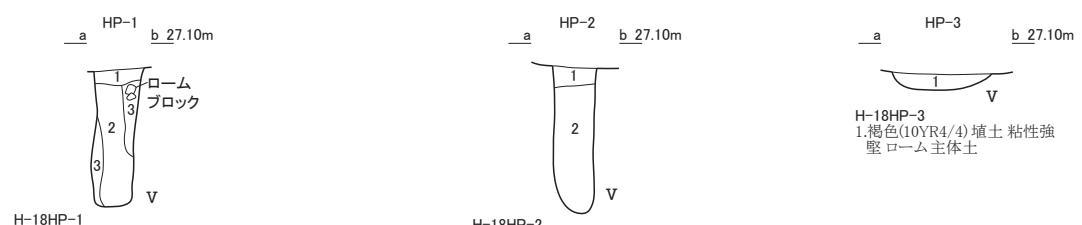
H-18 平面・断面

+084



4-19

- 褐色(10YR4/6)埴壌土 粘性中 壓ローム主体土 RM層とみられる
2.にぶい黄褐色(10YR4/3)埴土 粘性強 壓褐色土中にロームブロック3%散在 炭化物粒1%
3.褐色(10YR4/4)埴土 粘性強 壓2に比べロームブロック多 15~20% 炭化物粒1%
4.暗褐色(10YR3/3)埴土 粘性中へ強 すぐぶる堅 均質、緻密な暗褐色土中にロームブロック5%散在
5.暗褐色(10YR3/3)埴土 粘性強 壓へや軟 壓褐色土中にロームブロック3%程度
6.褐色(10YR4/4)埴壌土 粘性中 壓ロームブロック主体 壓の崩落とみられる



H-18HP-1
1.にぶい黄褐色(10YR4/3)埴土
粘性強・堅やや軟 褐色土主体に
径0.5cm以下のロームブロック散在
2.暗褐色(10YR3/3)埴土 粘性強
やや軟・暗褐色土とローム粒が
混じりあう ボンボンの土
3.褐色(10YR4/6)埴土 粘性強
やや軟・軟ロームブロック主体の
ボンボンの土

H-18HP-2
1.褐色(10YR4/4) 塗土 粘性強
やや軟ローム主体土
2.にぶい黄褐色(10YR4/3) 塗土
粘性強軟～しよう 暗褐色土と

H-18HP-3
1.褐色(10YR4/4) 壤土 粘性強
堅口一木主体土

H-18HP-3
1.褐色(10YR4/4) 壤土 粘性強
堅口一木主体土

0 S=1/40 1m

図VI-120 竪穴住居跡 (119) H-18(1)



図VI-121 竪穴住居跡 (120) H-18 (2)

堆積過程を復元すれば、①住居廃絶後の壁の崩落や土の流入、②屋根土崩落もしくは近隣遺構掘り上げ土の投げ込み、③H-4構築時のRM層の堆積、④P-33の構築、の推移が考えられる。

床面・壁：床面は概ね水平・平坦に作られるが、中央部が若干低く壁へ向かってせり上がる。壁は急角度の立ち上がりが認められた。

付属遺構：付属遺構は主柱穴2基と土坑1基を確認した。主柱穴はHP-1・2で、規模は長径30cm前後×深さ75cm、断面は円筒形で床面と垂直に掘り込まれている。配置は長軸方向に並ぶように認められる。土坑はHP-3で浅鉢状である。竪穴の中央部付近に位置している。

遺物出土状況：出土遺物の総数は581点で、土器等が244点、石器等が337点である。土器等はⅡ群b類のみで244点が、石器等は両面調整石器3点、つまみ付きナイフ1点、Rフレイク3点、剥片220点、石核2点、すり石3点、たたき石2点、砥石2点、原石2点、加工痕のある礫1点、礫98点が出土した。土器は全て覆土から出土している。

時期：出土遺物およびH-4・19より古い切り合い関係、住居構造から縄文時代前期後半円筒下層b1～b2式期と考えられる。
(坂本)

掲載出土遺物：(図VI-121-1～5、図版202)

土器：1～3はⅡ群b類。1は円筒下層b2式。口縁部に縄線、胴部に単軸絡条体5類が施文される。2は円筒下層b1～c式で、底径14cmの大型の底部片。3は円筒下層b1～b2式。大型土器の胴部片で、単軸絡条体1類の間にLR斜行縄文の帶が入る。

石器：4はすり石Ⅱ類。使用頻度は低い。5は砥石。周縁は上縁部に大型橢円礫の縁辺部が残るが、その他は折れ面である。両面に幅10cmほどの溝状のすり面がやや方向を変えて並び、重度の使用が想定される。深さ5cm以上の溝もあり、深い部分が両面で一致するところでは厚さ1cmほどに器厚が減少し、折損の原因となっている。
(鈴木)

竪穴住居跡19(H-19) (図VI-122・123、表VI-2、図版82)

確認・調査：調査区北西側の標高27m付近の高位部に位置する。窪みで残る大型竪穴の堆積状況を確認するために設けたH-1・2・4横断セクションのトレチ調査で、H-4周堤盛土と考えられるRM層の下位に竪穴断面を確認した。さらにH-4調査で南西壁を検出した際にも、壁面に同一竪穴の断面を認めた。H-4調査終了後、RM層を掘削して下位のⅢ下～V層を検出し、その検出面にRM層およびにぶい黄褐色～褐色土が橢円形に落ち込むH-19竪穴の範囲を確認した。H-1・2・4横断セクションのトレチライン(C-D)と、直交する任意のライン(A-B)に土層観察用のベルトを設定し、覆土の掘り下げ、床・壁の検出を行った。

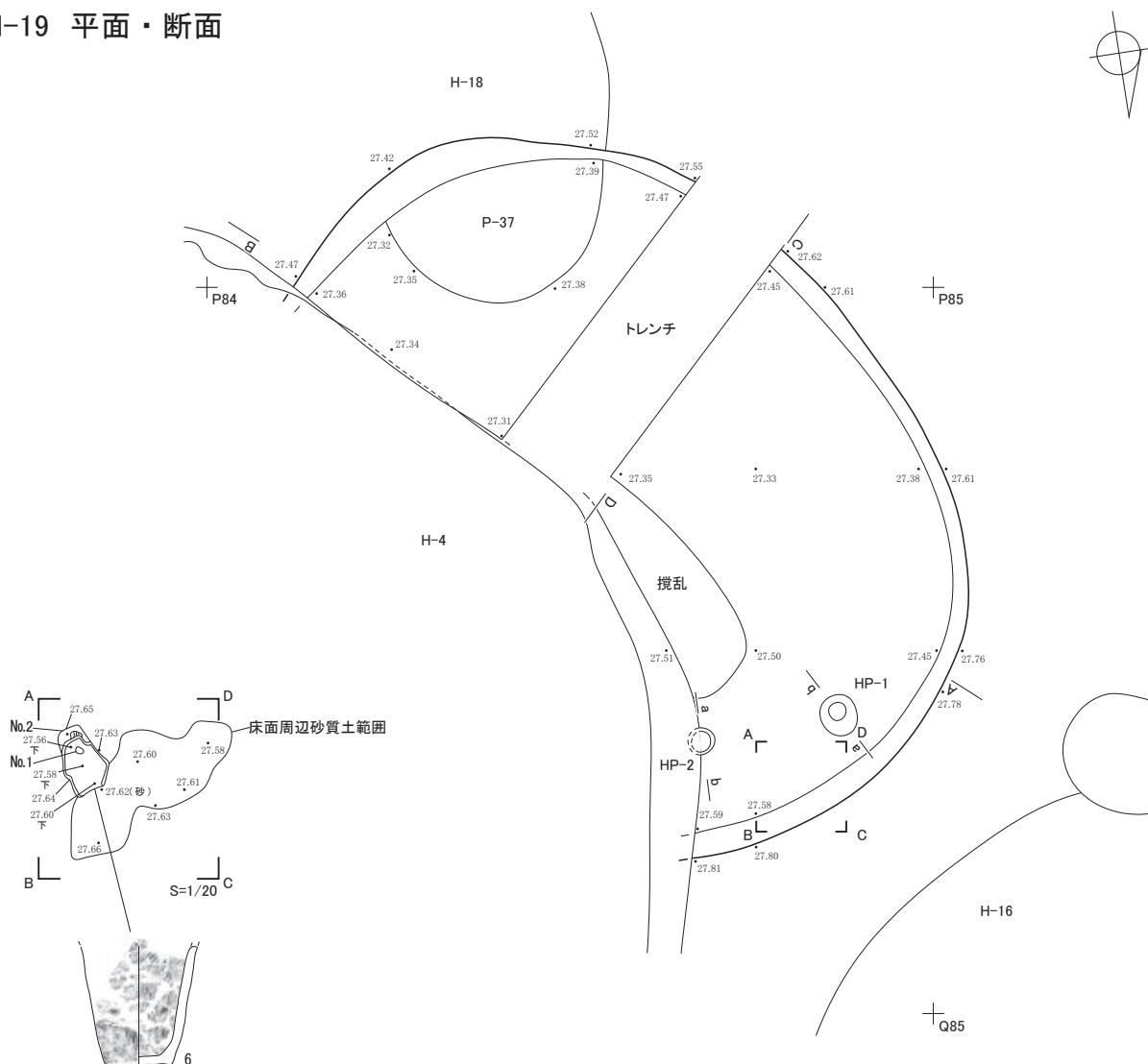
堆積状況の記録後にベルトを除去し、床面精査を経て付属遺構の確認・調査を進めた。竪穴住居跡は北東側をH-4に切られるが、構築時の6割程度が残存すると考えられる。竪穴形状は橢円形、大きさは復元で長軸4.2×3.3m前後、長軸は南東～北西方向に認められる。

土層：土層は大きく上下に分けられ、上部はH-4周堤盛土とみられるRM層、下部は屋根土の崩落もしくは近隣遺構の掘り上げ土とみられる1・2層、流入土の3層である。堆積過程を復元すれば、①住居廃絶後3層が流入し、②廃絶間もなく屋根土の崩落などが起き、③H-4構築時にRM層で埋められた、の推移が考えられる。

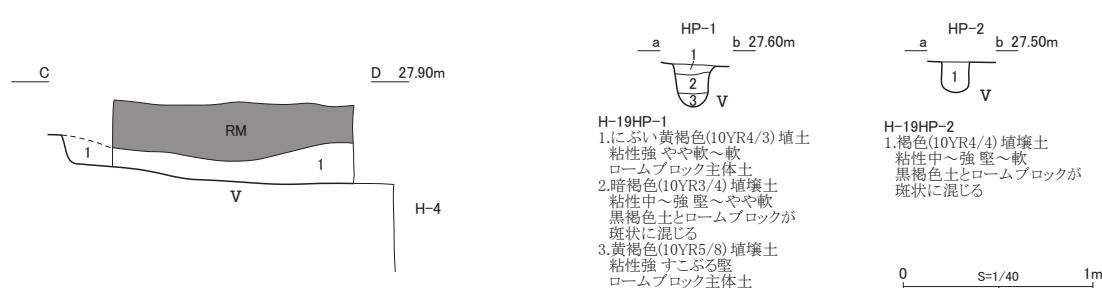
床面・壁：床面は概ね水平・平坦に構築されている。壁は北・西側が急角度、南側がやや緩斜に認められる。

付属遺構：付属遺構は柱穴HP-1・2の2基が確認された。規模は径20cm前後・深さ15～20cmと小型で、床面に垂直に掘られている。配置は北壁付近にやや近接して認められ、HP-1は竪穴長軸上に位置する。

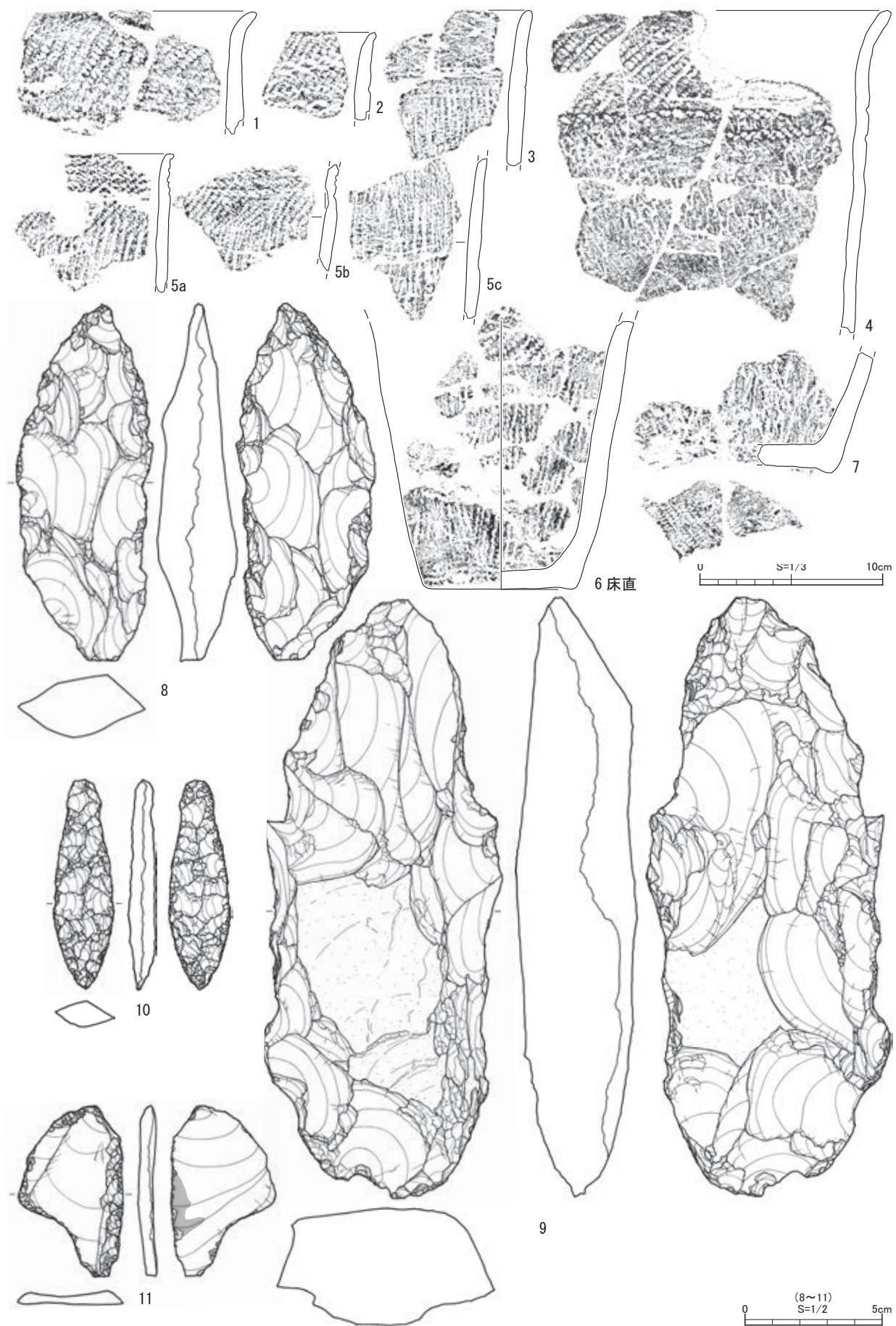
H-19 平面・断面



H-19
 1.にぶい黄褐色(10YR4/3)埴壙土 粘性中 すこぶる堅 繊密均質 炭化物粒3%散在
 2.黄褐色(10YR5/6)埴壙土 粘性強 すこぶる堅 ローム主体土
 3.褐色(10YR4/4)埴壙土 粘性中 堅~やや軟 三角堆積土
 RM.褐色(10YR4/6)埴壙土 粘性中~強 すこぶる堅 ローム主体土
 床面周辺砂質土.にぶい黄橙色(10YR6/4)砂壙土 粘性なし
 すこぶる堅 H-19の3層に50%混じり、土器の内部に入り込む
 2~3cmの粘土ブロック(10YR5/3にぶい黄褐色)・1.5cm大の炭化物粒を含む



図VI-122 積穴住居跡 (121) H-19(1)



図VI-123 竪穴住居跡 (122) H-19 (2)

遺物出土状況：出土遺物の総数は851点で、土器等が298点、石器等が553点である。土器等はⅡ群b類のみで298点が、石器等は石槍2点、両面調整石器4点、つまみ付きナイフ2点、スクレイパー3点、石錐1点、Rフレイク2点、Uフレイク1点、剥片429点、石核5点、すり石1点、原石1点、礫102点が出土した。土器は床面直上土から43点が出土している。

北壁に近接する床面からは上半部が破損した深鉢（6）が壁側に向かう横倒しの状態で出土した。また深鉢内部には褐色の砂質土が充填され、開口部から周囲に流れ出した状態で検出された。

時期：床面出土遺物およびH-4より古い切り合い関係関係から、縄文時代前期後半円筒下層b2式期と考えられる。
(坂本)

掲載出土遺物：（図VI-123-1～11、図版202・203）

土器：1～7はⅡ群b類。1は円筒下層b1～b2式。口縁部にLR斜行縄文が施文される。2～5は円筒下層b2式。2はLR斜行縄文に結節回転文と縄線が交互に見られる。3は沈線で区画された口縁部に単軸絡条体5類、胴部に自縄自巻回転縄文、4は2本の縄線で区画された口縁部にLR斜行縄文、胴部に単軸絡条体6類、5は口縁部にLR斜行縄文と縄線文、胴部に単軸絡条体1類が施文される。6・7は底部片で、6は円筒下層b2式。小型の土器で、口縁部はLR斜行縄文、胴部は単軸絡条体Rが施文される。7は円筒下層b1～c式。

石器：8・9は両面調整石器。9は粗い加工段階で終了し、概ね原石サイズを保持している。10はつまみ付きナイフ。石槍のような整った形状で、上部につまみ部が作出される。11はスクレイパーVI類。
(鈴木)

堅穴住居跡20（H-20）（図VI-124～127、表VI-2、図版83・84）

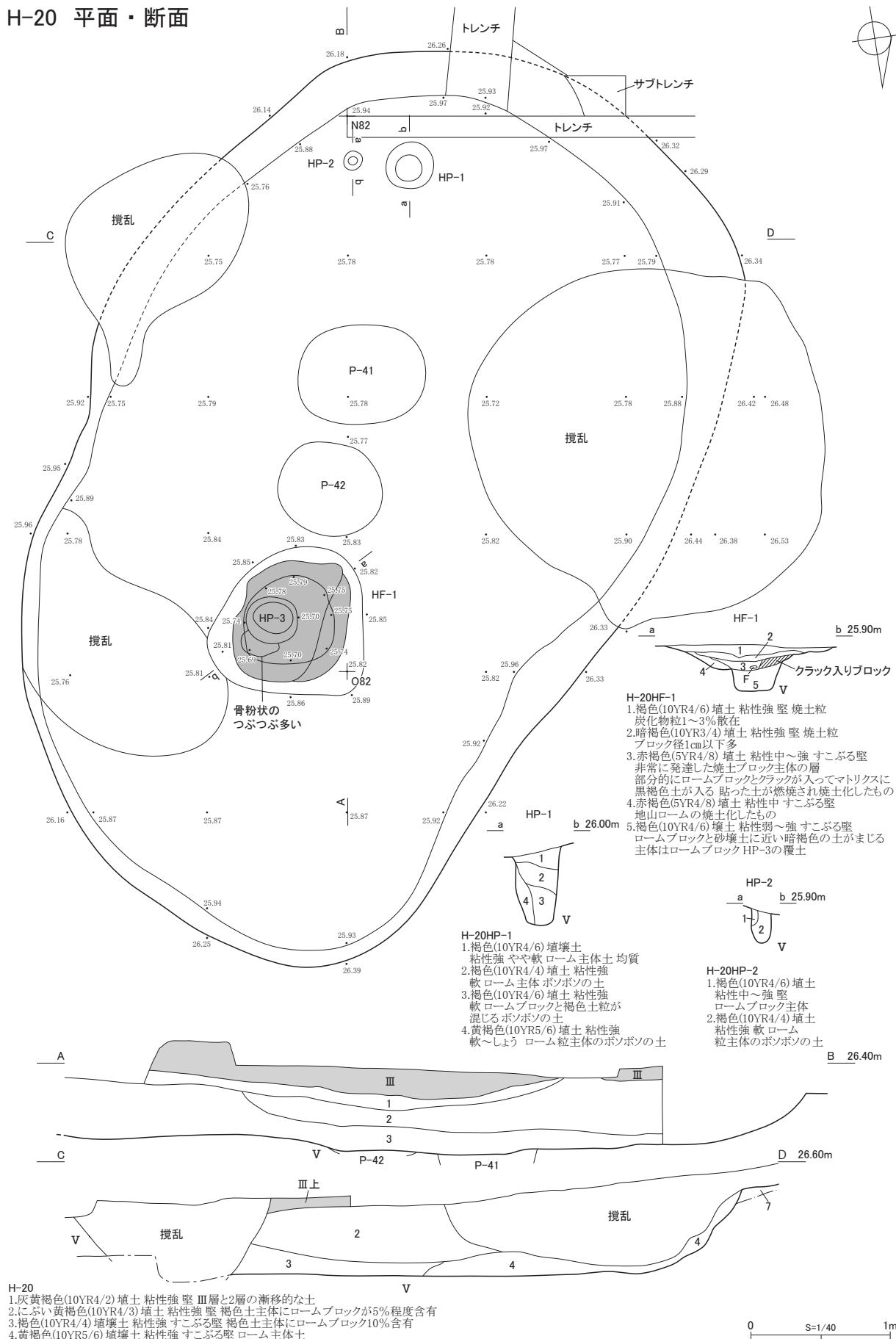
確認・調査：調査区中央部のやや北西側の標高26m付近の斜面部に位置する。メインセクションのNライントレンチ調査でN82杭前後に堅穴の断面を確認した。堅穴はM層下位にみられたため、82ラインとこれに直交する任意のラインに土層観察用のベルトを設定した上で、N81・82区調査のM層を除去したⅢ～V層検出面で覆土範囲の確認に努めた。しかし攪乱が多く遺構輪郭も不明瞭であったため、サブトレンチで断面を観察しながら遺構範囲を判断した。床面・壁を検出して土層堆積状況を記録し、ベルトを除去後に床面精査を行った。付属遺構を検出後、個別に調査・記録した。堅穴形状はやや不整な橢円形で、大きさは長軸6.7×短軸4.4m、長軸方向は南西～北東に認められる。

土層：堆積は大きく上下に分けられ、上部は自然堆積のⅢ層、下部は流入土と考えられる1・4層、屋根土の崩落もしくは掘り上げ土の投げ込みとみられる2・3層で構成される。2・3層はそれぞれ厚い箇所では40cm以上に及ぶ堆積である。またセクションラインでは確認されていないが、Ⅲ層および覆土の上位にはM層の堆積が堅穴の南部で認められた。堆積過程を復元すれば、①住居廃絶後の流入土堆積、②屋根土の崩落もしくは掘り上げ土の投げ込み、③Ⅲ層の自然堆積、④M層の盛土、の順序が考えられる。

床面・壁：床面は概ね水平であるが、凹凸がみられ安定しない。壁は緩やかな立ち上がりである。

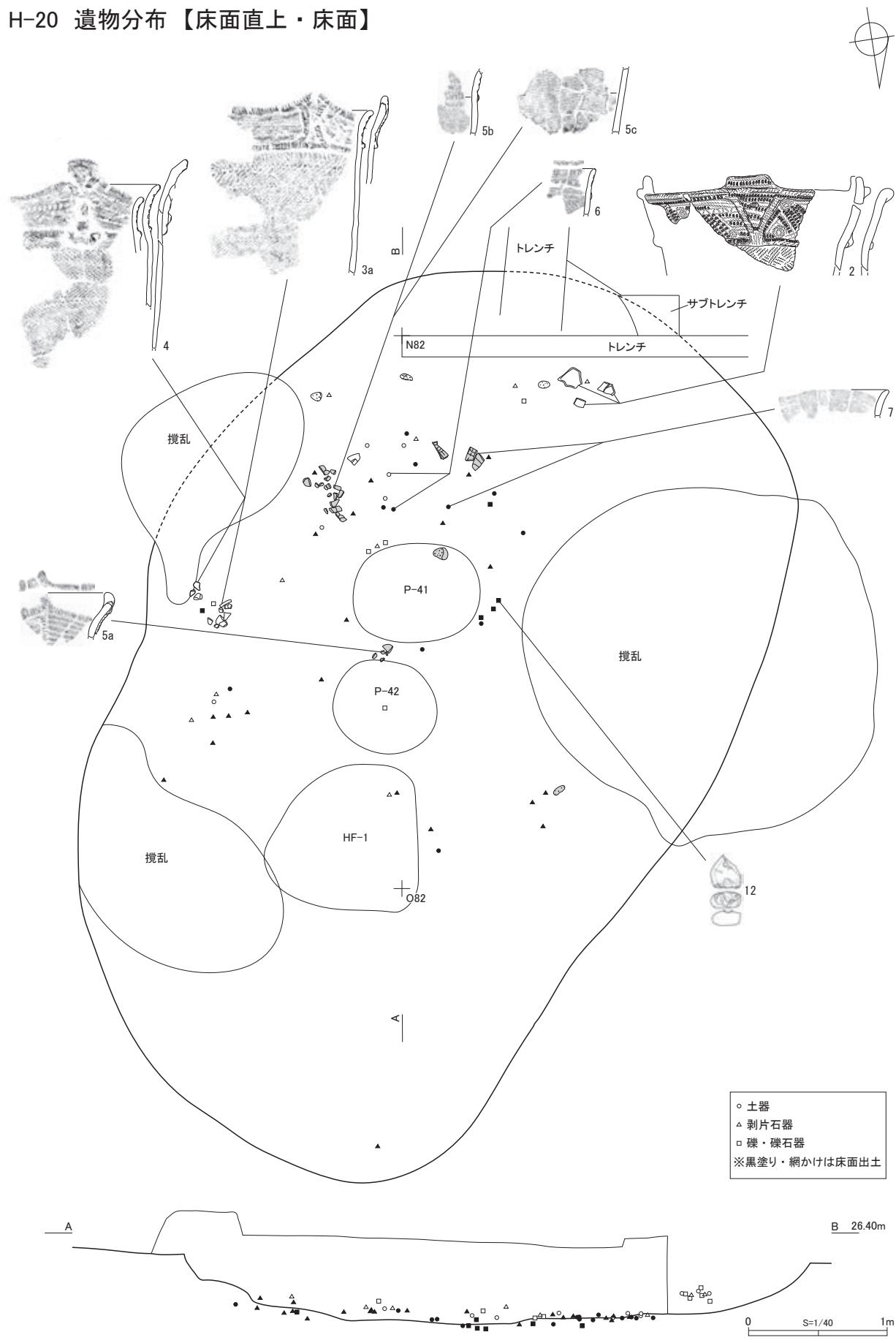
付属遺構：柱穴2基と土坑1基、炉跡1基を確認した。柱穴はHP-1・2で、2基とも南壁に近接する。HP-1は規模が径30cm×深さ55cmで垂直に掘り込まれており、主柱穴とみられる。炉跡はHF-1で堅穴中央部のやや北東側に位置する。大きさ約1mの非常に発達が良く焼け締まった焼土面の上位に、焼土ブロックと炭化物を多く含む層が10cm以上堆積していた。また焼土の直下にはHP-3が確認され、覆土は砂壌土に近い土であった。HP-3を埋め戻した後に上面を炉として使用したことが考えられる。このほか、本遺構より古い単独の土坑と判断したP-41・42が、住居中央部付近のHF-1の南西側で検出されており、これら2基はH-20の付属遺構の可能性がある。

H-20 平面・断面



図VI-124 竪穴住居跡（123）H-20（1）

H-20 遺物分布【床面直上・床面】



図VI-125 竪穴住居跡 (124) H-20(2)

遺物出土状況：出土遺物の総数は372点で、土器等が179点、石器等が193点である。土器等はⅡ群b類32点、Ⅲ群a類147点が、石器等はつまみ付きナイフ1点、スクレイパー1点、Rフレイク3点、剥片121点、石核2点、たたき石4点、砥石1点、原石1点、礫59点が出土した。床面直上土および床面出土の土器は128点で、竪穴南部からまとまって出土しており、98%がⅢ群a類土器で占められる。

土壤のフローテーション選別の結果、HF-1からオニグルミ核2点が検出された。

時期：床面検出HF-1出土の燃焼材とみられる炭化物からは $4,520 \pm 30$ yrBP (K04-D21) の年代測定値が得られている。床面直上および床面出土遺物・年代測定値から縄文時代中期前半円筒上層a2式期と考えられる。
(坂本)

掲載出土遺物：(図VI-126-1～図VI-127-12、図版203・204)

土器：1はⅡ群b類。円筒下層b1～c式の底部片。2～7はⅢ群a類。2～5は円筒上層a2式。2は口径36cmの大型深鉢。台形状突起は4か所と推定され、その下部にはV字状の貼付がある。口縁部下部の貼付による区画の中や突起には、渦巻き状の縄線、直線的な縄線と刺突列が交互に充填され、一部鋸歯状の縄線も見られる。口唇部にはLR・RL斜行縄文、胴部にはLR縄文が縦位・横位に回転施文される。3は二手に分かれた突起下にX字状の貼付があり、その上部には2本1組の渦巻き状縄線文がある。貼付によって区画された口縁部には同一撫りの3本1組の縄線文と刺突列が交互に施文される。口唇部と貼付上には縄の刻みが付けられる。胴部は結束第1種斜行縄文が施文される。4は角に丸みを帯びた台形状突起の下にY字状の貼付があり、その上部には撫りの異なる2本1組の渦巻き状の縄線が押捺される。突起下には口縁部を区画する貼付にさらに短い貼付が添えられる。口縁部文様帶の施文は突起の左右で異なり、右側は撫りの異なる3本1組の縄線の間に刺突列が充填されるのに対して、左側は縄の馬蹄形圧痕と鋸歯状縄線が充填される。貼付や口唇部には縄の刻みが付けられ、胴部には結束第1種羽状縄文が施文される。5は片流れの波頂部を持つ波状口縁で、突起下には縦の貼付があり、口縁部には絡条体圧痕文が押捺される。胴部はLR縄文が横走する。6は口縁部に縄線文、7は表面風化により詳細は不明である。

石器：8はつまみ付きナイフ。素材先端部につまみ部が作出され、周縁部の加工は軽微である。9～11はたたき石。9・10はIa1類、11はIa3類。上下の敲打面は複数の面で構成され、持ち方や敲打角を変えて使用されたと考えられる。12は砥石。正面下部に溝状のすり面がある。
(鈴木)

竪穴住居跡21(H-21) (図VI-128、表VI-2、図版85)

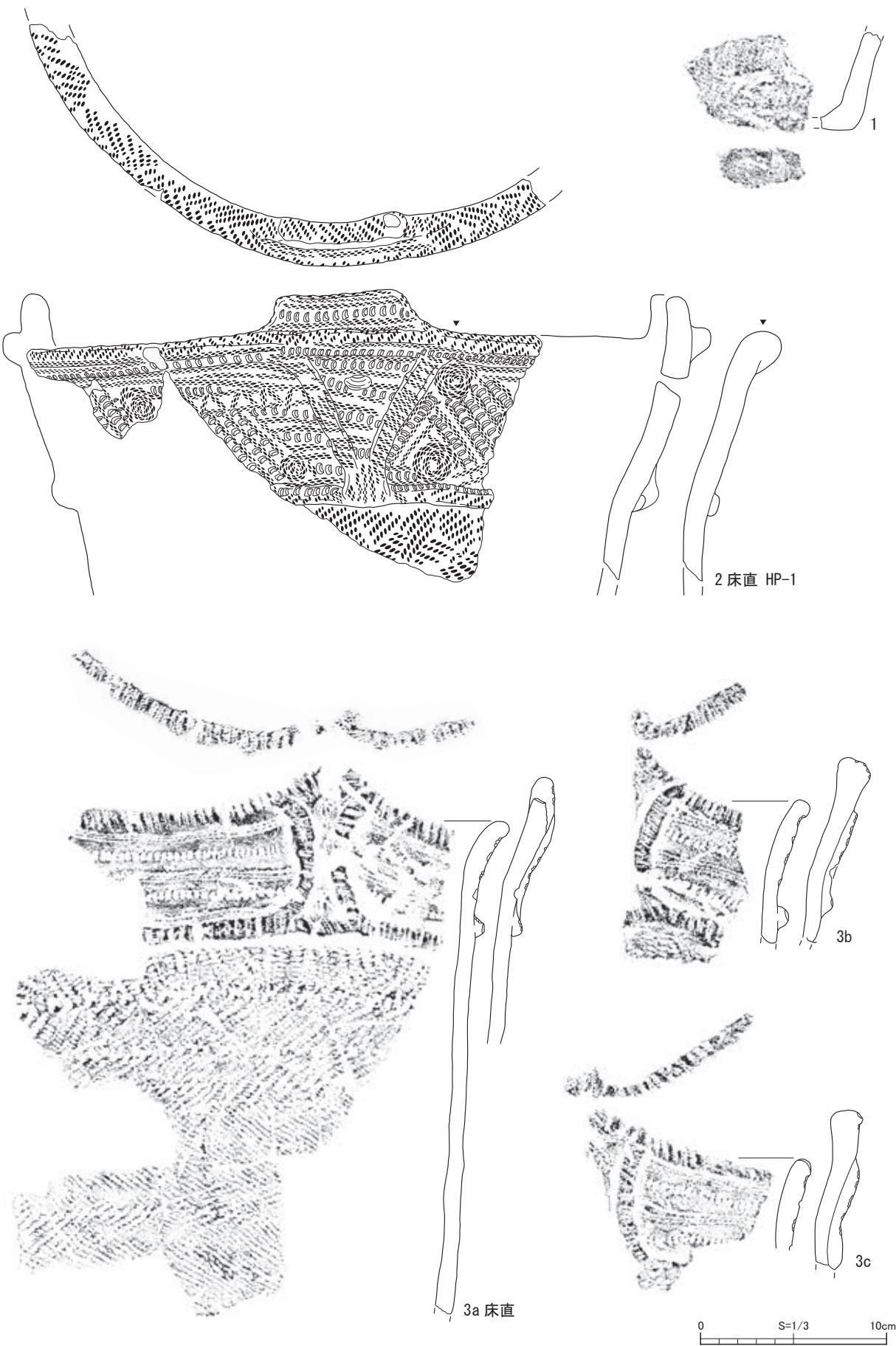
確認・調査：調査区北西側の標高27m付近の高位部に位置する。H-3調査の際、南壁にRM層下位に構築された竪穴断面を確認したため、H-3調査終了後RM層を除去し、下位のⅢ下層～V層を検出して竪穴覆土の範囲を確認した。任意のラインに土層観察用ベルトを設定して覆土の掘り下げを行ない、床・壁を検出した。土層堆積状況を記録した後にベルトを除去し、床面精査による付属遺構の検出に努めたが、確認することは出来なかった。竪穴は切り合いによりほとんどが消失しており、形状や大きさを判断することができなかった。切り合い関係はH-3・16と有し、H-3よりも古い。またH-16とは攪乱のため新旧が不明である。

土層：土層断面図には記録がないが、覆土1～3層上位にはRM層の堆積が認められた。1～3層は黄褐色土を主体とする土で、掘り上げ土の投げ込みによる堆積などが考えられる。

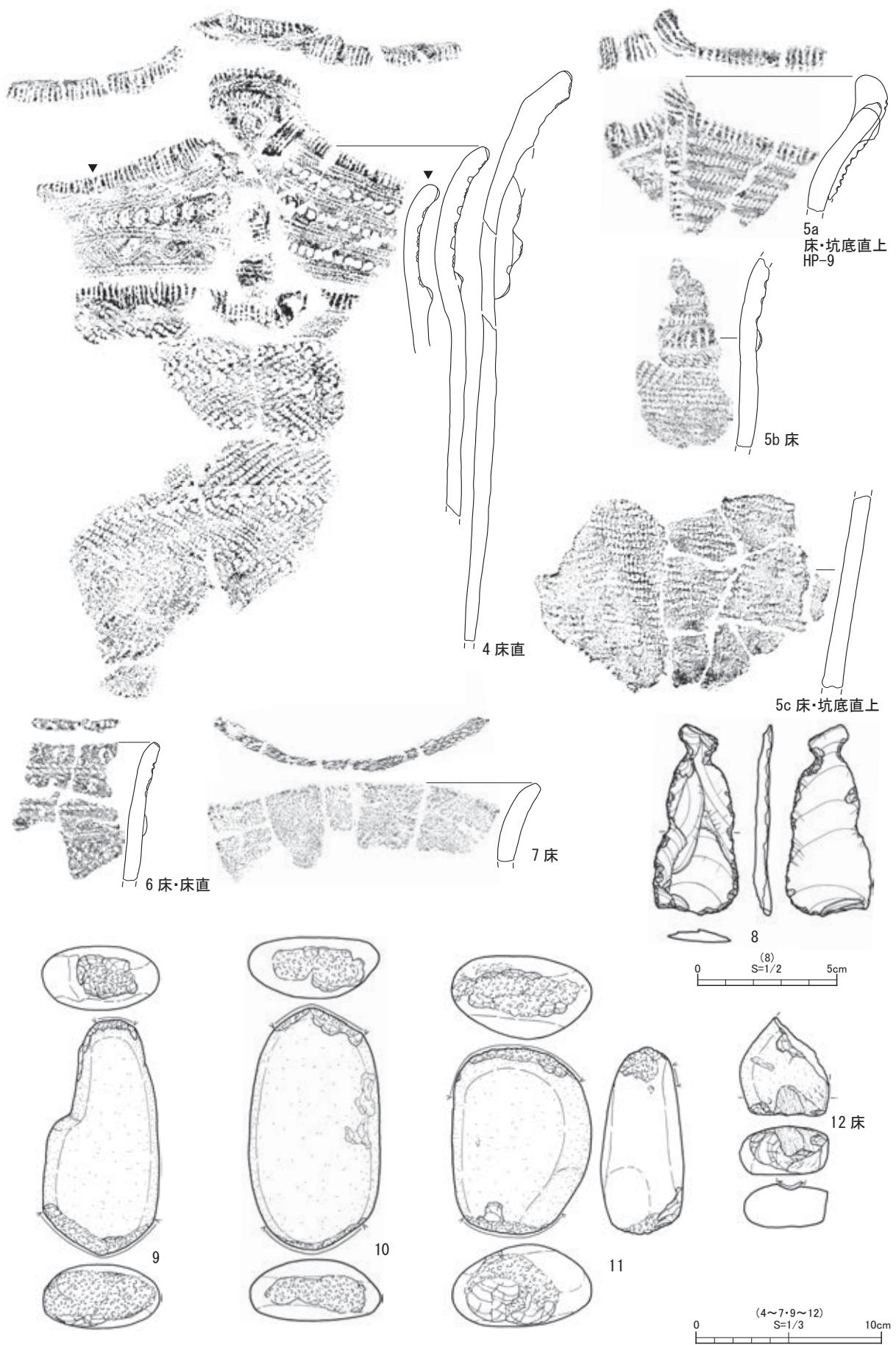
床面・壁：確認できた床面は概ね水平・平坦に構築されている。壁は急角度に立ち上がる。

付属遺構：確認されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は101点で、土器等が11点、石器等が90点である。土器等はⅡ群b

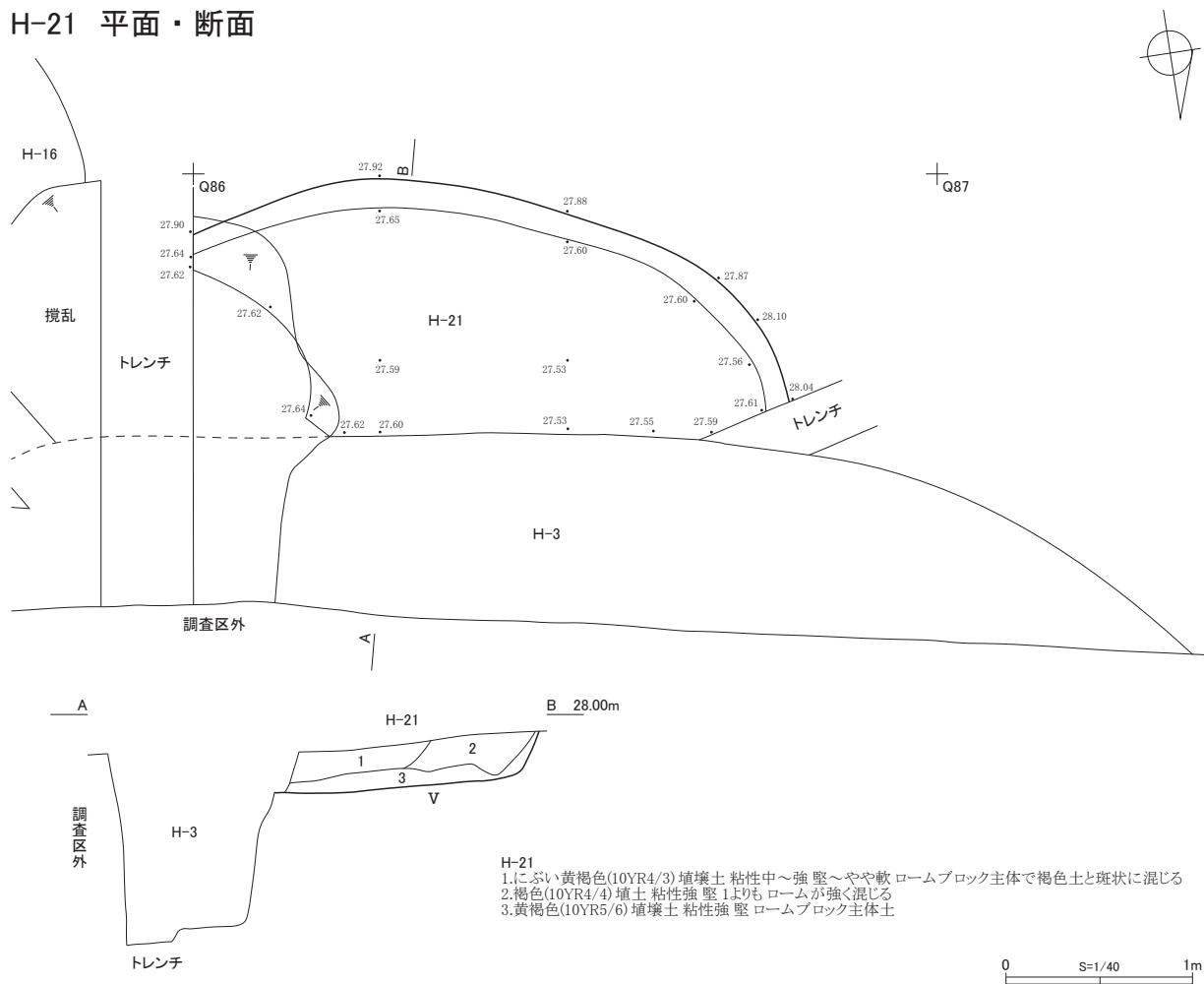


図VI-126 積穴住居跡 (125) H-20 (3)



図VI-127 壇穴住居跡 (126) H-20 (4)

H-21 平面・断面



図VI-128 竪穴住居跡 (127) H-21

類のみで 11 点が、石器等は剥片 90 点が出土した。土器は覆土出土のみである。

時期：H-4 に切られ、RM 層下に埋められた状況から、縄文時代前期後半と考えられる。 (坂本)

竪穴住居跡 23 (H-23) (図VI-129～131、表VI-2、図版 85・86)

確認・調査：調査区中央南側の標高 22.0m 付近、低位部と斜面部の変換点に位置する。III上層掘り下げ中に暗褐色土の広がりを確認した。同時に斜面上部にあたる西側の隣接地でIII上層の落ち込み (H-24) を確認したため、両者にまたがるベルト (A-B) とそれに直交するベルト (C-D) を十字に残し、掘り下げた。

土層：覆土は下部にIII層黒色土主体の黒褐色土（覆土 2～5）が厚く堆積し、上部の窪みに暗褐色土とII上・下層が堆積する。

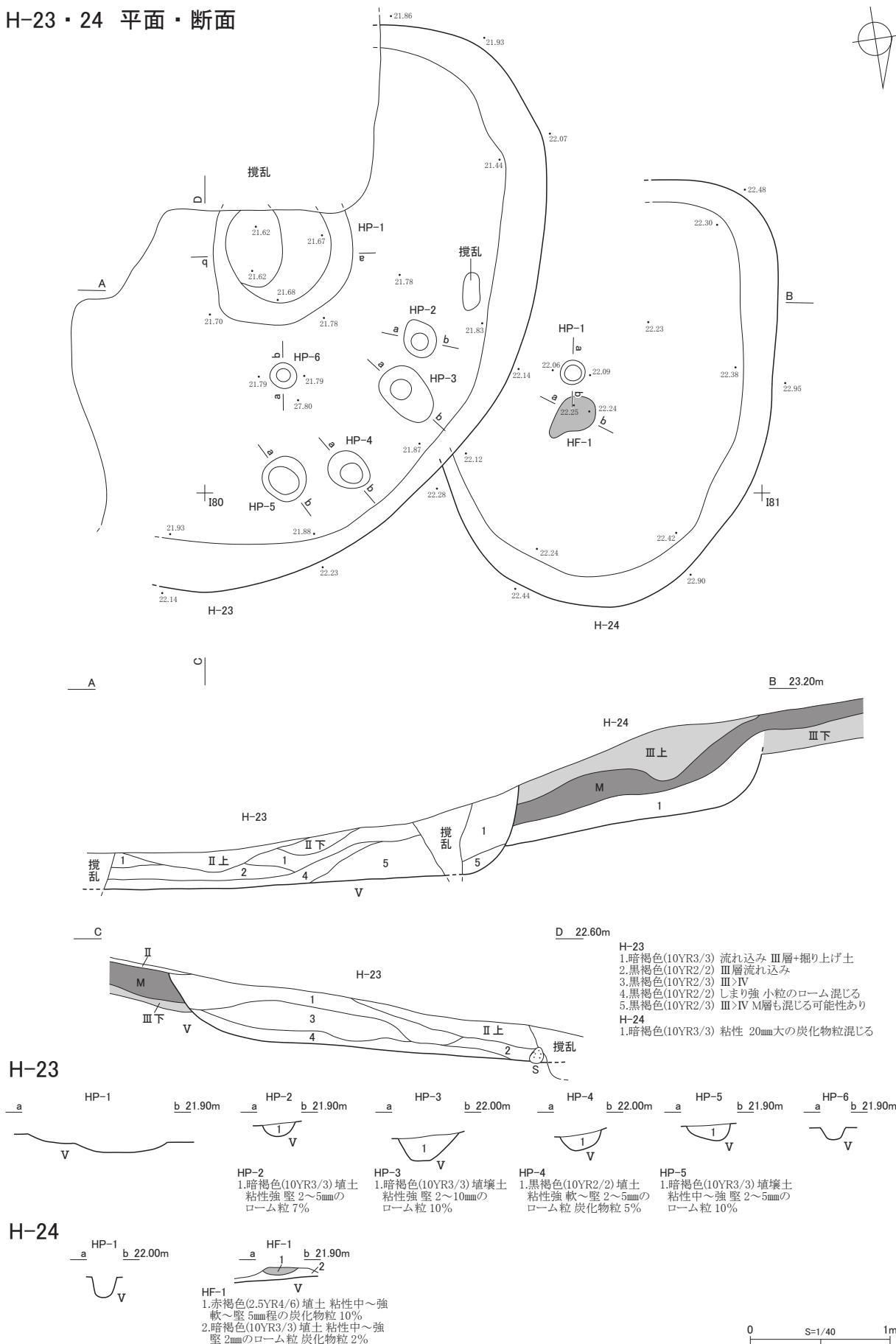
床面・壁：床面は東西方向は中央に向かって若干傾斜し、南北方向は傾斜がやや強い。壁は全体的に斜めに立ち上がり、北側の傾斜が弱い。

付属遺構：中央に直径 1m 程のピット (HP-1) があり、北西側に深さ 10～15 cm の浅い皿状のピット (HP-2～5) が壁に沿って並んでいる。

遺物出土状況：出土遺物の総数は 237 点で、土器等が 35 点、石器等が 202 点である。土器等は II 群 b 類 20 点、III 群 a 類 1 点、IV 群 a 類 14 点が、石器等は石鏃 2 点、両面調整石器 3 点、R フレイク 2 点、剥片 117 点、石核 4 点、石斧 1 点、扁平打製石器 2 点、礫 71 点が出土した。

時期：M 層を切って掘り込まれている点と出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。 (皆川)

H-23・24 平面・断面

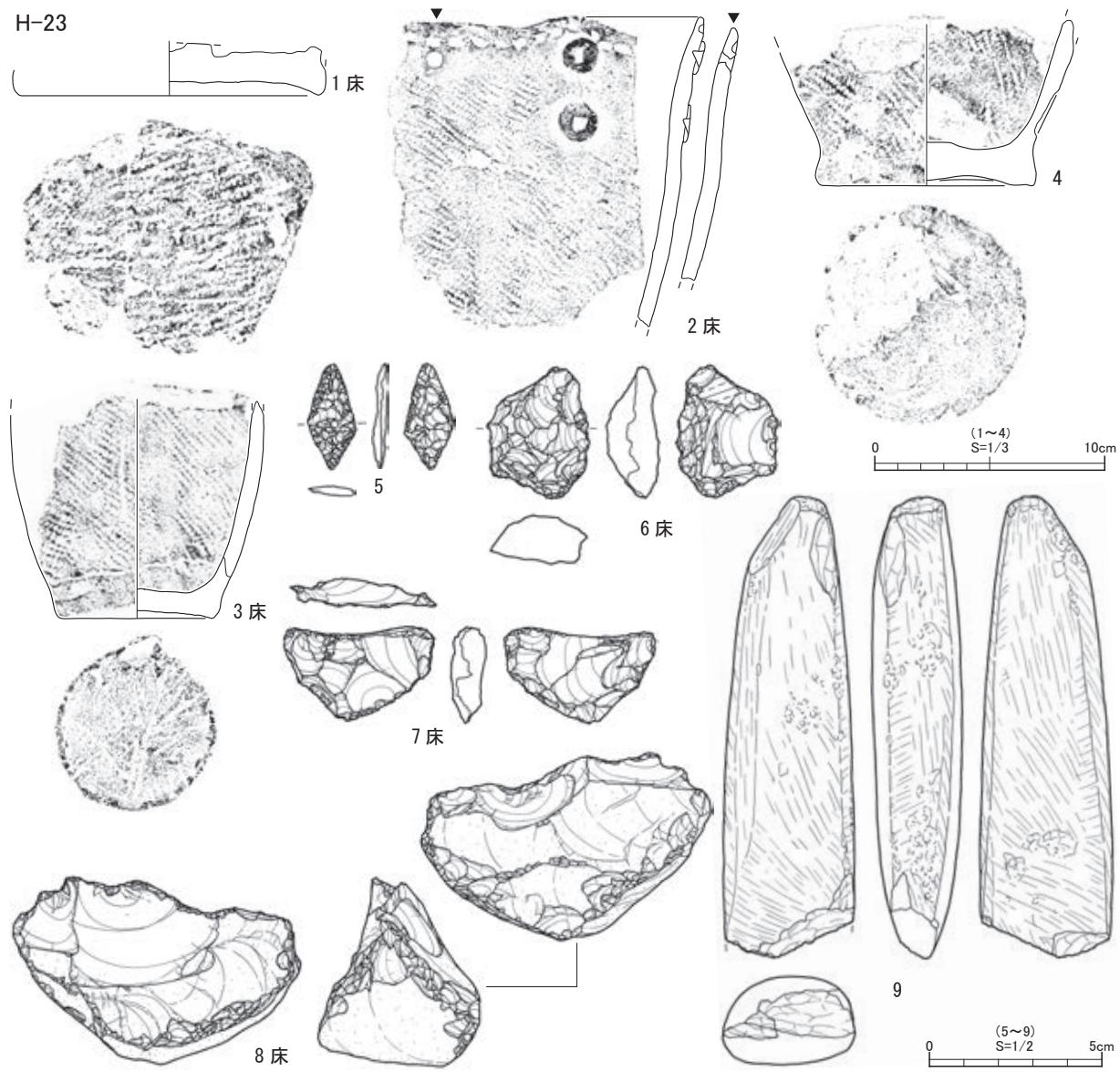


図VI-129 積穴住居跡 (128) H-23・24(1)

H-23・24 遺物分布



図VI-130 穫穴住居跡 (129) H-23・24(2)



図VI-131 壇穴住居跡 (130) H-23・24 (3)

掲載出土遺物：(図VI-131-1～9、図版204)

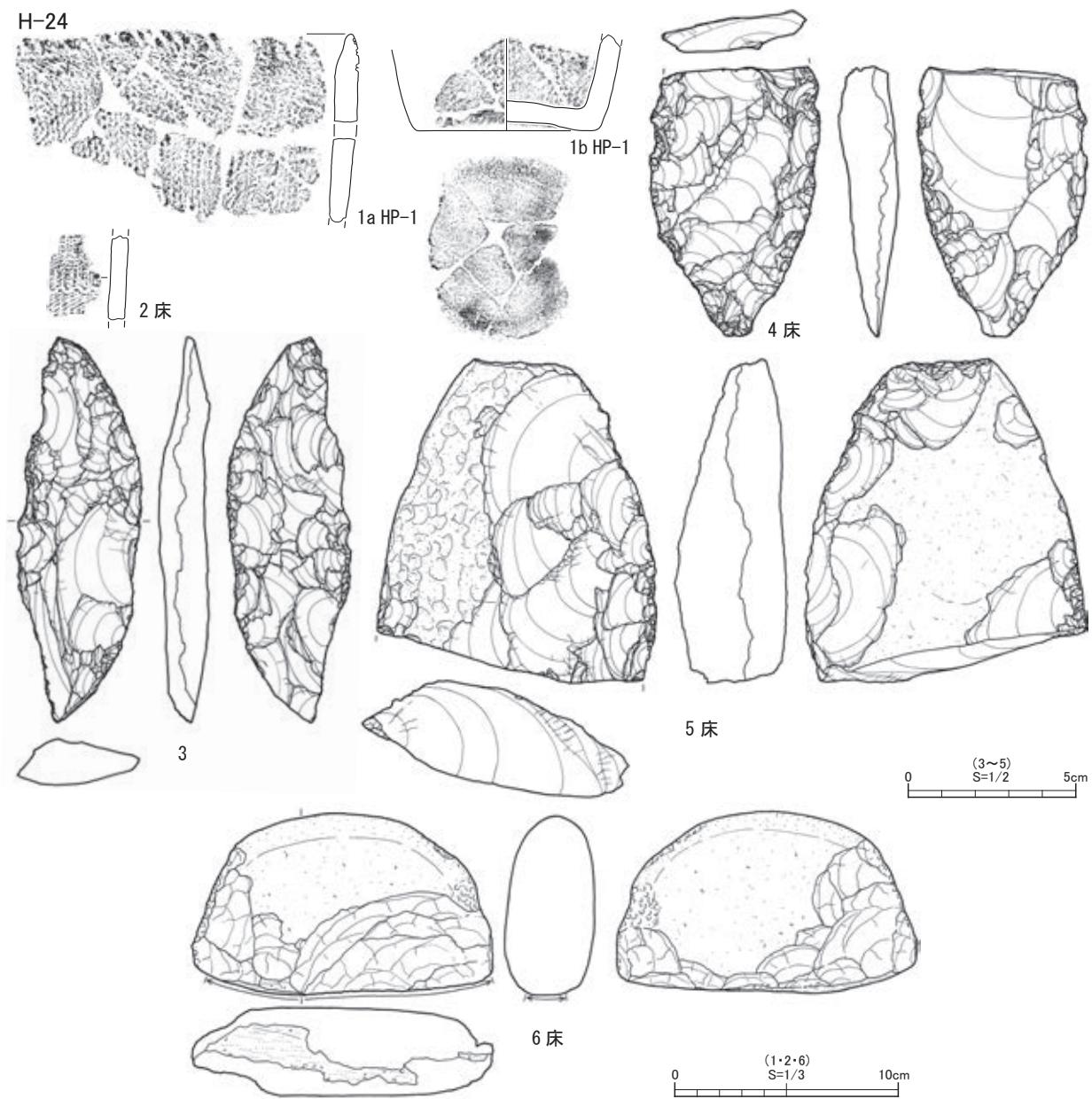
土器：1はII群b類。円筒下層b1～c式で、底面には直前段反撫の縄文が施文される。2～4はIV群a類。2は波状の口縁部で、口唇部に沿って刺突がなされ、波頂部下には刺突のあるボタン状貼付が縦に2か所付けられる。地文はLR縦回転縄文である。3・4は底部片で、どちらも地文はLR縦回転縄文。3の底面には木葉痕があり、外傾接合である。4も外傾接合で、内底面には指頭圧痕があり、底角は外に張り出す。

石器：5は石鏃IIa類。6・7は両面調整石器。6は小型、7は上部折損後も折れ面から再加工される。8は石核IV類。上縁部で交互剥離が行われるが、剥離は少ない。9は石斧。全面研磨により整形されるが、一部敲打痕が残る。刃部は欠損している。
(鈴木)

壇穴住居跡24 (H-24) (図VI-129・130・132、表VI-2、図版85・86)

確認・調査：調査区中央南側の標高22.5m付近、斜面部下部に位置する。H-23で既述のとおり、H-23と同時に検出され、共通の東西ベルト(A-B)を残して調査を進めた。

土層：屋根土とみられる暗褐色土の上位にはM層が20cmほど堆積しており、住居廃絶後に覆われた



図VI-132 穫穴住居跡 (131) H-23・24(4)

とみられる。

床面・壁：床面は斜面方向同様、東側に傾斜している。床面から壁は丸みをもって移行し、斜めに立ち上がる。

付属遺構：中央に柱穴の可能性のあるピット (HP-1) があり、その北側に床面より若干上の層位から焼土が検出された。

遺物出土状況：出土遺物の総数は 11,421 点で、土器等が 64 点、石器等が 11,357 点である。土器等は II 群 b 類 57 点、IV 群 a 類 7 点が、石器等は石槍 2 点、両面調整石器 1 点、R フレイク 2 点、剥片 11,139 点、石核 4 点、石斧 1 点、すり石 1 点、たたき石 1 点、原石 2 点、礫 204 点が出土した。

時期：覆土が M 層に覆われること、出土遺物などから縄文時代前期後半円筒下層 d1 式期の可能性がある。
(皆川)

掲載出土遺物：(図VI-132-1～6、図版 204)

土器：1・2 は II 群 b 類で、円筒下層 d1 式。1 は口縁部に斜位の単軸絡条体 1 類に 2 本の縄線が巡り、

胴部は同絡条体が縦位に施文される。2は結束第2種羽状縄文と単軸絡条体1種が見られる。

石器：3・4は石槍。4は正面右からの剥離で折損している。5は両面調整石器。両面に原石面が残り、扁平な橢円礫が素材と推定される。左側縁から裏面への剥離で折損している。6はすり石Ib類。正面右側は大きく剥落し、器厚を3分の2程度減じている。
(鈴木)

豊穴住居跡25 (H-25) (図VI-133～137、表VI-2、図版87～89)

確認・調査：調査区中央の標高26.4m付近の斜面部に位置する。平成27・28年の調査範囲にまたがるため、平成27年は西側半分、平成28年は東半分を調査した。平成27年は周辺のⅢ下層掘り下げ後、鈍い黄褐色土の広がりを確認した。調査範囲の東壁が住居のほぼ半分であることから内側の掘り下げを行い、東壁で土層の記録を取った。平成28年は残りの半分を北東-南西ライン(C-D)にベルトを残して掘り下げた。

土層：大きく3層に分けられる。上部にはM層のにぶい黄褐色土(1層)とM層に類似した灰黄褐色土(2層)、その下位には他の遺構の投げ込み土とみられる1～3cmの小礫が混じる明黄褐色土(3層)、最下部には屋根土の崩落土であるにぶい黄褐色土(4層)が堆積する。特に、3層は特徴的で、V層下位の自然堆積層がかなり深くから掘り上げられたもので、H-9の覆土にも検出されている。

床面・壁：床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は隅丸方形である。

付属遺構：柱穴7基(HP-1～7)と床面で炭化物の集中1か所(HCC-1)が検出された。4本柱の住居で2本はHP-5からHP-4、HP-6からHP-7へと移設されている。中央には、やや細く短い柱穴状のピット(HP-3)がある。床面に炉跡は検出されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は522点で、土器等が72点、石器等が450点である。土器等はⅡ群b類のみで72点が、石器等は両面調整石器4点、籠状石器1点、スクレイパー4点、Rフレイク5点、Uフレイク1点、剥片245点、石核11点、石斧2点、扁平打製石器2点、すり石1点、石鋸1点、たたき石1点、台石2点、石皿3点、原石2点、礫165点が出土し、床面から石皿2点が検出された。

土壤のフローテーション選別の結果、HCC-1からオニグルミ核109点、不明1点が検出された。

時期：覆土下層中のHCC-1出土の炭化物からは4,650±30yrBP(K04-D22)の年代測定値が得られている。

出土遺物・年代測定値から縄文時代前期後半円筒下層d1式期と考えられる。
(鈴木・坂本)

掲載出土遺物：(図VI-136-1～図VI-137-11、図版205)

土器：1・2はⅡ群b類。1は円筒下層c～d1式。薄手で、細かい単軸絡条体1類が施文される。2は円筒下層d2式。口縁部はくびれて外反し、縄線が斜行する。

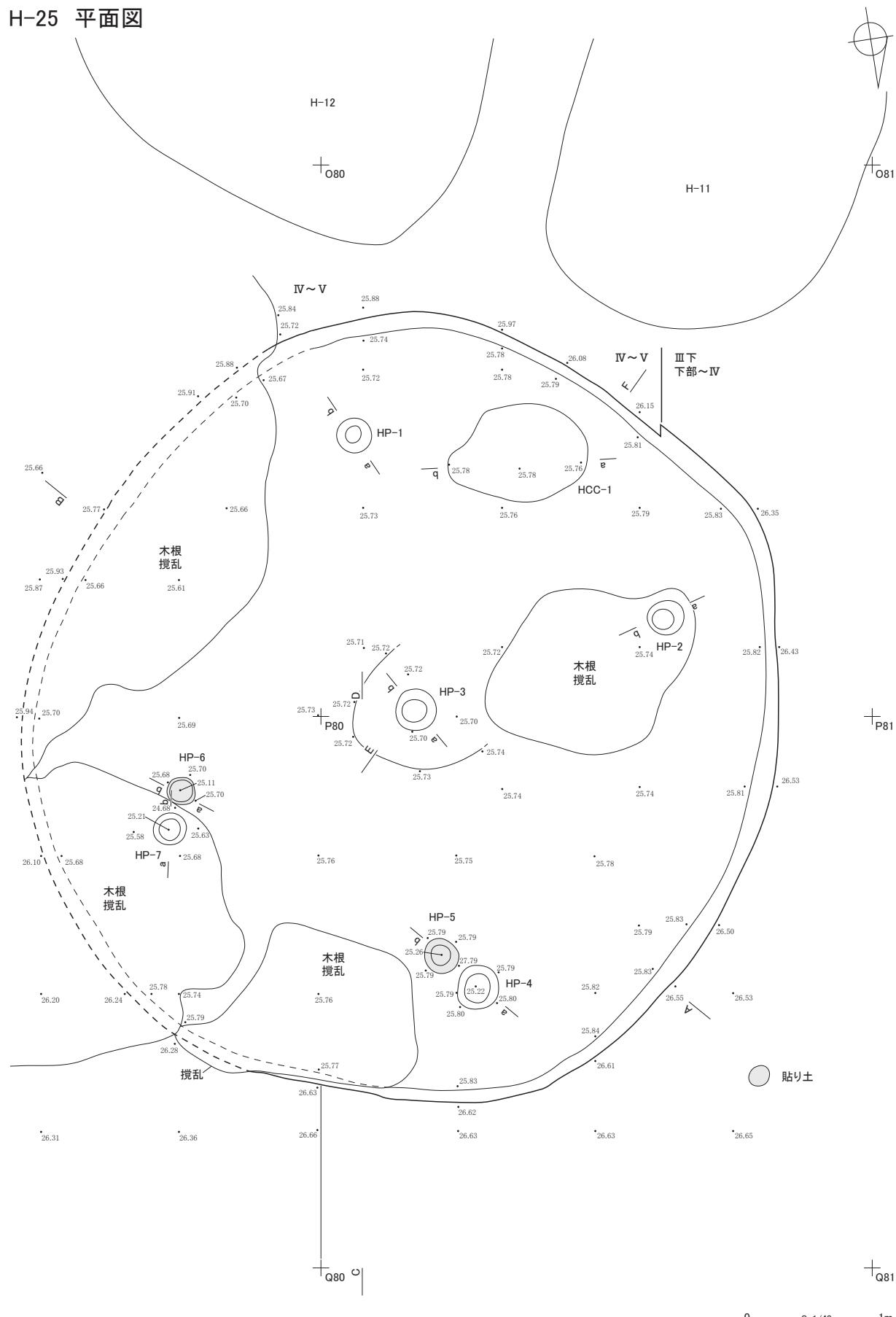
石器：3はスクレイパーⅢ類。反りのある剥片素材である。4は石斧。左右側面・上面は原石面で、正・裏面が研磨される。刃部を欠損する。5・6は扁平打製石器。5はI類。6はIV類で、下部は両面に横方向の擦痕を伴うすり面があり、それを切る細かい剥離が連続する。石鋸からの転用か、刃部再生の可能性がある。7はすり石Ⅱ類。下面平坦面の幅は狭く、使用頻度は低い。8は台石。両面はほぼ平坦である。9～11は石皿。9は大型の折損品で、正面は幅10～15cmの溝状のすり面が2条あり、片側は被熱により表面が剥落する。裏面はほぼ平坦で、中央がわずかにくぼむ。10は厚手の大型品で、正面のみ幅10cmほどの溝状のすり面が2条ある。被熱による赤化が観察され、折損や縁辺部の剥落の原因とみられる。11は正面のみ浅いすり面がある。10同様被熱により折損や剥落が確認できる。

(鈴木)

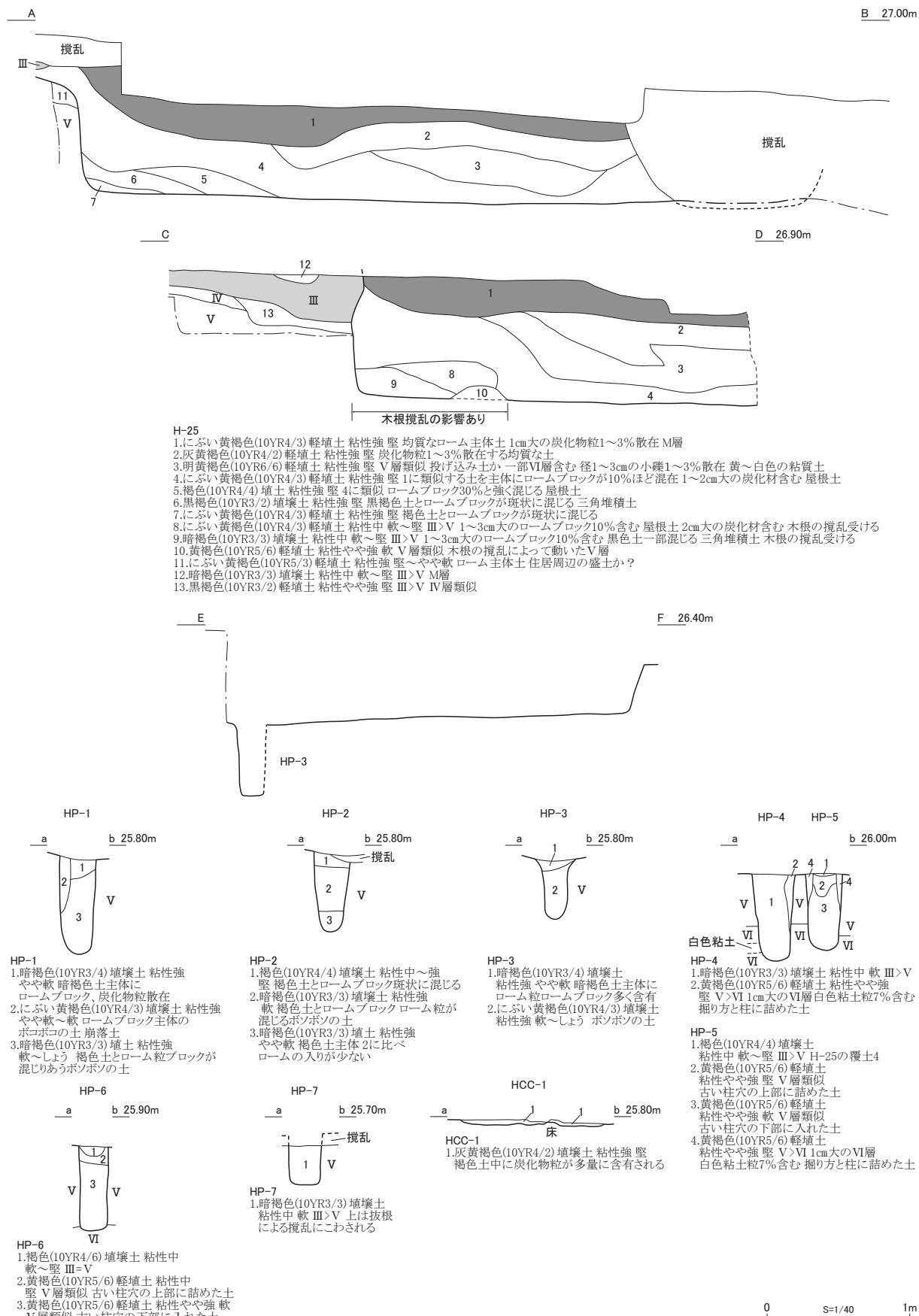
豊穴住居跡26 (H-26) (図VI-138～143、表VI-2、図版90～92)

確認・調査：調査区中央北側の標高26.2m付近の斜面部に位置する。Ⅲ層掘り下げ中に黒色土の広がりを確認し、その中心にほぼ相当する77ラインと直交するラインに土層観察用のベルトを設定し、

H-25 平面図

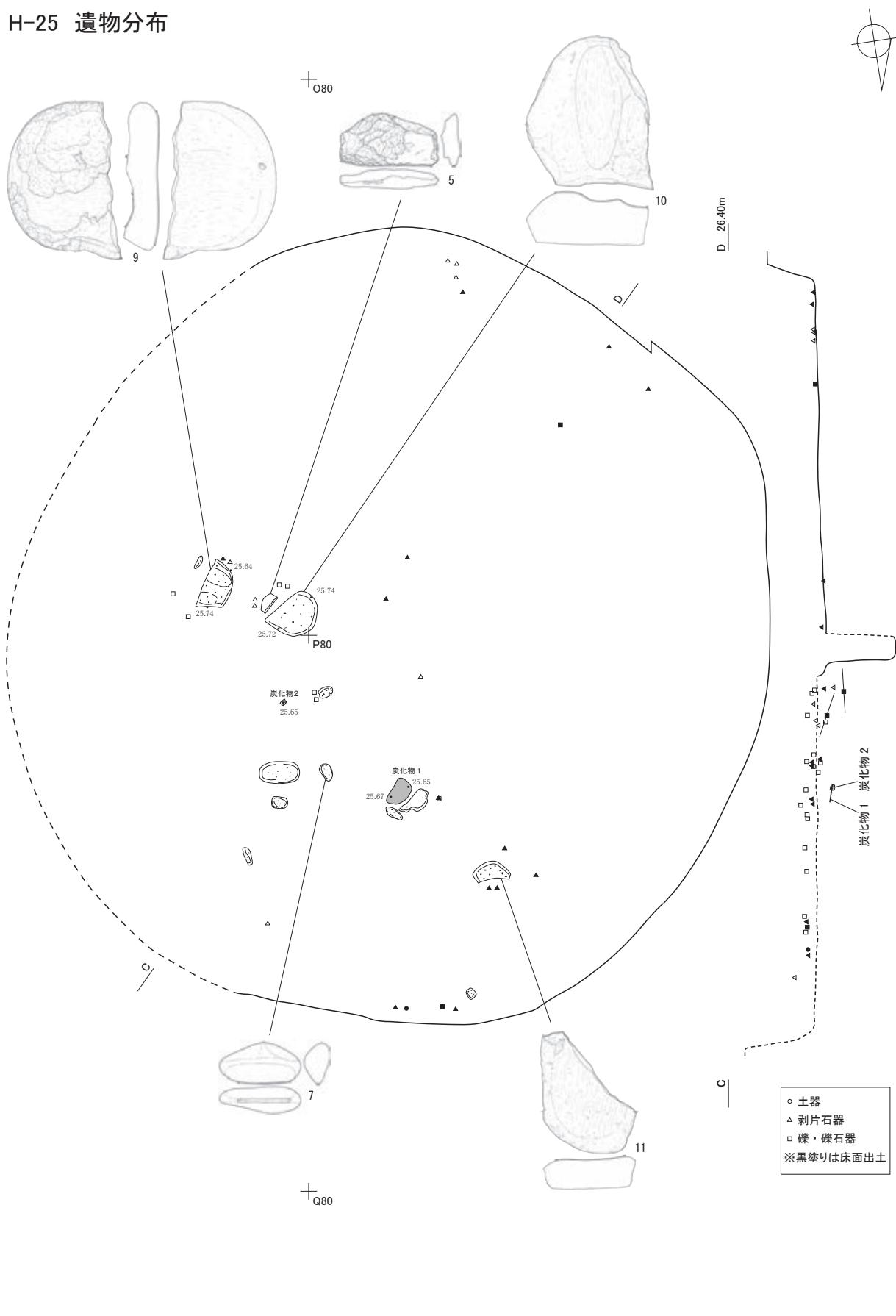


H-25 断面

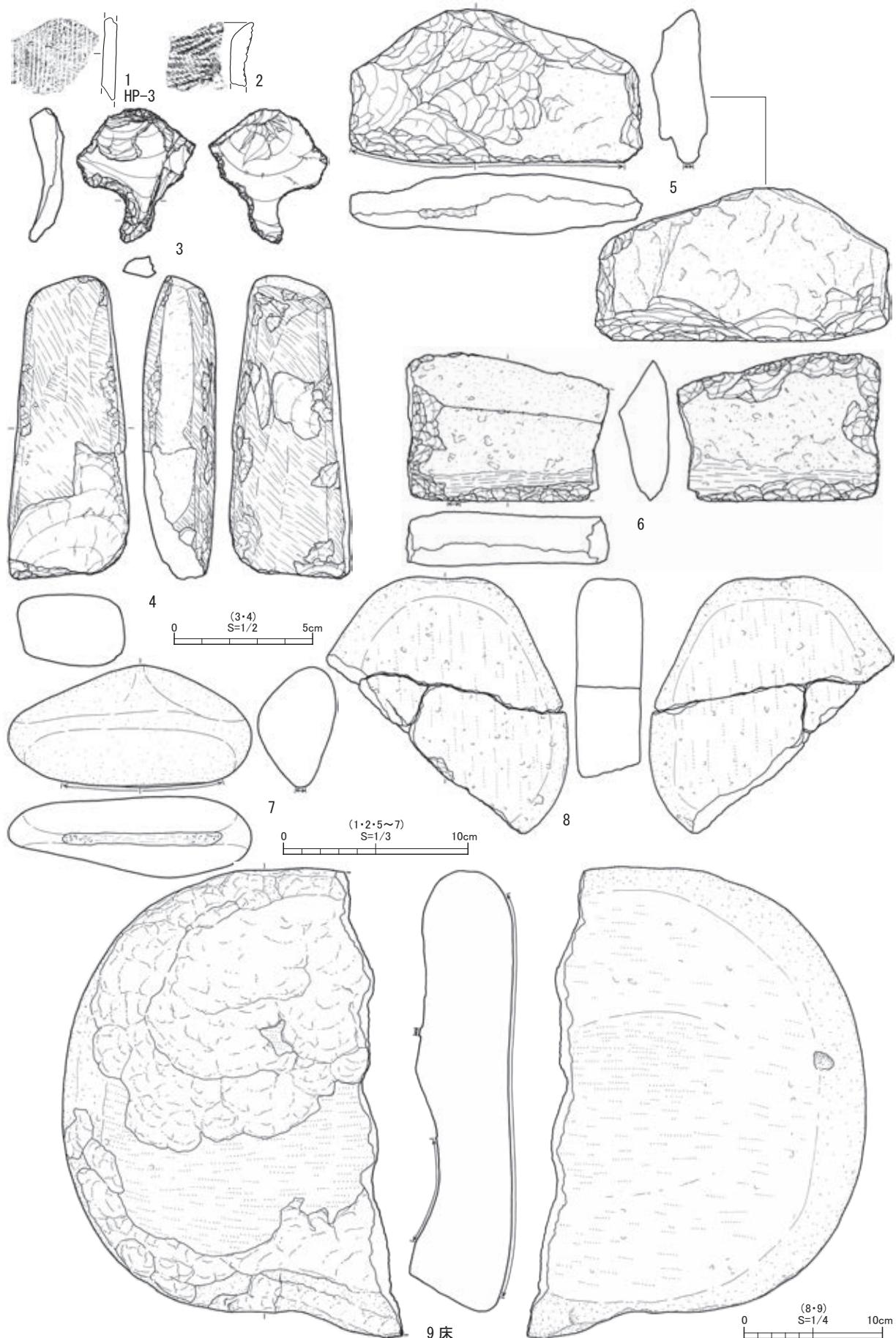


図VI-134 竪穴住居跡（133）H-25（2）

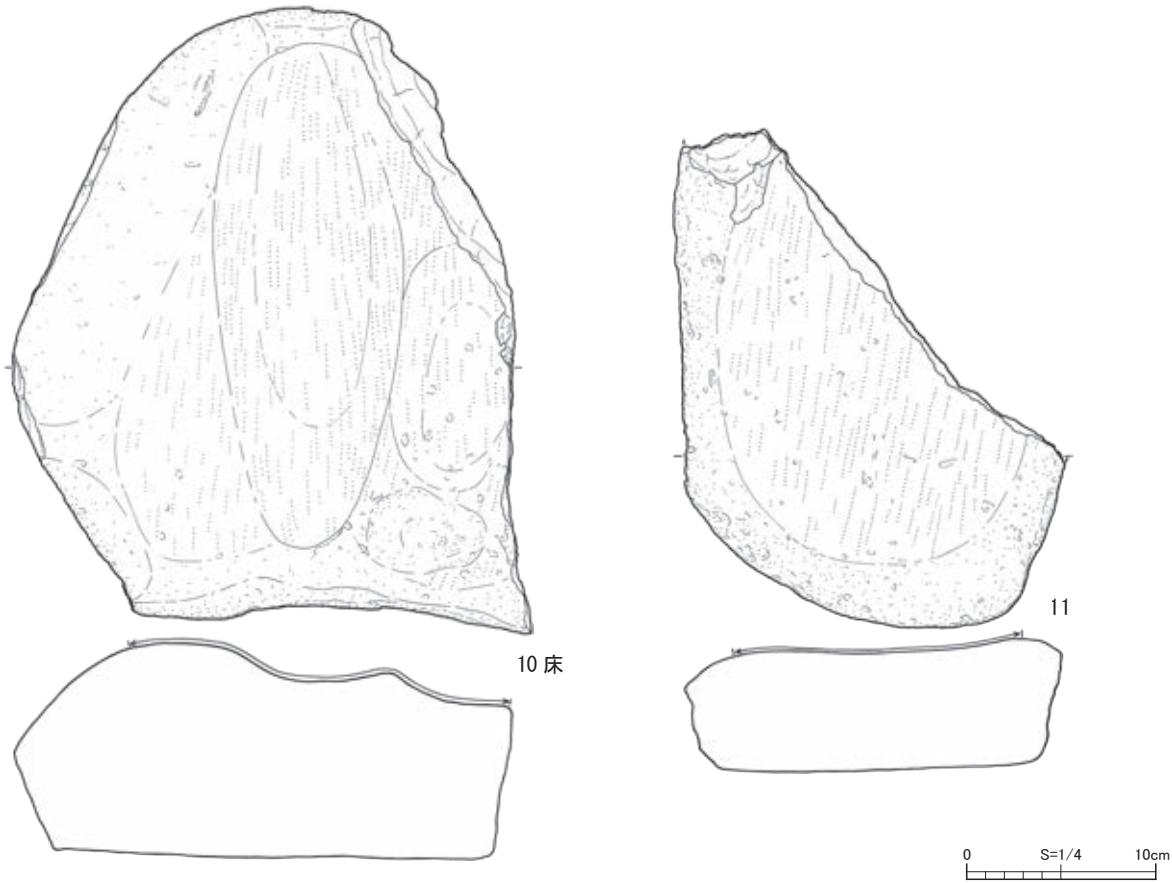
H-25 遺物分布



図VI-135 積穴住居跡 (134) H-25 (3)



図VI-136 竪穴住居跡 (135) H-25(4)



図VI-137 壇穴住居跡 (136) H-25 (5)

四分割して調査を行った。北東部のⅢ上層下部では礫集中 (HSC-1) と泥岩製の両面調整体と剥片 (HFC-1) がまとまって出土した。また、覆土下層から床面にかけて西側を中心炭化材・炭化物と焼土・焼土粒が検出され、炭化材は構造材とみられる。焼失住居と判断し、概ね 10 cm 以上のものについては位置を記録して取り上げた。焼失住居として廃絶された比較的直後にその窪みに礫や両面調整体やその剥片が廃棄されたものと考えられる。

土層：大きく上下に分けられる。上部には自然堆積層のⅡ上・B-Tm・Ⅱ下・Ⅲ上層、下部には屋根土の崩落土である黒褐色土（2層）・暗褐色土（3層）などが堆積する。

床面・壁：床は平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。平面形は隅丸方形である。床面中央やや南寄りに浅く掘りくぼめられた地床炉 (HF-1) がある。

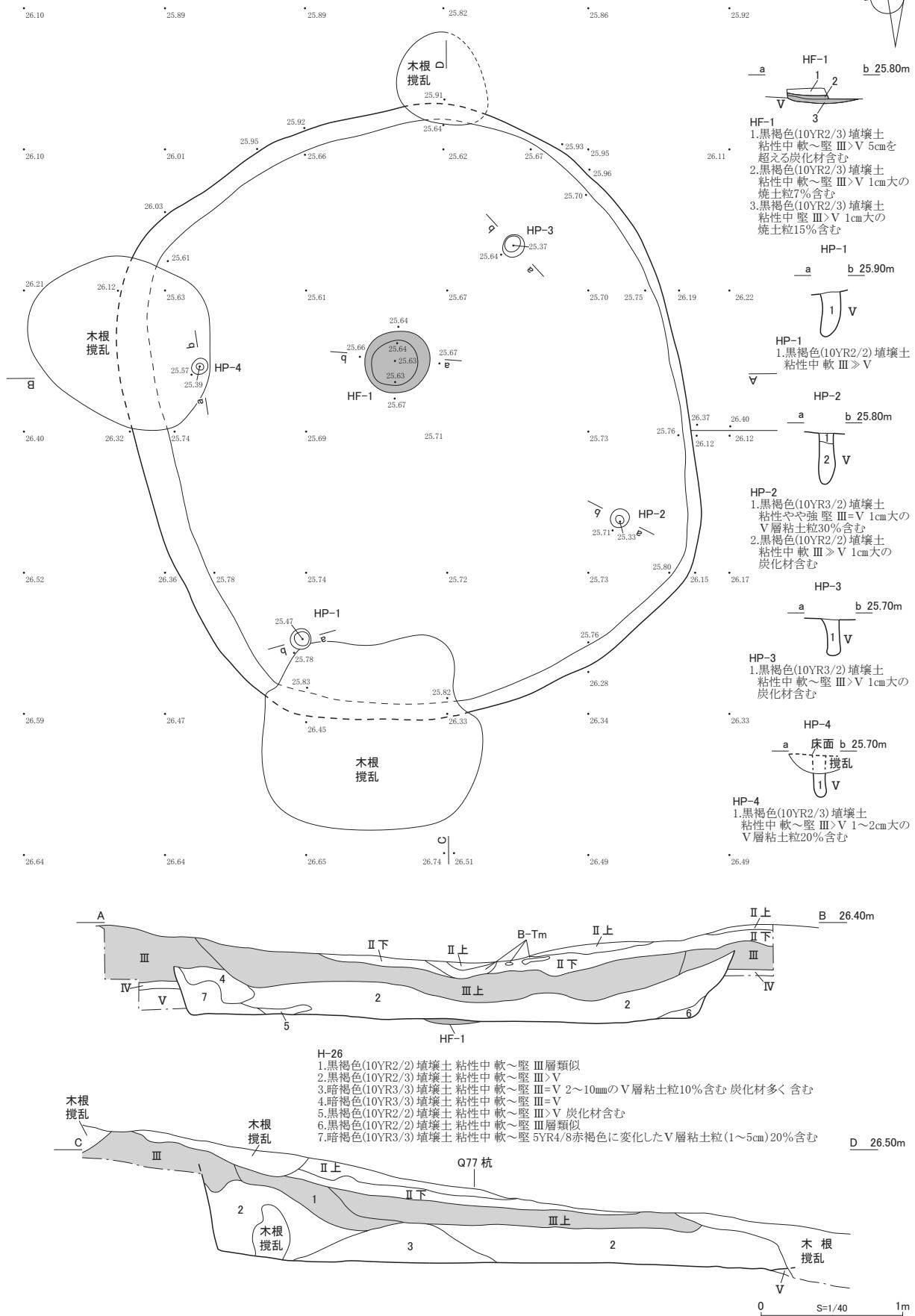
付属遺構：柱穴 4 基 (HP-1 ~ 4) が検出され、4 本柱の住居である。柱穴は太さ 10 cm 前後、深さ 30 ~ 40 cm で細い。

遺物出土状況：出土遺物の総数は 2,607 点で、土器等が 255 点、石器等が 2,352 点である。土器等はⅡ群 b 類 58 点、Ⅲ群 a 類 3 点、Ⅲ群 b 類 185 点、Ⅳ群 a 類 1 点、時期不明 5 点、焼成粘土塊 3 点が、石器等は石槍 1 点、両面調整石器 7 点、つまみ付きナイフ 1 点、スクレイパー 1 点、R フレイク 4 点、U フレイク 3 点、剥片 1,293 点、石核 9 点、石斧 1 点、すり石 1 点、たたき石 4 点、台石 2 点、石皿 1 点、原石 2 点、礫 1,021 点、垂飾 1 点が出土し、床面直上土からすり石などが検出された。

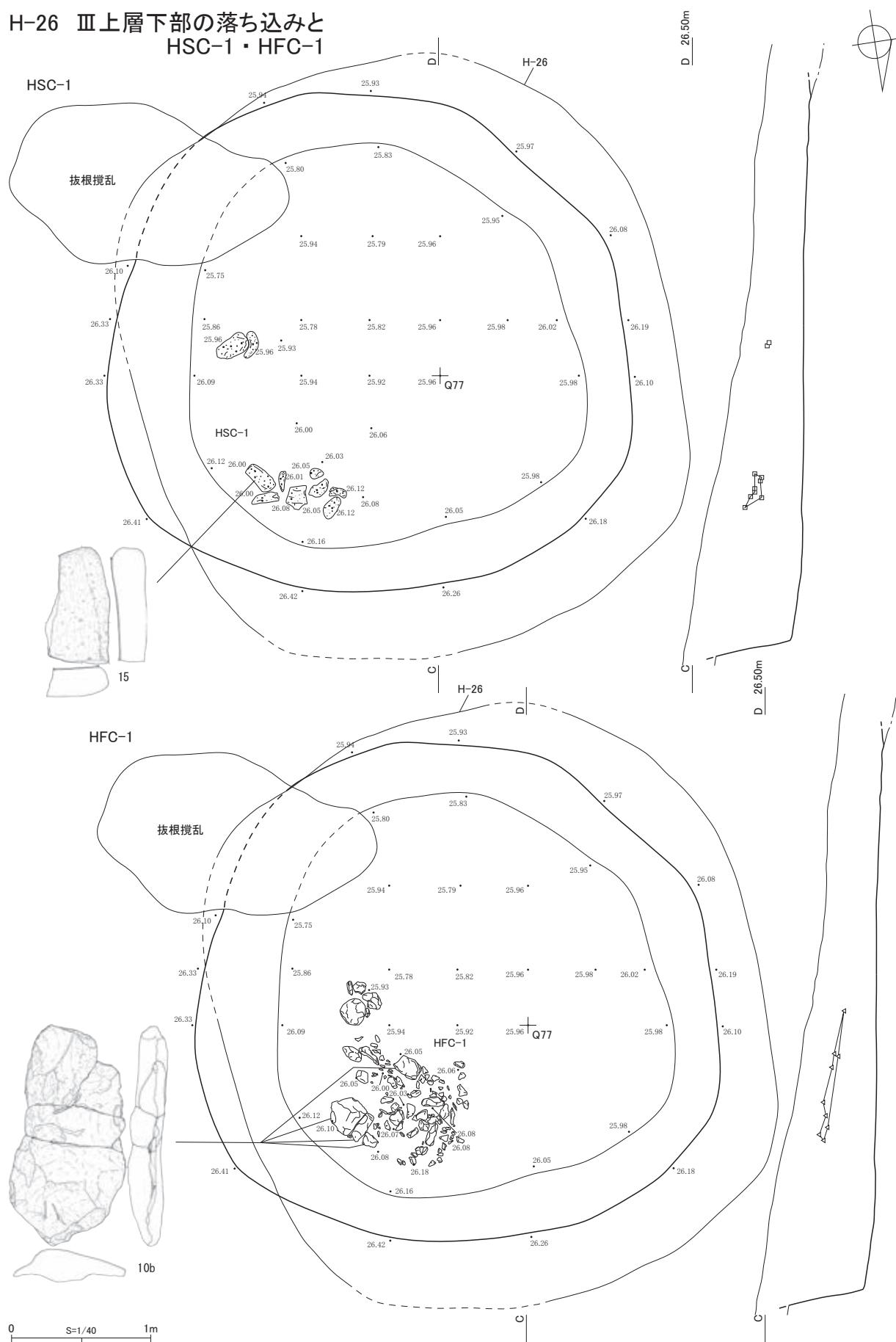
覆土下層・床面出土の 12 点 (K04-W33 ~ 44) について樹種同定を行った結果、クリ 10 点、ブナ属 1 点、エゴノキ属 1 点であった。クリが住居の構造材として主体的に利用されていたと考えられる。

時期：床面検出 HF-1 の燃焼材とみられる炭化物からは $4,150 \pm 30$ yr BP (K04-D23)、床面出土の建築

H-26 平面・断面

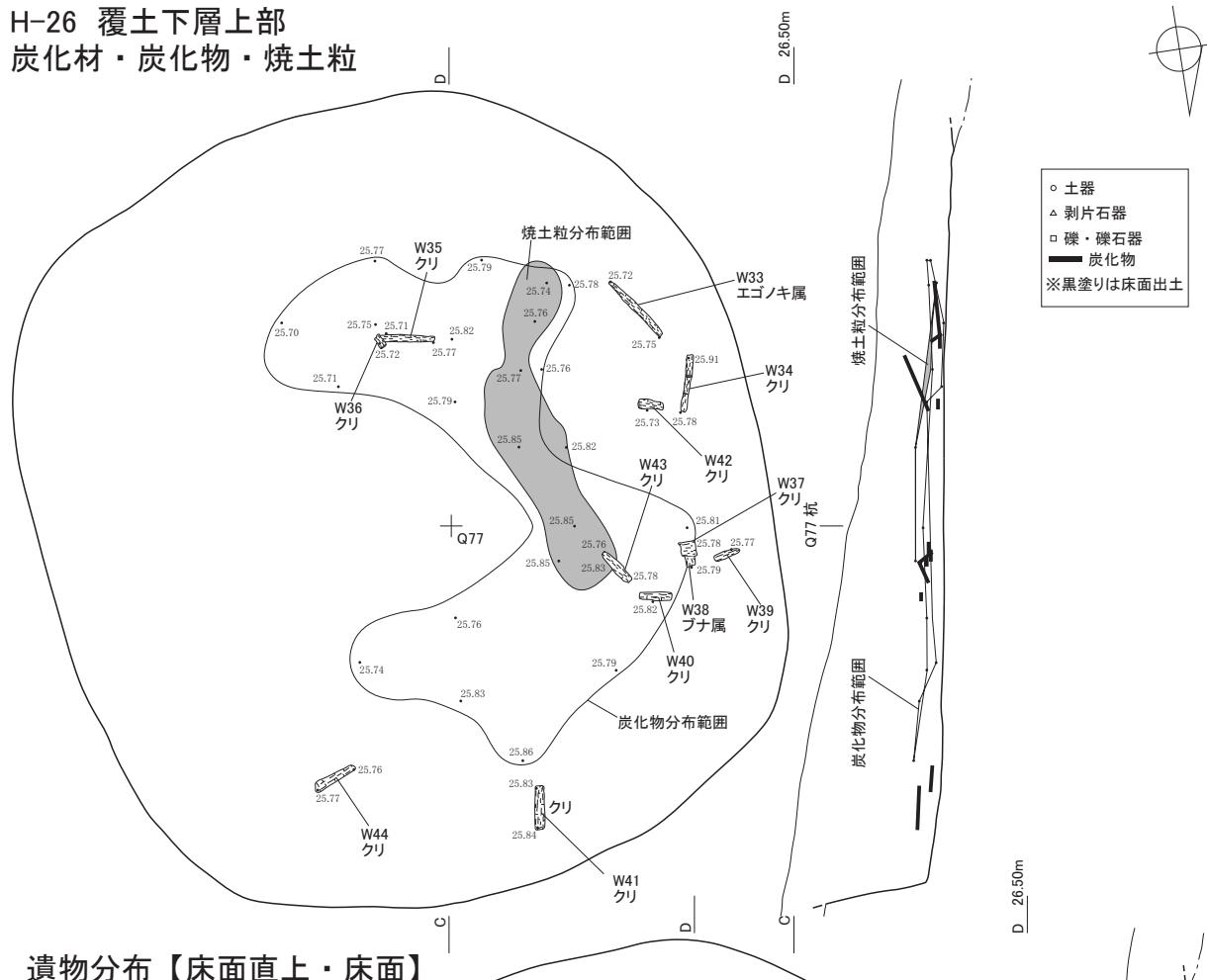


図VI-138 竪穴住居跡 (137) H-26(1)

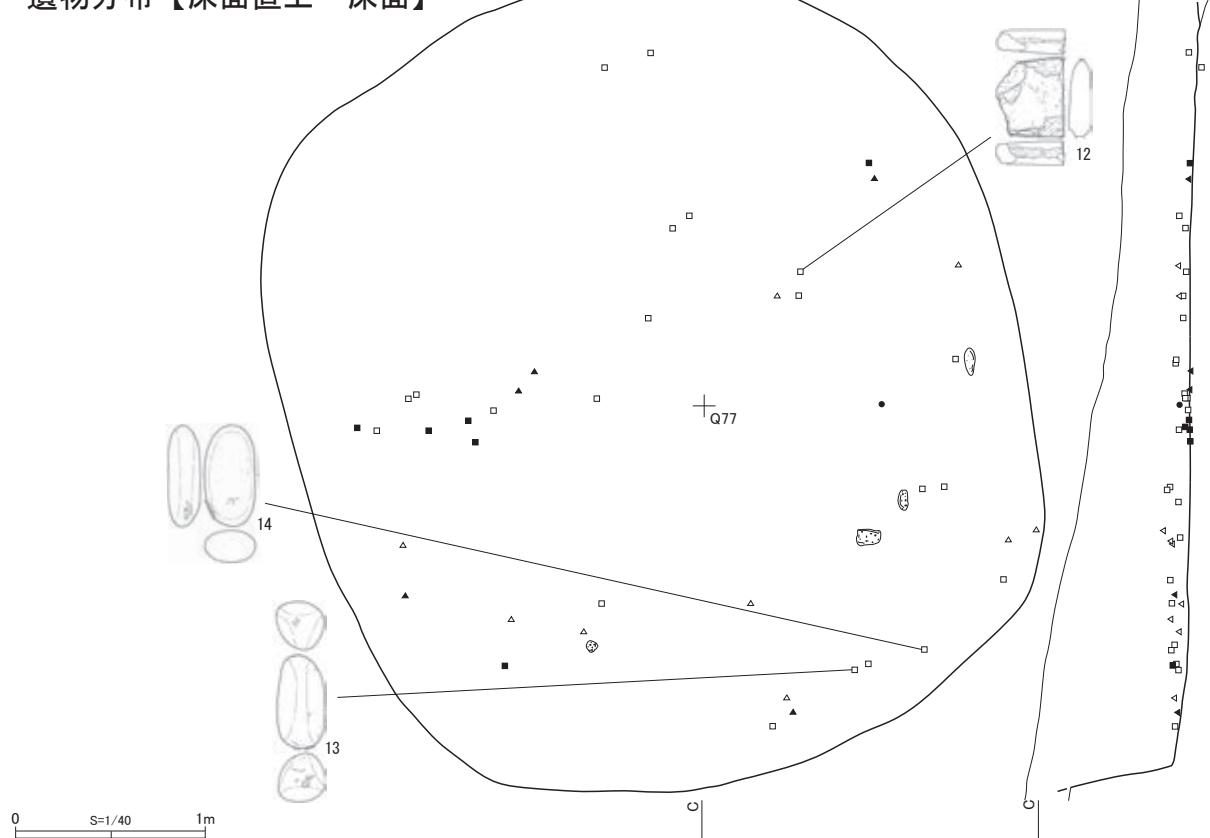
H-26 Ⅲ上層下部の落ち込みと
HSC-1・HFC-1

図VI-139 壇穴住居跡 (138) H-26 (2)

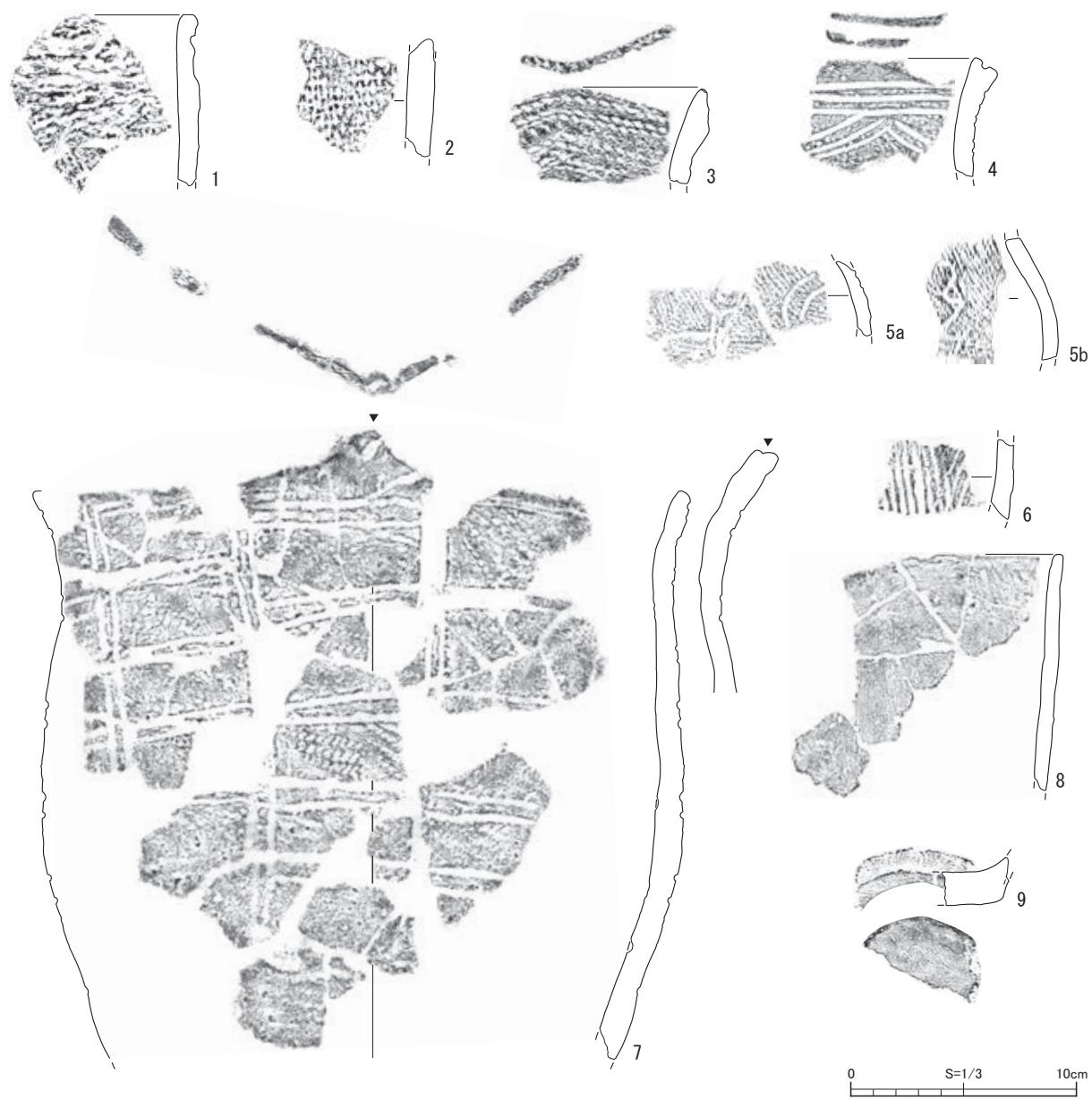
H-26 覆土下層上部
炭化材・炭化物・焼土粒



遺物分布【床面直上・床面】



図VI-140 積穴住居跡 (139) H-26 (3)



図VI-141 竪穴住居跡 (140) H-26 (4)

材とみられる炭化材からは $4,150 \pm 20$ yrBP (K04-D24) の年代測定値が得られている。出土遺物・年代測定値から縄文時代中期後半榎林式期と考えられる。

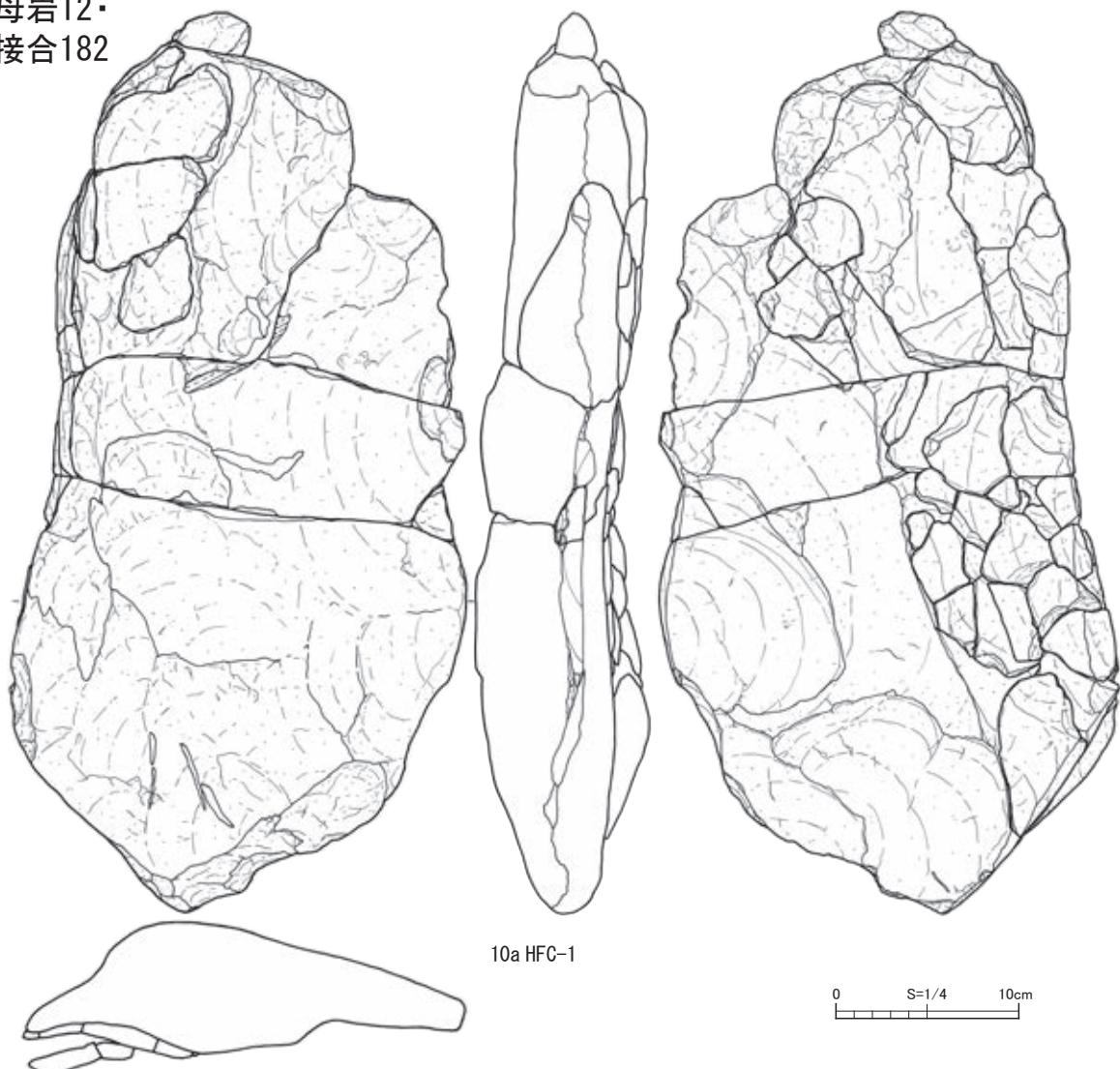
掲載出土遺物：(図VI-141-1～図VI-143-16、図版205～207)

土器：1～3はII群b類。1は円筒下層b1式。口縁部区画文の隆帶の上下に不整綾絡文が見られる。2・3は円筒下層d2式。2は多軸絡条体が縦位に施文され、内面はミガキにより光沢がある。3は波状口縁、断面三角形で厚みがある。口唇に沿って縄線が押捺され、口唇部と段の上には縄の刻みが施される。

4～9はIII群b類。4～7は榎林式相当。4の厚い口唇部には、深い沈線が刻まれる。口唇下に沿って3本の沈線とその下に弧状の沈線が描かれる。5は胴部の膨らむ器形で、単軸絡条体1類の地文に、沈線で円形文と直線、鋸歯状文が表現される。6は単軸絡条体1類の回転文である。7は胴部が膨らみ、頸部がくびれて口縁部は外反する。刺突のある山形突起があり、LR原体の斜回転による横走縄文に格子状の沈線文が施文される。8は無文の小型深鉢。9は底部で、外面に外傾の接合面が残る。

石器：10aは長さ約50cmの大型両面調整石器の接合資料。軟質の石材が利用され、粗い両面調整体

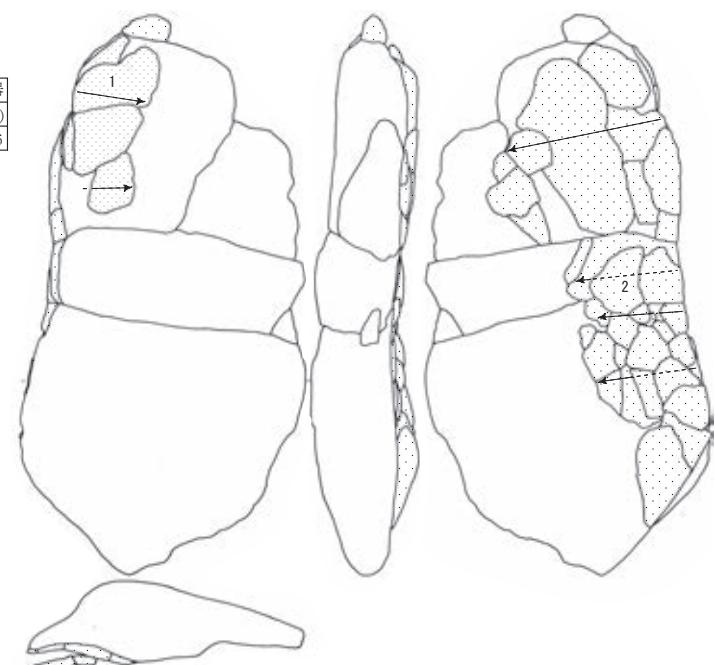
母岩12・
接合182



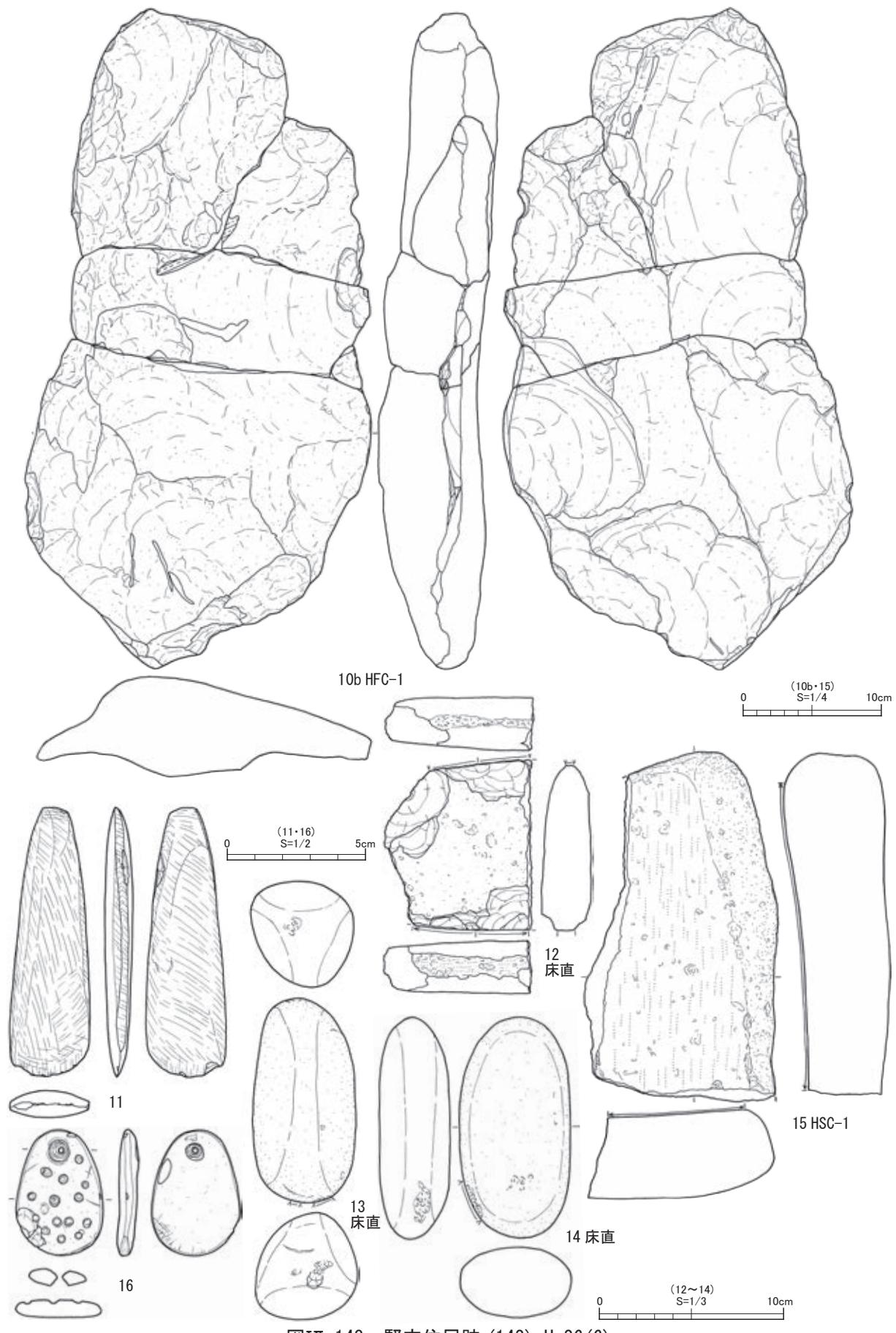
出土層位別点数

工程	1・2・両面調整石器
H-26 HFC-1	III上層 46(BF5)
計	46

BF:両面調整石器



図VI-142 竪穴住居跡 (141) H-26 (5)



図VI-143 竪穴住居跡 (142) H-26 (6)

で搬入される。遺跡内で粗い加工が行われるが、数回の剥離で本体10bは折損している。すべて住居廃絶後の窪みのⅢ上層で検出された剥片集中(HFC-1)から出土している。利器として使用できない石材と石器の大きさから考えて、剥離から廃棄まで特別な意味があるのかもしれない。11は石斧。全面的に丁寧に磨かれている。12はすり石VI類。下面の平坦面のほか上面にも幅の狭い平坦面がある。13・14はたたき石。13はI a1類、14はI b類。両者とも敲打面は未発達で、使用頻度は低い。15は石皿片。すり面は正面のみでほぼ平坦である。16は垂飾。小型扁平礫素材で、研磨整形のある下縁を除いて形状の変形は見られない。上部に1か所両面から穿孔され、断面は両面すり鉢状である。正面には穿孔と同様に回転によって14か所浅い窪みが付けられるが配列の規則性は不明である。

(鈴木)

豊穴住居跡27(H-27) (図VI-144~157、表VI-2、図版93~97)

確認・調査：調査区中央北側の標高26.8m付近の斜面部上部に位置する。Ⅲ層掘り下げ中に黒色土の広がりを確認し、直交する75(A-B)・Rライン(C-D)と黒色土の広がりの中央(E-F)に土層観察用のベルトを設定し、六分割して調査を行った。75・Rライントレチで土層及び壁・床面を確認した後、上部の黒色土から覆土を順次掘り下げた。東側はP-70に壊されていたが、輪郭が明瞭ではなかつたため床面まで並行して調査し、P-70はRラインベルトを残したまま壁の立ち上がりを坑底まで掘り下げて確認した。

土層：成因の異なる4種類の土層がある。自然堆積層のⅡ下・Ⅲ上・黒褐色土(2・7層)・暗褐色土(5層)、盛土層の黒褐色土(1層)、投げ込み土の褐色土(3層)、屋根土の崩落土である褐色土(10・11層)である。

時系列で整理すると、①住居の廃絶に伴う屋根土(10・11層)が崩落する。②窪みに腐植土(5・7層)が堆積する。③他の遺構の掘り上げ土(3層)が投げ込まれる。④窪みに腐植土(2層)が堆積する。⑤盛土(1層)が流入する。⑥窪みに腐植土(Ⅱ下・Ⅲ上層)が堆積する。②④⑥の3回腐植土が堆積し、①③、③⑤間に腐植土が形成される時間を想定できる。

断面図と層分布図で層の分布をみると①は全体的に分布し、その上面はすり鉢状である。②も概ね住居の一回り小さい範囲に平均10cmほど広く浅く堆積し、窪みはやや浅くなる。③は窪みの北東部に偏り、最大50cmほど堆積し、その分布の特徴から短時間に形成されたと考えられる。④は③により西に移動した窪みの底周辺にのみ堆積する。⑤は窪みのほぼ全域を埋めるように分布する。北側では60cmほど堆積し、上面は凹凸のない浅い窪みに変化し、⑥は⑤の窪みに堆積する。

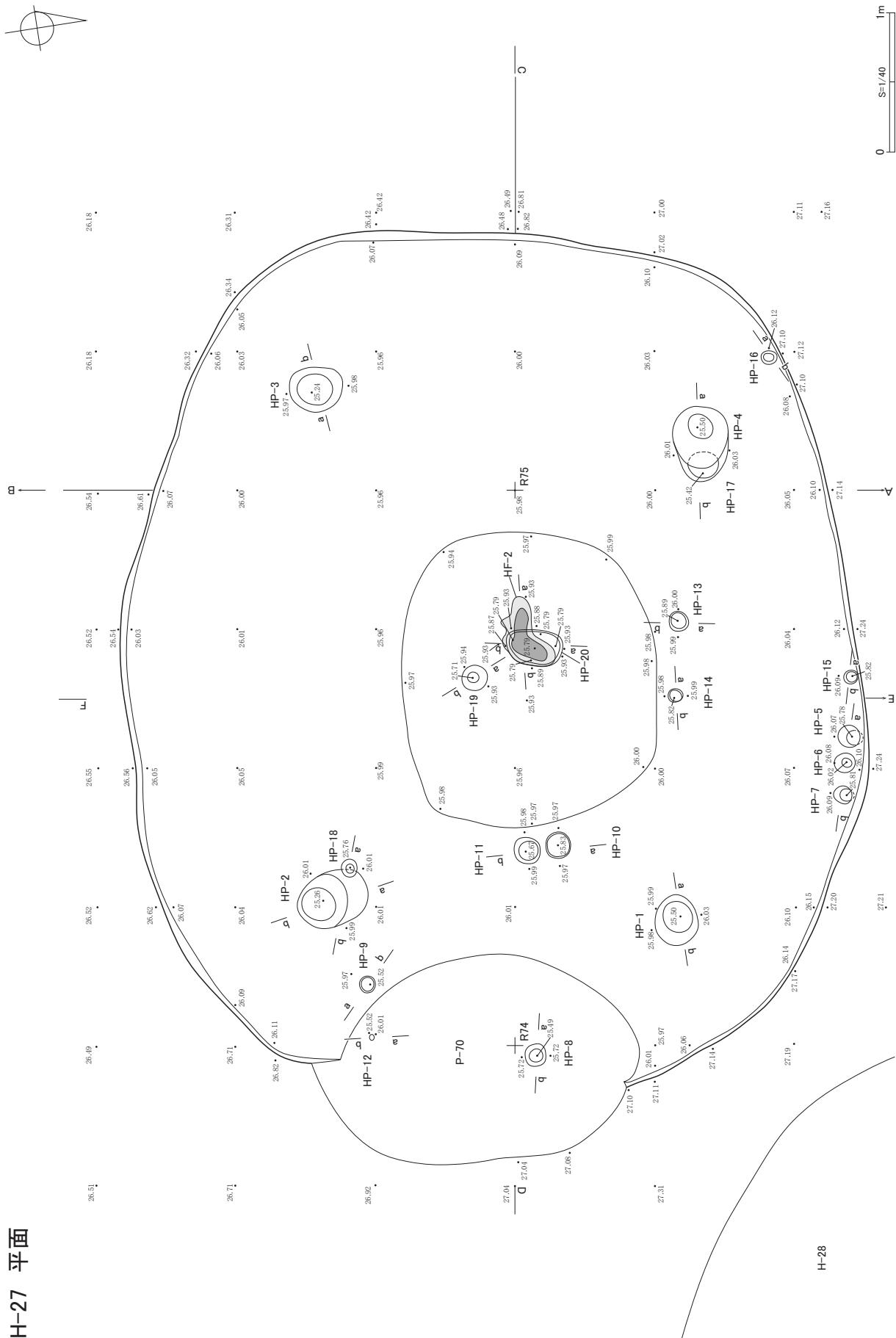
遺物はⅢ上層を覆土上1層、1層を覆土上2層、3層を覆土上3層、2・4・5・7層を覆土中層、10~14層を覆土下層として取り上げた。

床面・壁：床は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面中央には浅い窪みがあり、地床炉(HF-2)がある。平面形は長辺の胴の張る隅丸長方形である。

付属遺構：主柱穴5基(HP-1~4・17)、細い柱穴状ピット7基(HP-5・7~9・11・15・18)、直径10~20cmの浅いピット6基(HP-6・10・13・14・16・19)、杭状のピット(HP-12)、長径40cm程の浅いピット(HP-20)がある。4本柱の住居で、そのうち1本はHP-17からHP-4に移設されている。北側の長辺の中央には小型の柱穴状ピット(HP-5~7・15)が並んでいる。HP-19は砂ピットで、下部に中粒砂が詰まっている。

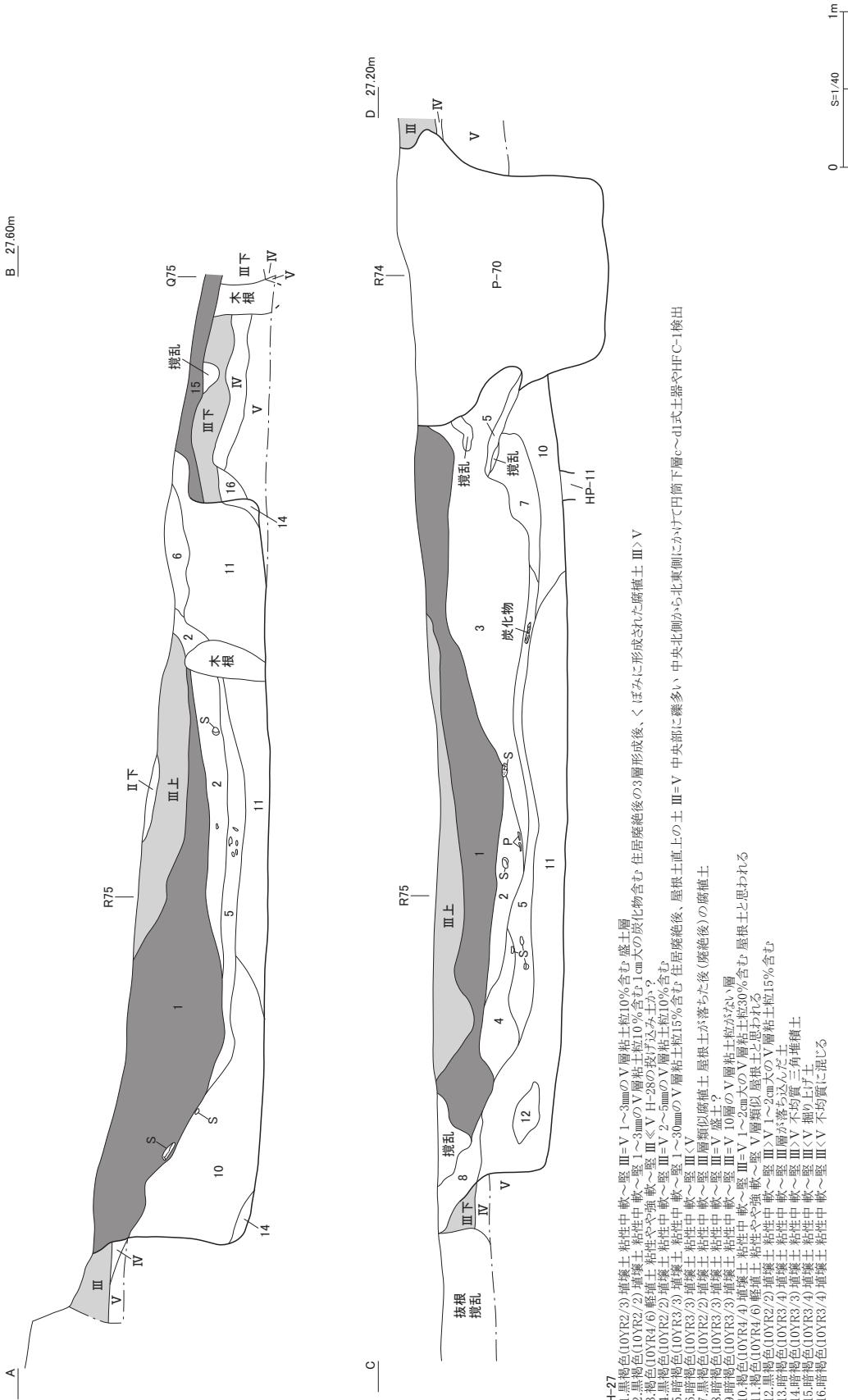
遺物出土状況：出土遺物の総数は29,442点で、土器等が1,676点、石器等が27,766点である。土器等はⅡ群b類1,646点、Ⅲ群a類4点、Ⅲ群b類20点、Ⅳ群a類1点、時期不明1点、焼成粘土塊3点、粘土塊1点が、石器等は石鏃1点、石槍5点、両面調整石器17点、籠状石器3点、つまみ付きナイ

H-27 平面

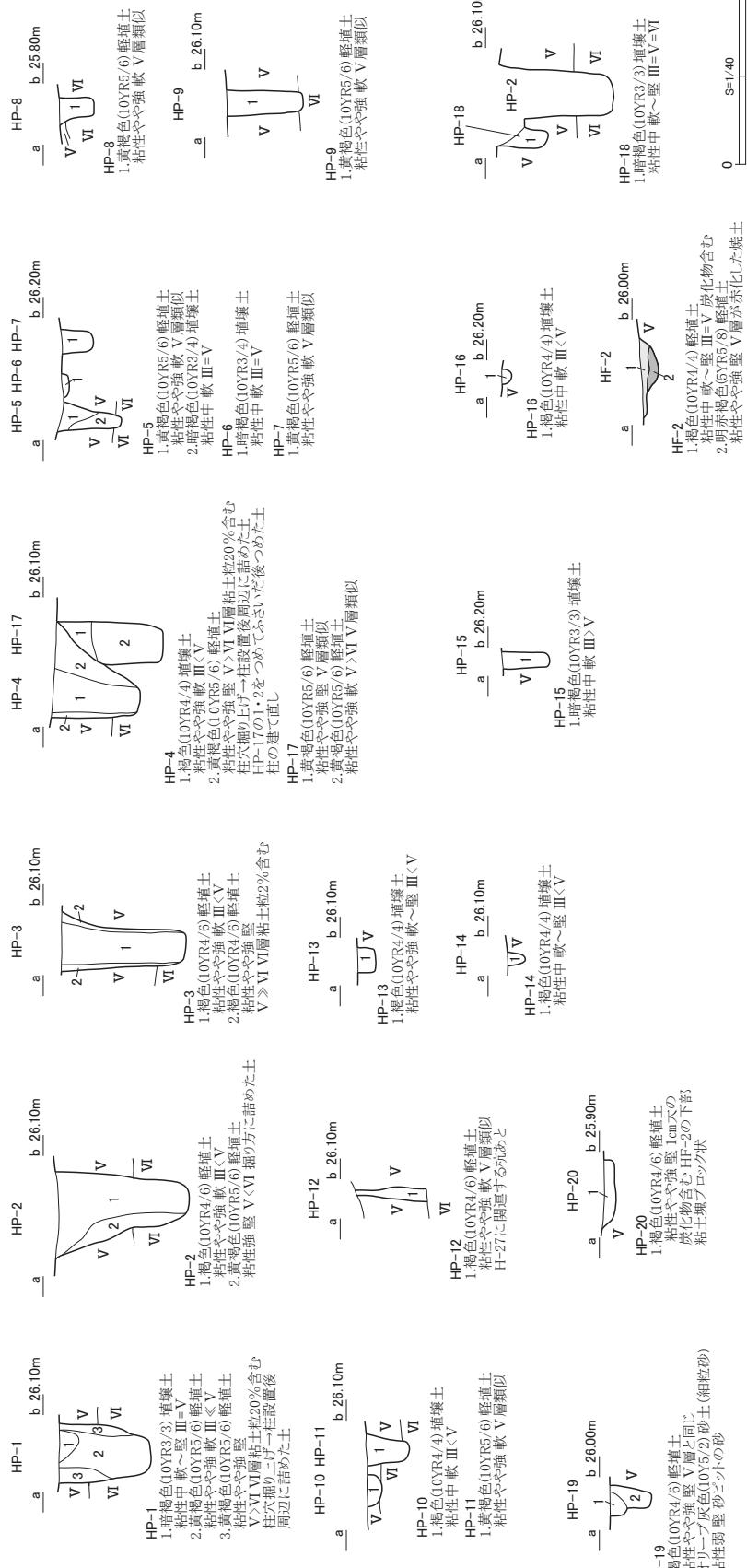
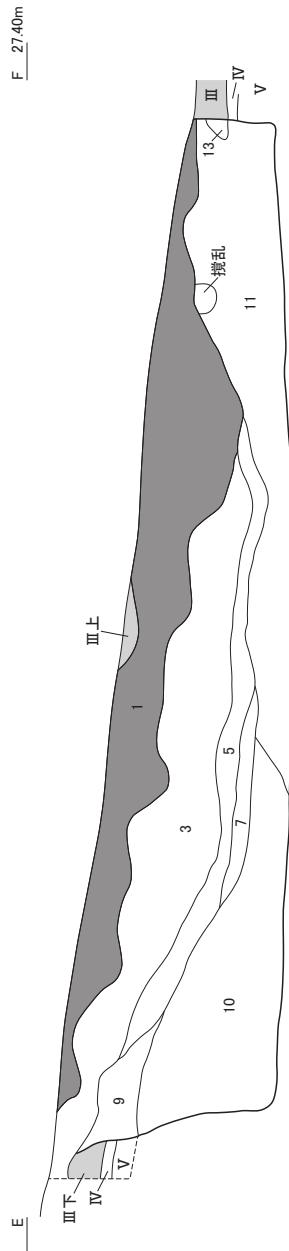


図VI-144 翼穴住居跡 (143) H-27(1)

H-27 断面

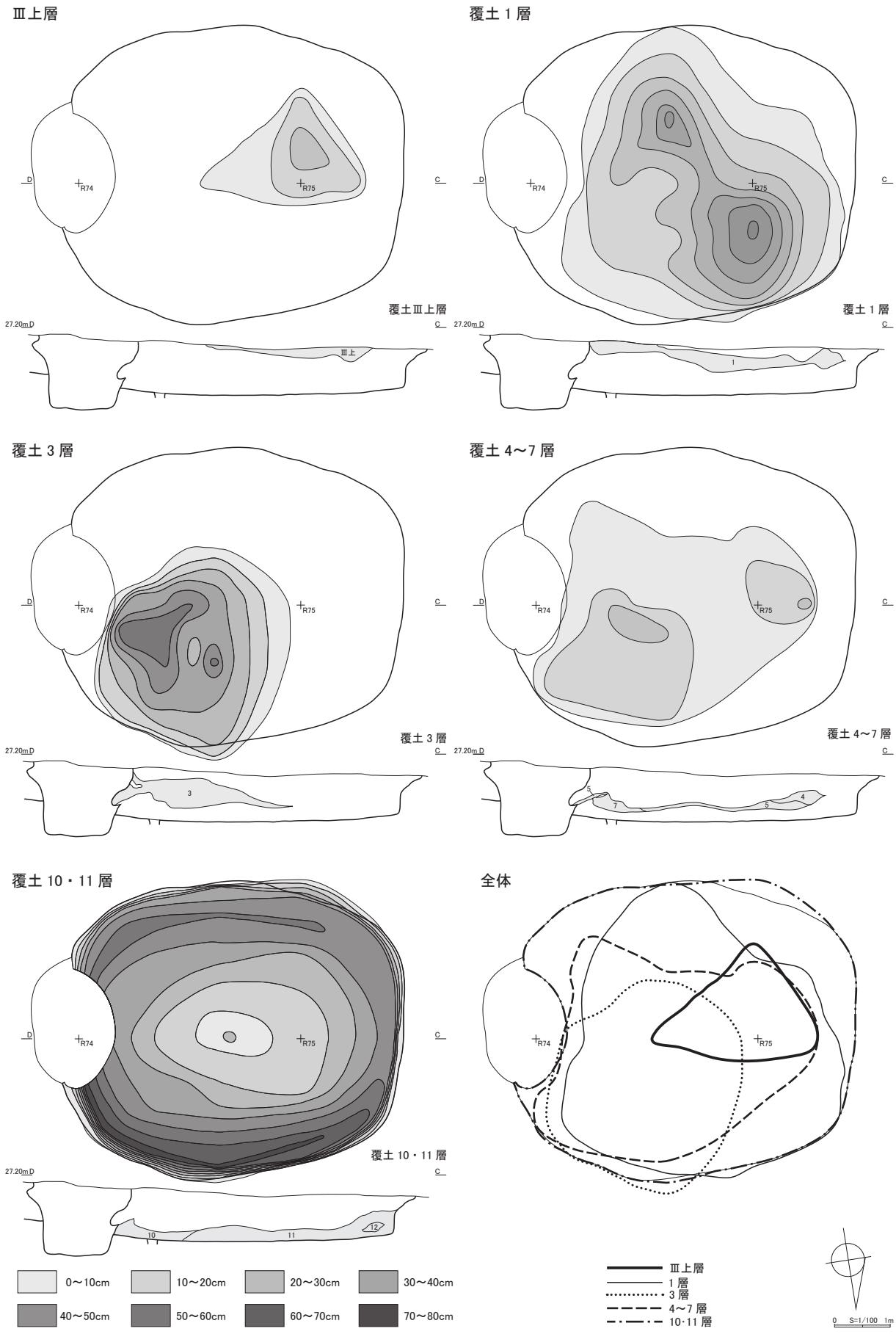


H-27 断面



VI C 地区の構造・遺物

図 VI-146 積穴住居跡 (145) H-27 (3)



図VI-147 竪穴住居跡 (146) H-27(4)

Figure VI-148 shows the plan and section of the vertical dwelling跡 (H-27) at the H-27 site. The plan view illustrates the circular dwelling structure with various artifacts labeled (e.g., 17, 20, 26, 42, 7a, 7b, R75, R74, P70) and stratigraphic levels (e.g., HF-1, HF-2, HFC-1, HFC-2, HSC-1, HSC-2, R75, R74, P70). The section view shows the vertical profile of the dwelling, with levels 10, 5, and 1 labeled. A legend indicates symbols for artifacts: circle for 土器 (pottery), triangle for 剥片石器 (blade stone tool), square for 石器 (stone tool), and a line for 炭化物 (carbonized material). A scale bar indicates 1m.

フ6点、スクレイパー20点、Rフレイク22点、Uフレイク3点、剥片26,532点、石核38点、北海道式石冠1点、扁平打製石器11点、すり石4点、たたき石7点、石皿1点、原石14点、加工痕のある礫2点、礫1,077点、石製品2点が出土した。

土器の個体資料・剥片集中(HFC-1)・炭化物は5層、礫集中(HSC-1)は3層下部から出土しており、両方とも腐植土中かその直上である。腐植土が形成される時期の窪みの状態で廃棄されたと考えられる。床面の遺物は少なく、扁平打製石器や北東部壁際から少量の剥片集中(HFC-2)が検出された。

時期：覆土上層検出HF-1出土の炭化物からは $4,460 \pm 30$ yrBP(K04-D25)、覆土中層出土の炭化物からは $4,800 \pm 30$ yrBP(K04-D26)、床面検出HF-2出土の燃焼材とみられる炭化物からは $4,630 \pm 30$ yrBP(K04-D27)の年代測定値が得られている。遺物・年代測定値から本住居は縄文時代前期後半円筒下層c～d1式期で、廃絶後の窪みは中期前半期にかけて利用されたと考えられる。

掲載出土遺物：(図VI-149-1～図VI-156-56、図版206～211)

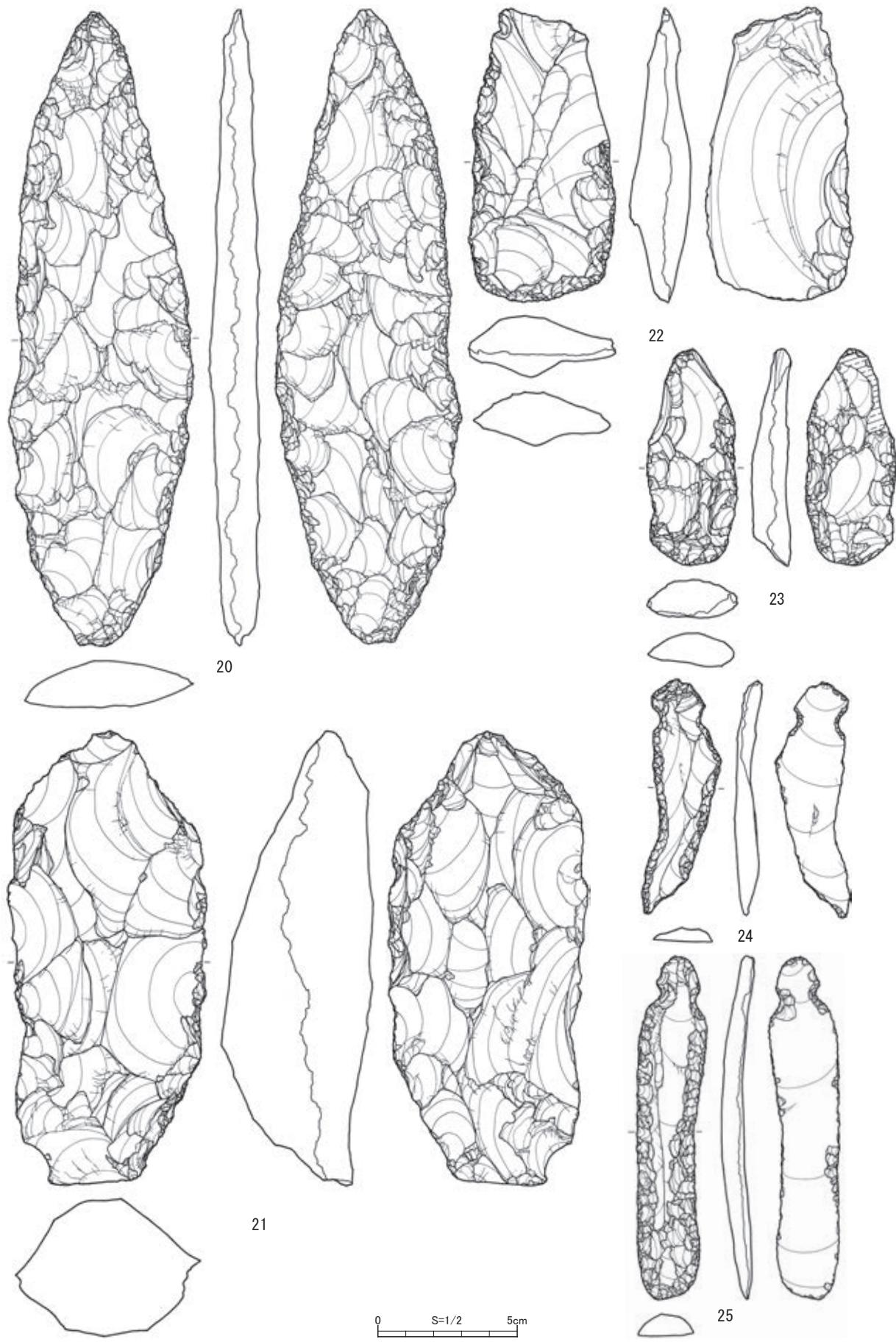
土器：1～18はⅡ群b類。1は円筒下層c式。底部は図上で復元している。口縁部上下に、撫りの異なる2本1組の縄線である組紐状縄線を2組単位で区画し、口縁部下部には短沈線が施される。区画内にはRL斜行縄文を施文し、その中段には結束第1種羽状縄文を、2か所で原体の向きを変えて回転させ、その接続部は菱形の模様になる。胴部は単軸絡条体1類Rの回転文である。2は円筒下層b2式。隆帯で区画された口縁部に横方向の縄線と縦区画の縄線が施文される。3は円筒下層b1～c式。口唇直下に縄線が見られる。4は円筒下層c式で、直前段反撫縄文RRLが施文される。5～13は円筒下層d1式。5は口縁部に組紐状縄線・結束第1種羽状縄文、胴部に自縄自巻縄文L、6は口縁部に3段の結束第1種羽状縄文、胴部に自縄自巻縄文L、7は組紐状縄線で区画された口縁部に自縄自巻Lの横回転文に組紐状縄線による縦区画、胴部に自縄自巻縄文L、8・9は結束第1種羽状縄文で区画された口縁部に組紐状縄線が2組、胴部に自縄自巻縄文L、10は結束第1種羽状縄文で区画された口縁部に縄線、胴部に自縄自巻縄文L、11は口縁部に2本の縄線Lのみ、胴部には自縄自巻縄文L、12は口縁部に結束第1種羽状縄文のみ、胴部に自縄自巻縄文Lが施文される。9は低い4単位の波状口縁で、口唇部に沿って4本の縄線とその下位に結束第1種羽状縄文が施文され、胴部は自縄自巻縄文Lの回転文で、下部には結束第1種羽状縄文が帶状に巡る。13は2段の結束第1種羽状縄文が見られる。14・15は円筒下層d2式。14はくびれて外反する口縁部で、縄線と口唇部に縄の側面圧痕が施文され、内面はミガキにより光沢がある。15は多軸絡条体の回転文である。16～18は底部。16は円筒下層b1～c式。17は円筒下層c～d1式で、単軸絡条体1類の回転文が施文され、器体は薄い。18は円筒下層d1～d2式。自縄自巻縄文Lで、外面はミガキが顕著である。

19はⅢ群a類。細い粘土紐で縁取られた菱形の突起のある口縁部片で、その下には貼付の剥がれた痕跡がある。サイベ沢VII式。

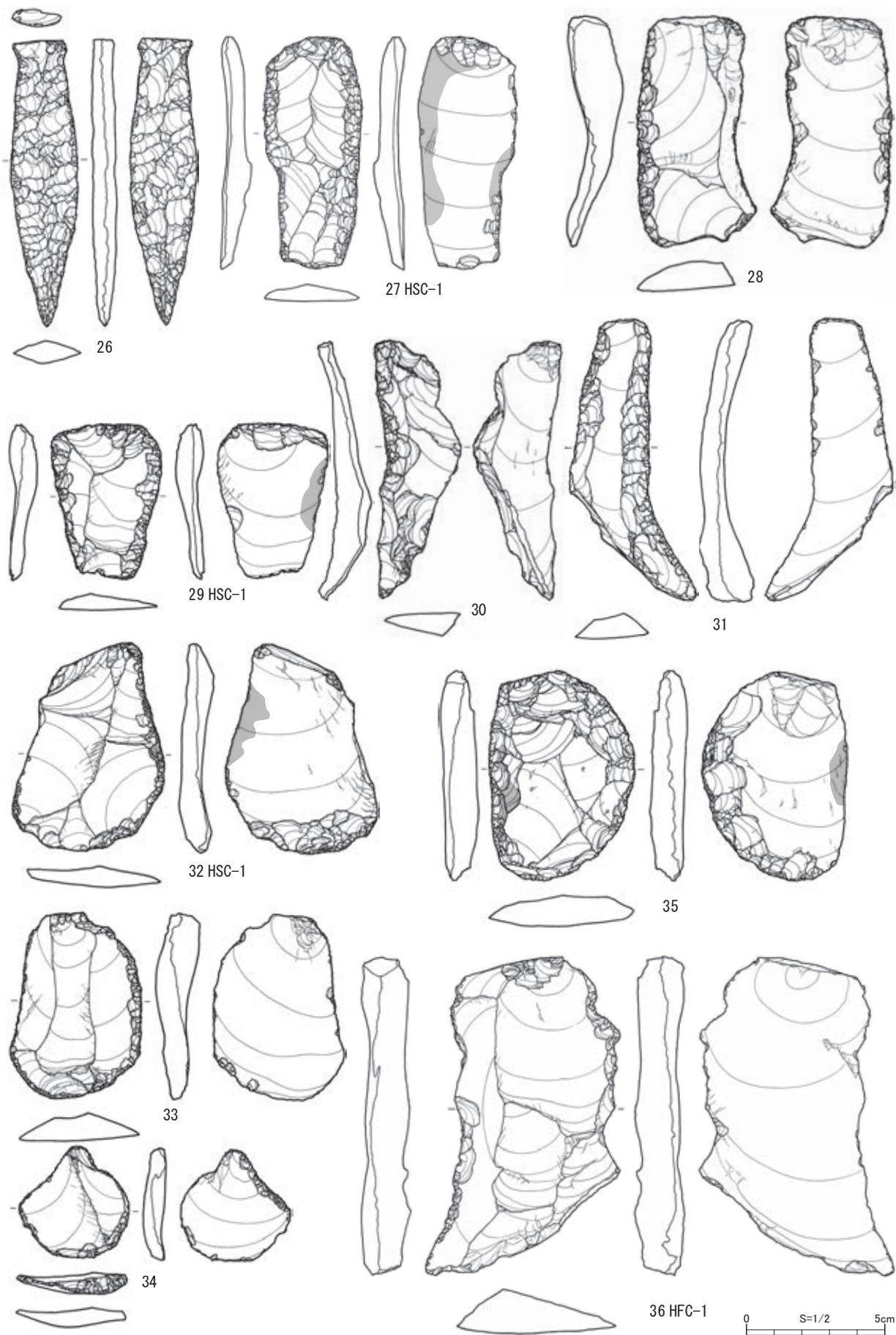
石器：20は石槍。20cmを超える大型品で、厚さも2cm以下で薄い。平坦剥離面で覆われ、縁辺部には細かい剥離が見られる。左右はほぼ対称で、反りもなく整った形状である。表面には大きなこぶやヒンジによる窪みもなく、原石からほぼ順調に剥離が進行したものと考えられる。21は両面調整石器。粗い剥離で覆われ、縁辺は鈍角の部分が多く、厚手である。22・23は籠状石器。22は縁辺のみの加工で、横長剥片の素材形状が残る。23は両面調整により整形される。24～26はつまみ付きナイフ。24は湾曲した素材の縁辺のみ、25は良形の石刃状の素材に押圧剥離による加工が施される。26は先の尖った左右対称の両面調整体である。先端部は細く、剥離角も大きいことから刃部再生が行われた可能性がある。27～35はスクレイパー。27・28はIb類、29はII類、30・31はIII類、32～34はIV類、35はV類。27・29は素材打面部、32は反りのある末端部を除去する加工が施され、35は右側



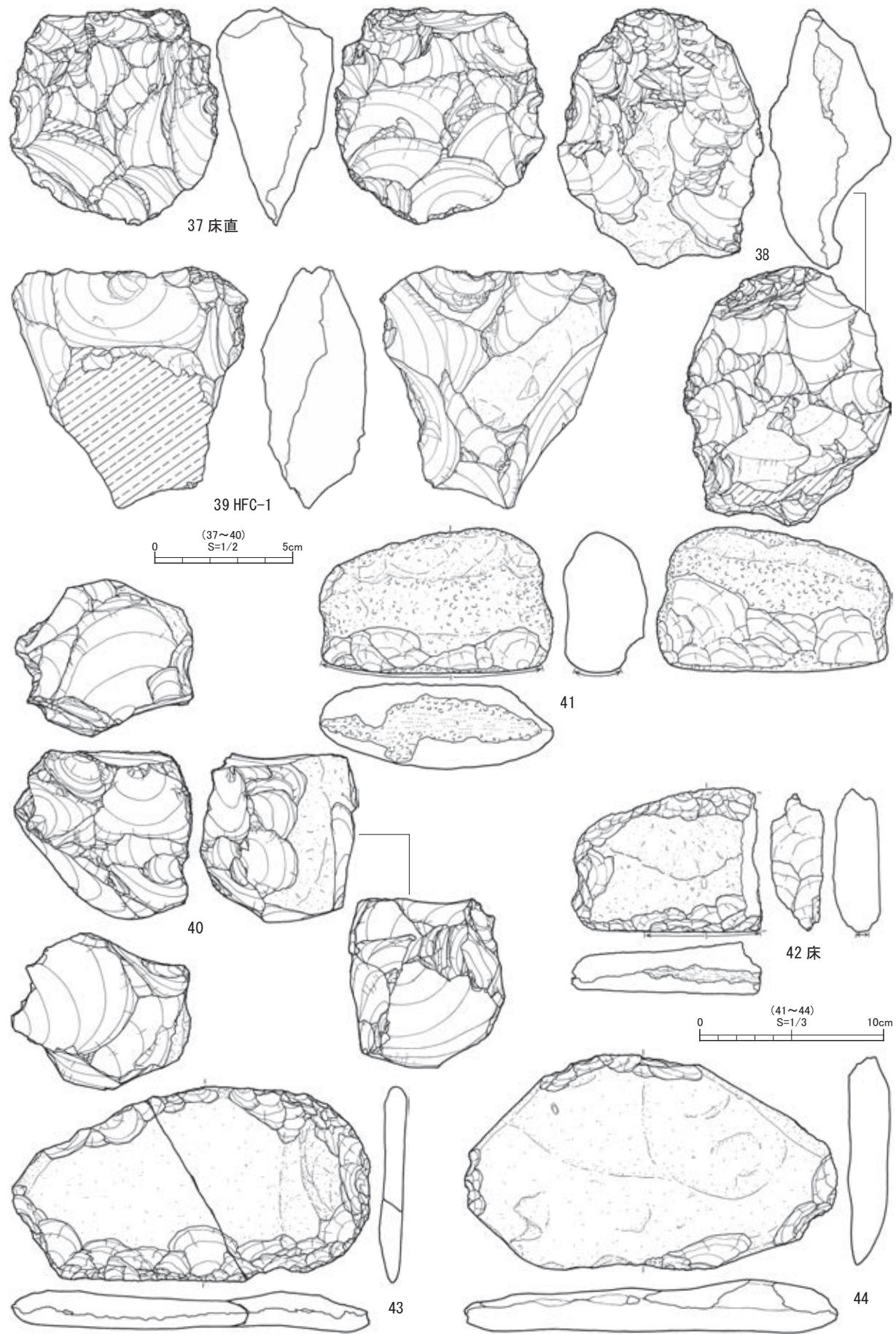
図VI-149 竪穴住居跡 (148) H-27(6)



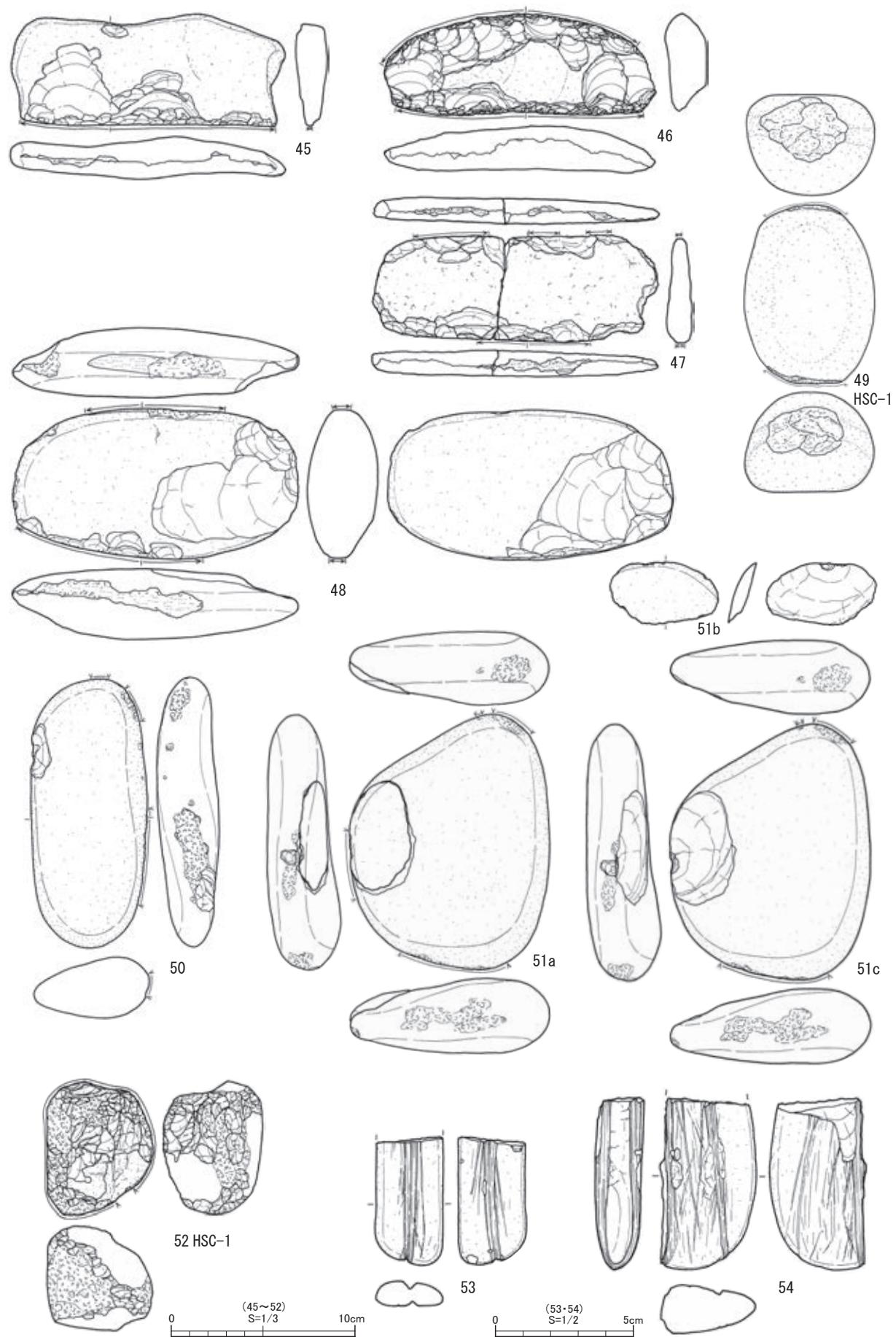
図VI-150 竪穴住居跡 (149) H-27 (7)



図VI-151 積穴住居跡 (150) H-27(8)

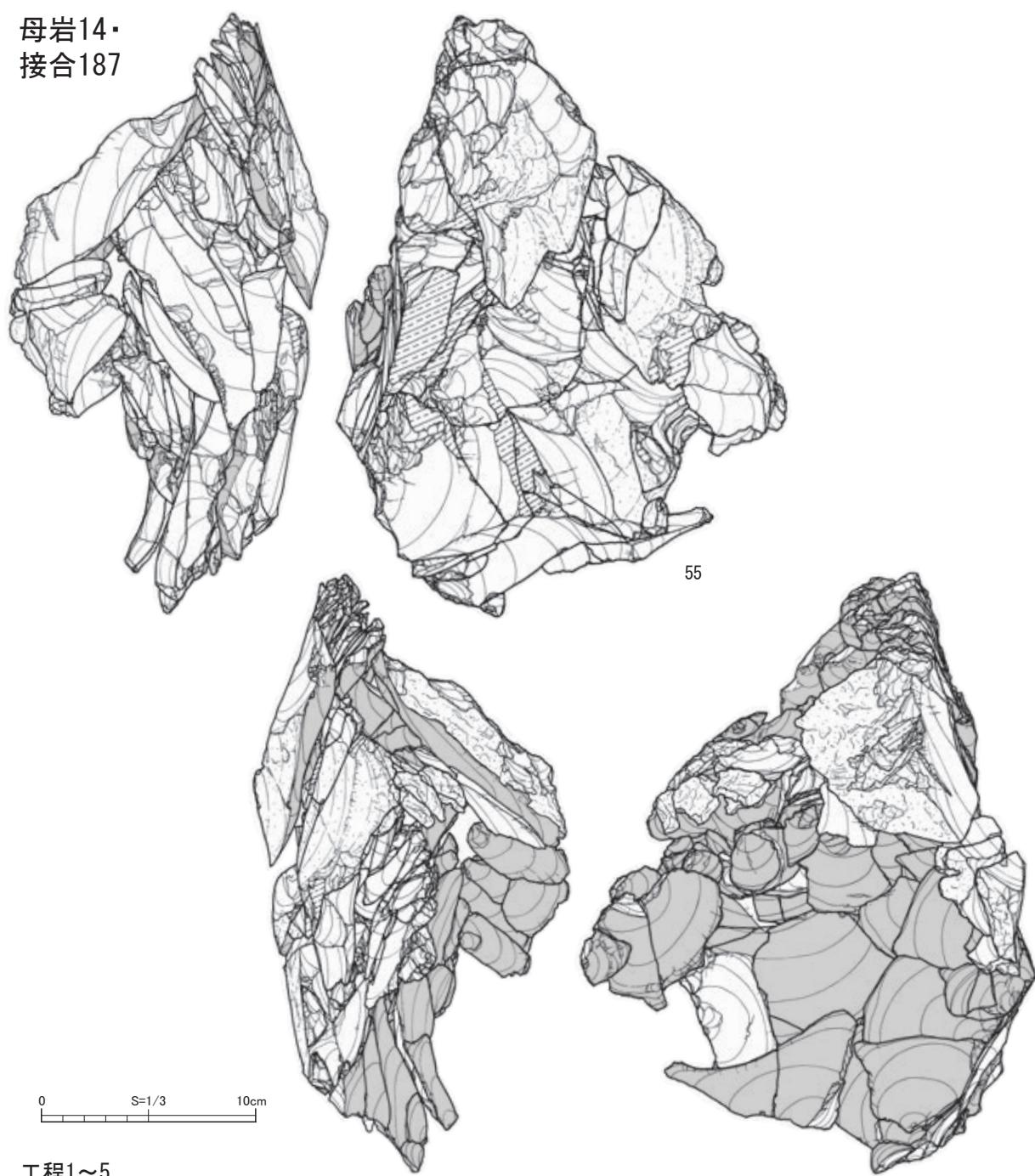


図VI-152 竪穴住居跡 (151) H-27 (9)

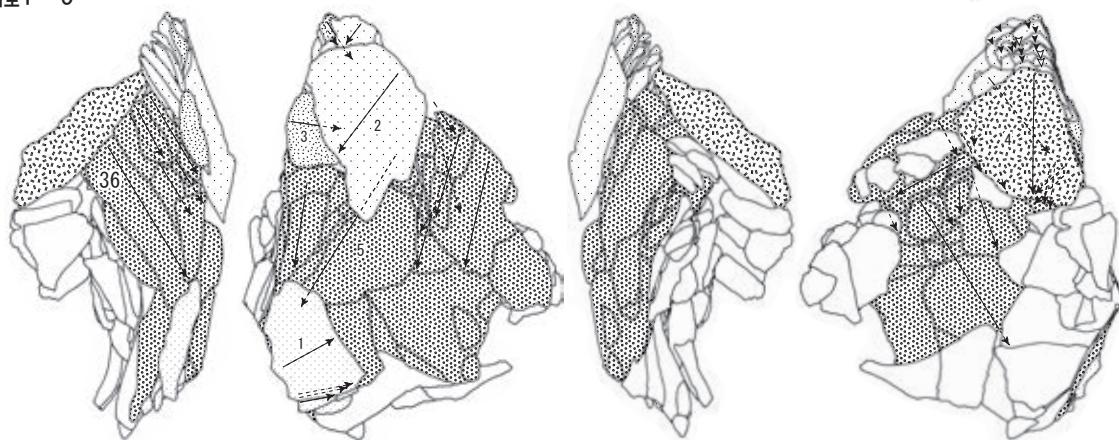


図VI-153 竪穴住居跡 (152) H-27 (10)

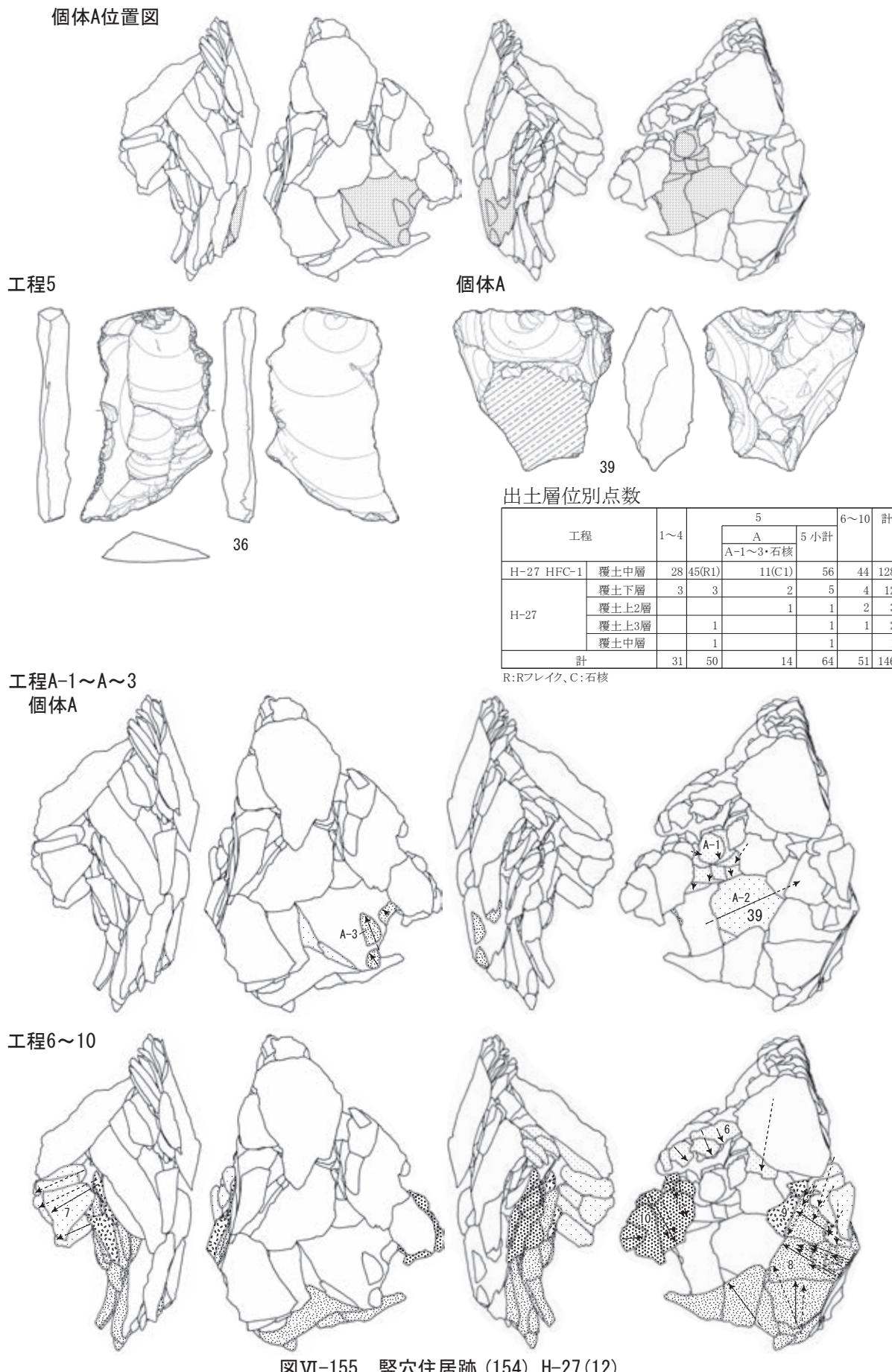
母岩14・
接合187



工程1~5

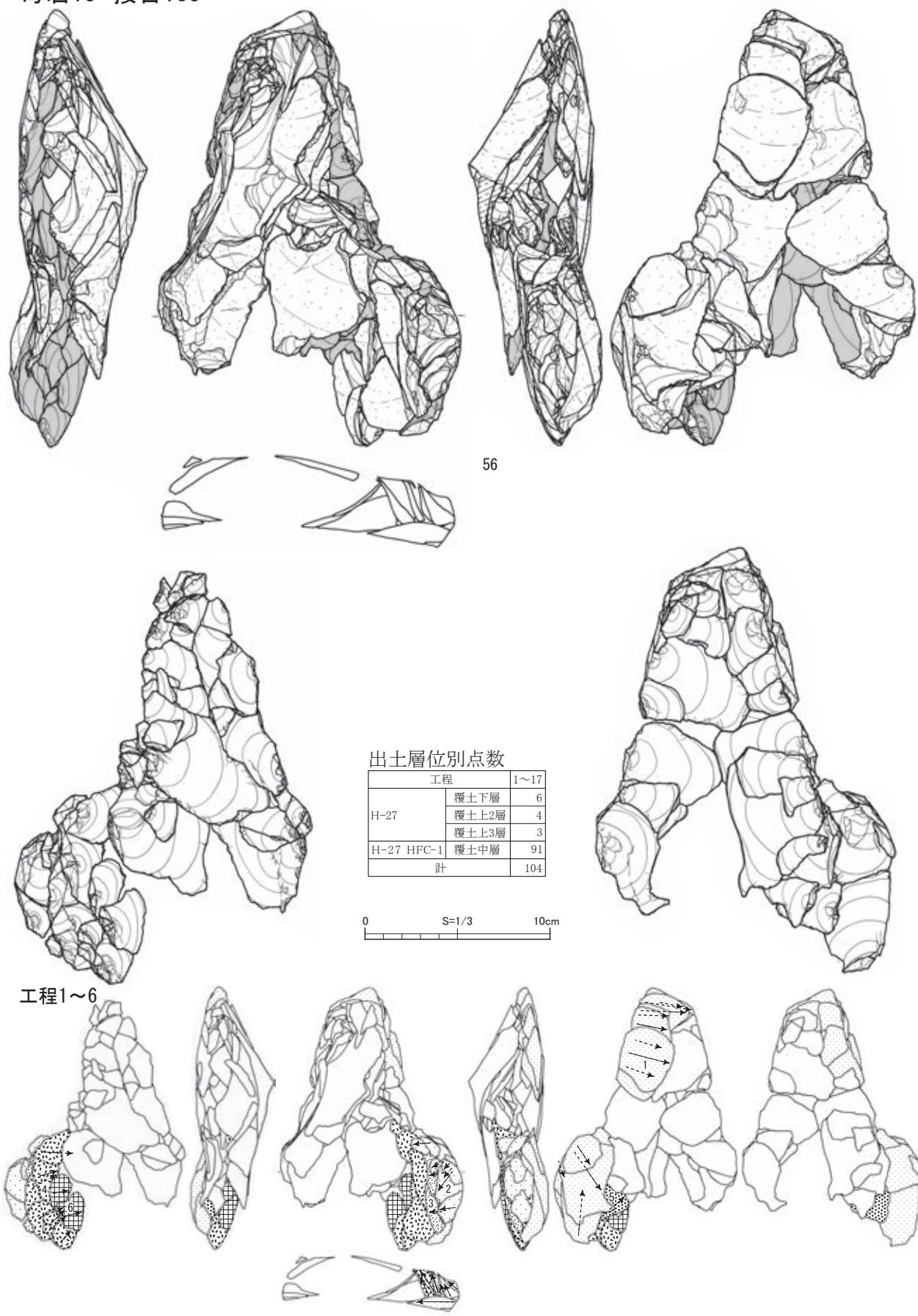


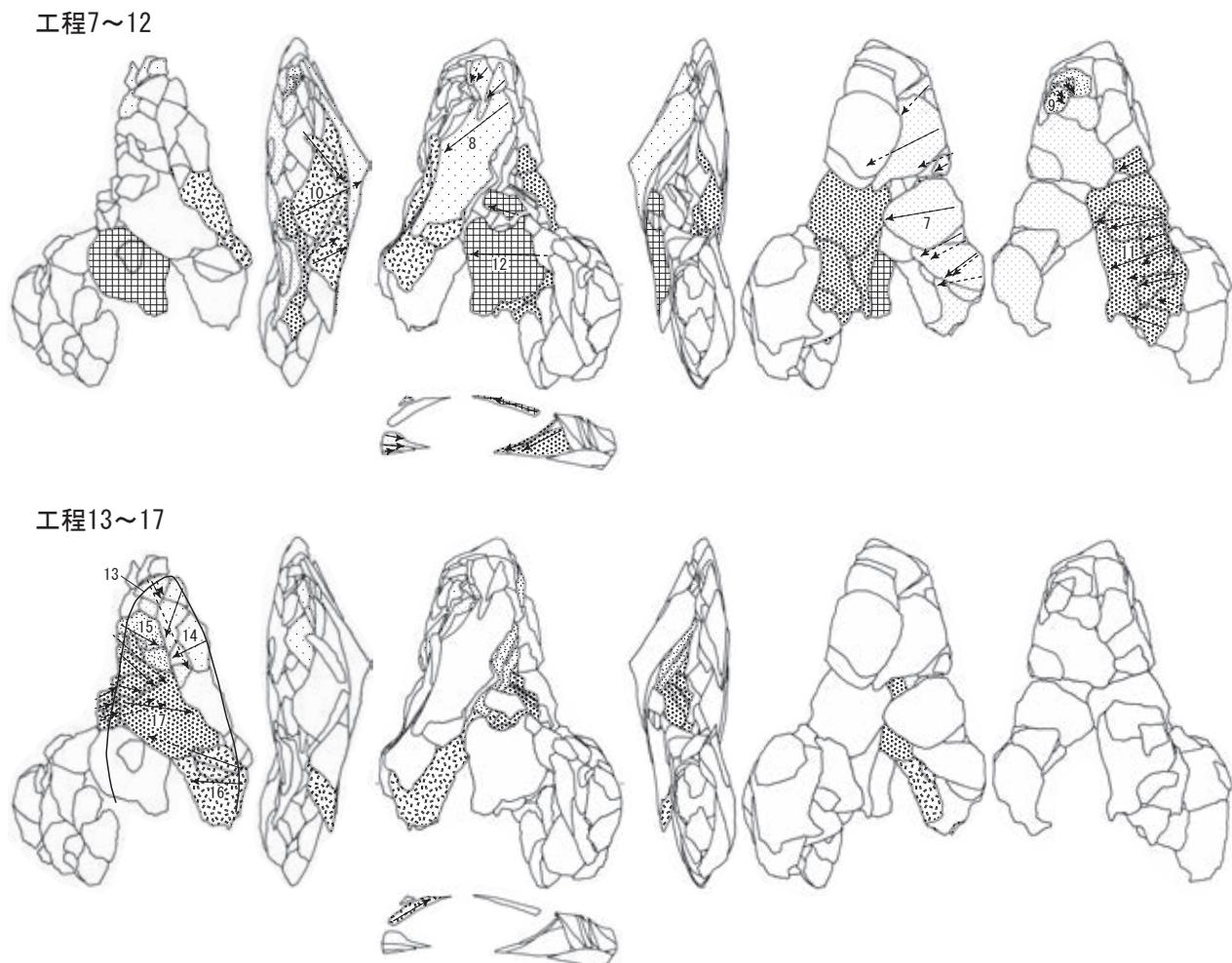
図VI-154 竪穴住居跡 (153) H-27(11)



図VI-155 竪穴住居跡 (154) H-27(12)

母岩13・接合183





図VI-157 穴住居跡 (156) H-27(14)

縁が両面加工により弧状に加工される。36はRフレイク。母岩14・接合187に含まれ、大型剥片の側縁に部分的な加工が見られる。37～40は石核。37・38はIIa類、39はIV類、40はV類。38・39は節理面があり、原石から分割された素材である。40は砂の凝集した原礫面が残る。39は母岩14・接合187に含まれる。41は北海道式石冠。全面敲打によって整形される。両面、特に裏面で下面からの剥落が激しく、下面の器厚が半分ほどに減少する。重度の使用が示唆される。42～47は扁平打製石器。42～44はI類、45～47はIV類。44は未成品で、左右両端・上縁に加工があるが、刃部が想定される下縁はほとんど剥離がない。48はすり石Ia類。上下に平坦面がある。上縁には敲打痕があり、たたき石としても利用される。49～52はたたき石。49はIa2類、50・51はIc類、52はIII類。51aは本体51cに剥落した剥片51bが接合する。剥片はH-27、たたき石はL79区出土で30mほど離れている。53・54は石製品。どちらも擦り切り痕があり、54の左側縁は擦り切りによる分割面である。54の正面中央には浅い擦り切り痕があり、対応する裏面には線状の溝がある。擦り切る前の下書きと考えられる。これらは石のみの素材製作段階の可能性がある。

55・56は接合資料。55(母岩14・接合187)は27.7×20.8×14.7cm。表面があばた状の角礫素材。正面上部右側縁からの連続剥離(工程2)によって突出部がなくなった後、正面(工程5・8～10)、裏面(工程6・7)で多方向からの剥離が行われる。石核は求心状の剥離によるディスク状であったと推定される。工程5で剥離された大型剥片はRフレイク36に加工される。同工程の個体Aは本体

同様、素材裏面（工程1・2）、素材背面（工程3）の両面で多方向からの剥離が行われる。56（母岩13・接合183）は23.3×16.3×7.3cm。平滑な原石面に覆われた角礫素材。右下部の突出部の除去（工程1～6）、正面上部の厚みの除去（工程8）後、やや粗い剥離による加工（工程7～12）が進行する。比較的整った両面調整体に変化した後、打点の小さい薄い剥離（工程13～17）に移行し、表面の滑らかな20×9×3cmほどの石槍が製作されたと推定される。本体は出土していない。全点H-27覆土からの出土で、そのほとんどはHFC-1から検出されていることから、石器製作後、まとめて廃棄されたと考えられる。

（鈴木）

堅穴住居跡28（H-28）（図VI-158～162、表VI-2、図版93・98・99）

確認・調査：調査区中央北側の標高26.8m付近の斜面部上部に位置する。調査区外に続く窪みとして確認されており、Ⅲ層掘り下げ中に73ラインにベルトを設定し、二分割して調査を行った。調査区外の北側は周堤状に盛り上がり、中央は窪んでいた。覆土下層からは東側で礫集中（HSC-1）、床面ではHP-2・3の間から炭化物の集中が検出された。調査結果では住居のほぼ半分に相当するとみられる。

土層：大きく上下に分けられる。上部はⅡ上～Ⅲ上層の自然堆積層および掘り上げ土の流入とみられる黒褐色土（1・3・4層）とその間の腐植土（2層）、下部は屋根土の崩落土の褐色土（5層）・三角堆積土の6・7層である。住居廃絶後、腐植土が形成される時期にまだ深い窪みの中央には礫が廃棄され、炭化物や焼土が形成される。調査区外で周堤状の盛り上がりが確認されていたが、北壁（E-F）では周堤に相当する土層は検出されなかった。隣接し、形状の類似するH-27とは投げ込み土・M層がない点、腐植土中の遺物が少ない点で違いがある。H-27・28間でトレンチ調査をしたが、掘り上げ土が検出されず、土層からは前後関係がわからなかった。

床面・壁：床面は中央がやや窪み、壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形はH-27に類似した胴の張る隅丸長方形と推定される。

付属遺構：柱穴5基（HP-1・2・4・6・7）、浅い皿状の小型ピット3基（HP-3・5・8）、浅い小型柱穴状ピット2基（HP-9・10）がある。柱穴は、HP-2・6は土を詰められた痕があり、廃絶時にはHP-1・4・7が使用され、6本柱の住居であったと推定される。位置関係から考えるとHP-2・6を含む4本柱住居から、6本柱住居に変化した可能性もある。床面で炉跡は検出されなかった。

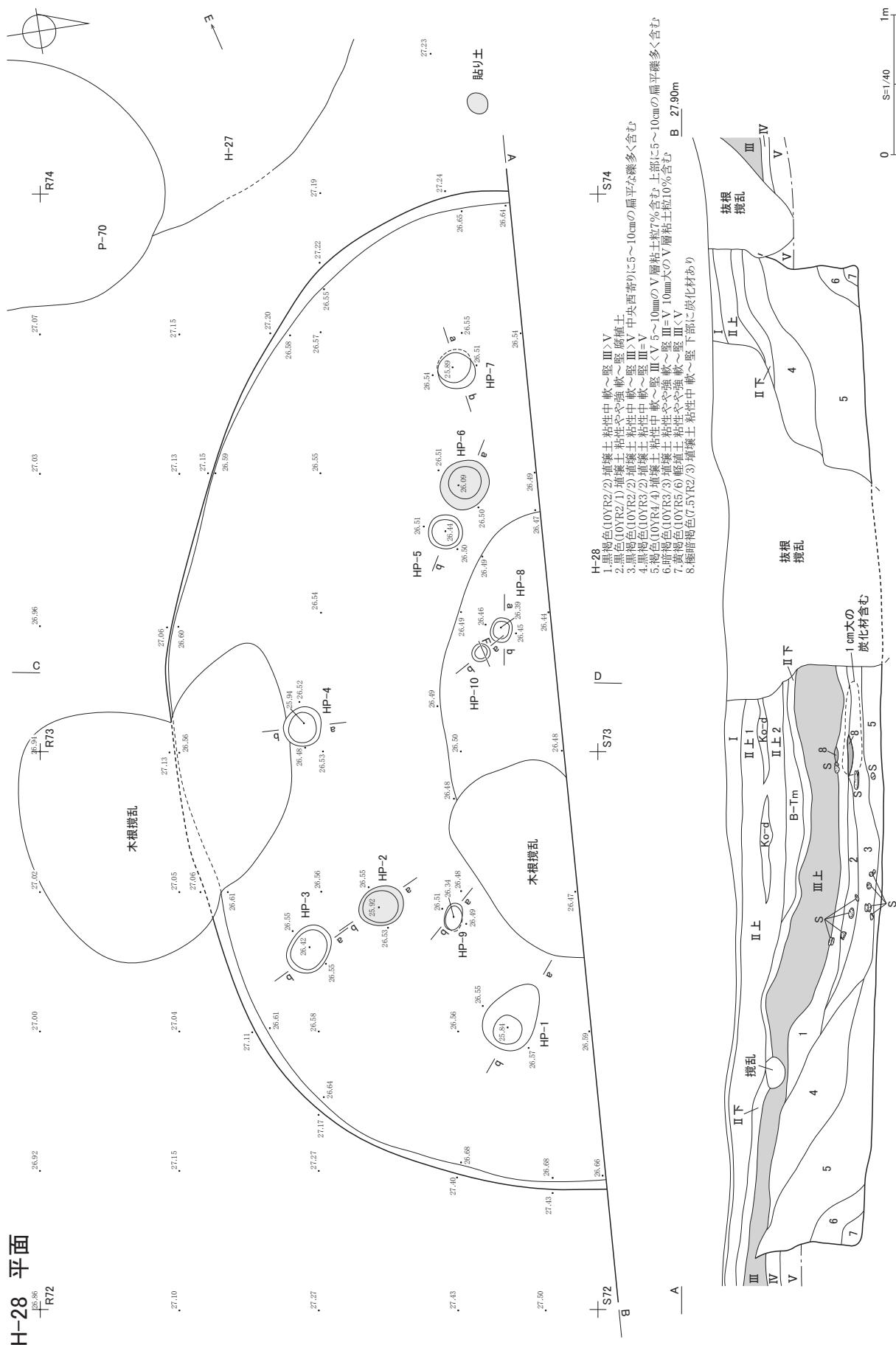
遺物出土状況：出土遺物の総数は1,097点で、土器等が165点、石器等が932点である。土器等はⅡ群b類128点、Ⅲ群a類4点、Ⅲ群b類29点、Ⅳ群a類4点が、石器等は石鏃2点、両面調整石器4点、つまみ付きナイフ2点、スクレイパー6点、Rフレイク4点、Uフレイク1点、剥片266点、石核1点、石斧1点、北海道式石冠3点、扁平打製石器21点、すり石2点、石鋸1点、たたき石4点、原石5点、加工痕のある礫3点、礫606点が出土し、床面直上土から石斧・北海道式石冠、床面からスクレイパーが出土している。

時期：床面出土の炭化物からは4,660±30yrBP（K04-D28）の年代測定値が得られている。出土遺物・年代測定値から縄文時代前期後半円筒下層d1式期と考えられる。

掲載出土遺物：（図VI-161-1～図VI-162-21、図版211・212）

土器：1～6はⅡ群b類。1・2は円筒下層d1式。1は口縁部に縄線とその下位に結束第1種羽状縄文、2は結束第1種羽状縄文が帶状に施文される。3～6は円筒下層d2式。3は平行の縄線、4は波状口縁の口縁部で斜行する縄線間に短い縄線が充填される。3・4の内面はミガキによる光沢がある。5は肥厚した口縁部で縄線と刺突列が交互に施文される。6は胴部片で、単軸絡条体1A類の回転文である。

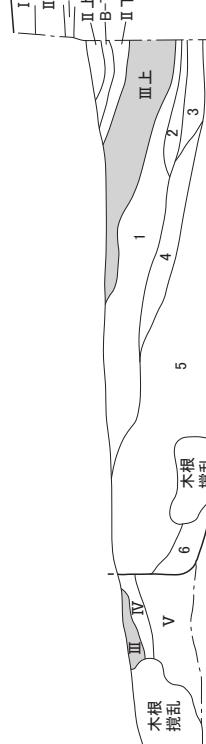
石器：7・8は石鏃Ⅱb類。8はめのう製で、茎部周辺にアスファルトが付着する。9は両面調整石器。粗い加工の段階で折損した後、正面で折れ面を打面として剥離が行われる。10・11はつまみ付きナ



図VI-158 穩穴住居跡 (157) H-28 (1)

H-28 断面

D 2770m



H-28
 1. 黒褐色(10YR2/2)埴縫土 粘性中軟～堅 III>V
 2. 黒褐色(10YR2/1)埴縫土 粘性やや強軟～堅 III>V
 3. 黑褐色(10YR2/2)埴縫土 粘性中軟～堅 III>V
 4. 黑褐色(10YR3/2)埴縫土 粘性中軟～堅 III>V
 5. 黑褐色(10YR4/4)埴縫土 粘性中軟～堅 III>V
 6. 黑褐色(10YR3/3)埴縫土 粘性やや強軟～堅 III>V
 7. 黑褐色(10YR5/6)埴縫土 粘性中軟～堅 III>V
 8. 極暗褐色(7YR2/3)埴縫土 粘性中軟～堅 下部に炭化材あり

1. 黒褐色(10YR2/2)埴縫土 粘性中軟～堅 III>V
 2. 黑褐色(10YR2/1)埴縫土 粘性中軟～堅 III>V
 3. 黑褐色(10YR3/2)埴縫土 粘性中軟～堅 III>V
 4. 黑褐色(10YR4/4)埴縫土 粘性中軟～堅 III>V
 5. 黑褐色(10YR3/3)埴縫土 粘性やや強軟～堅 III>V
 6. 黑褐色(10YR5/6)埴縫土 粘性やや強軟～堅 III>V
 7. 黑褐色(7YR2/3)埴縫土 粘性中軟～堅 下部に炭化材あり

H-28 調査区外盛土範囲

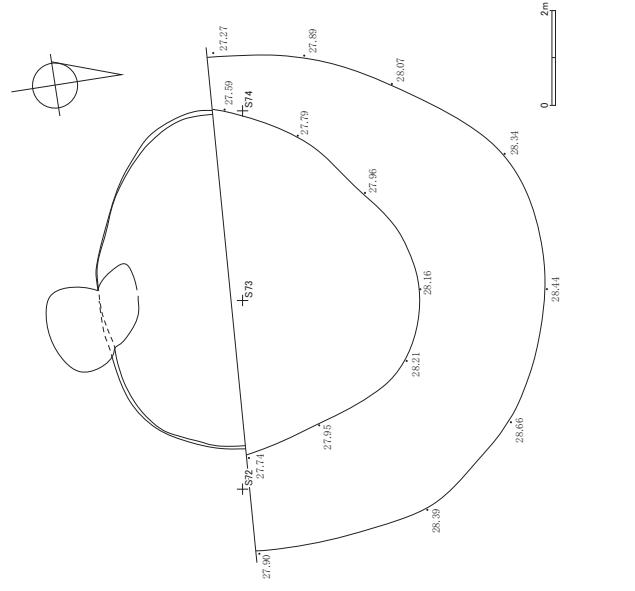
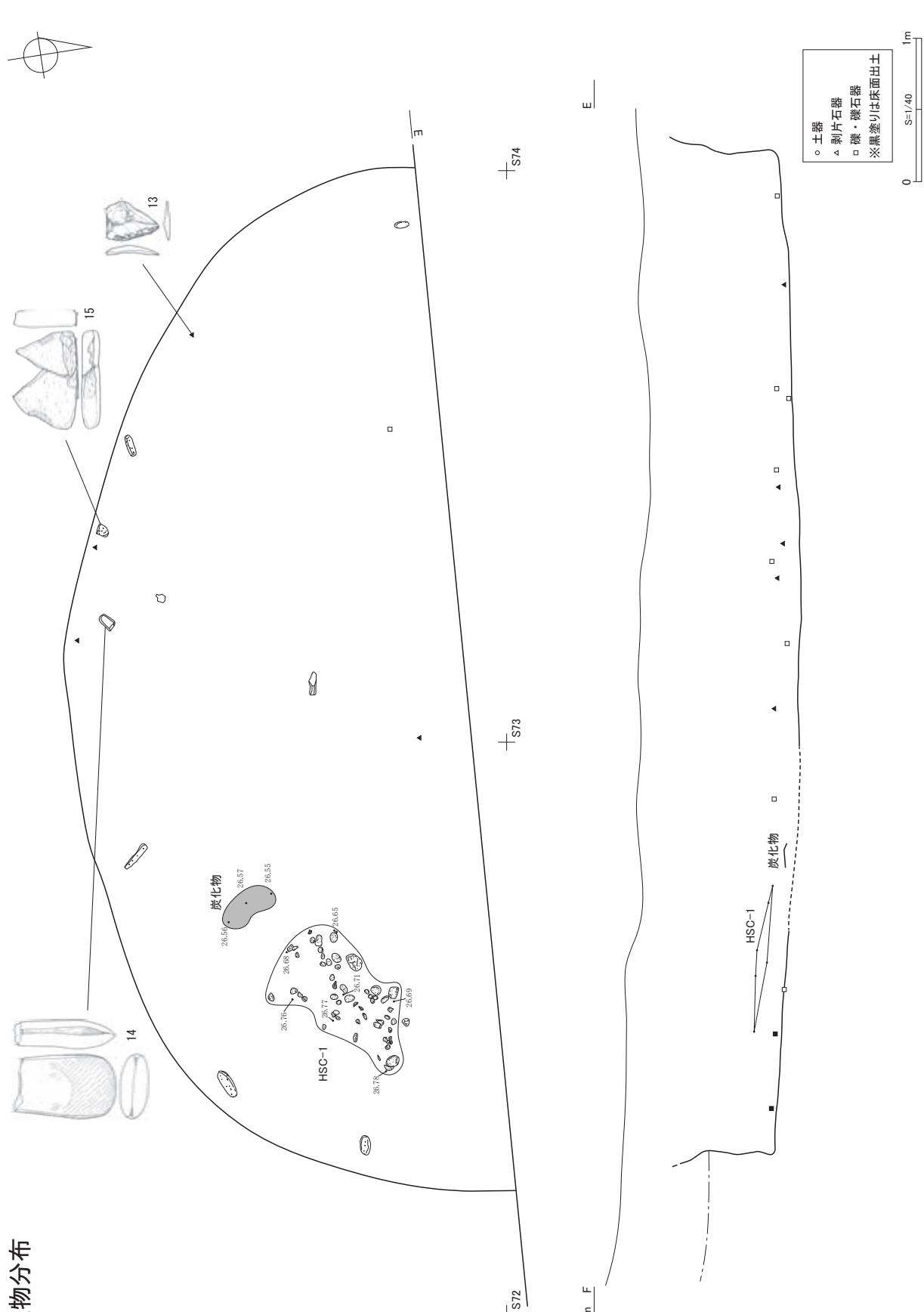
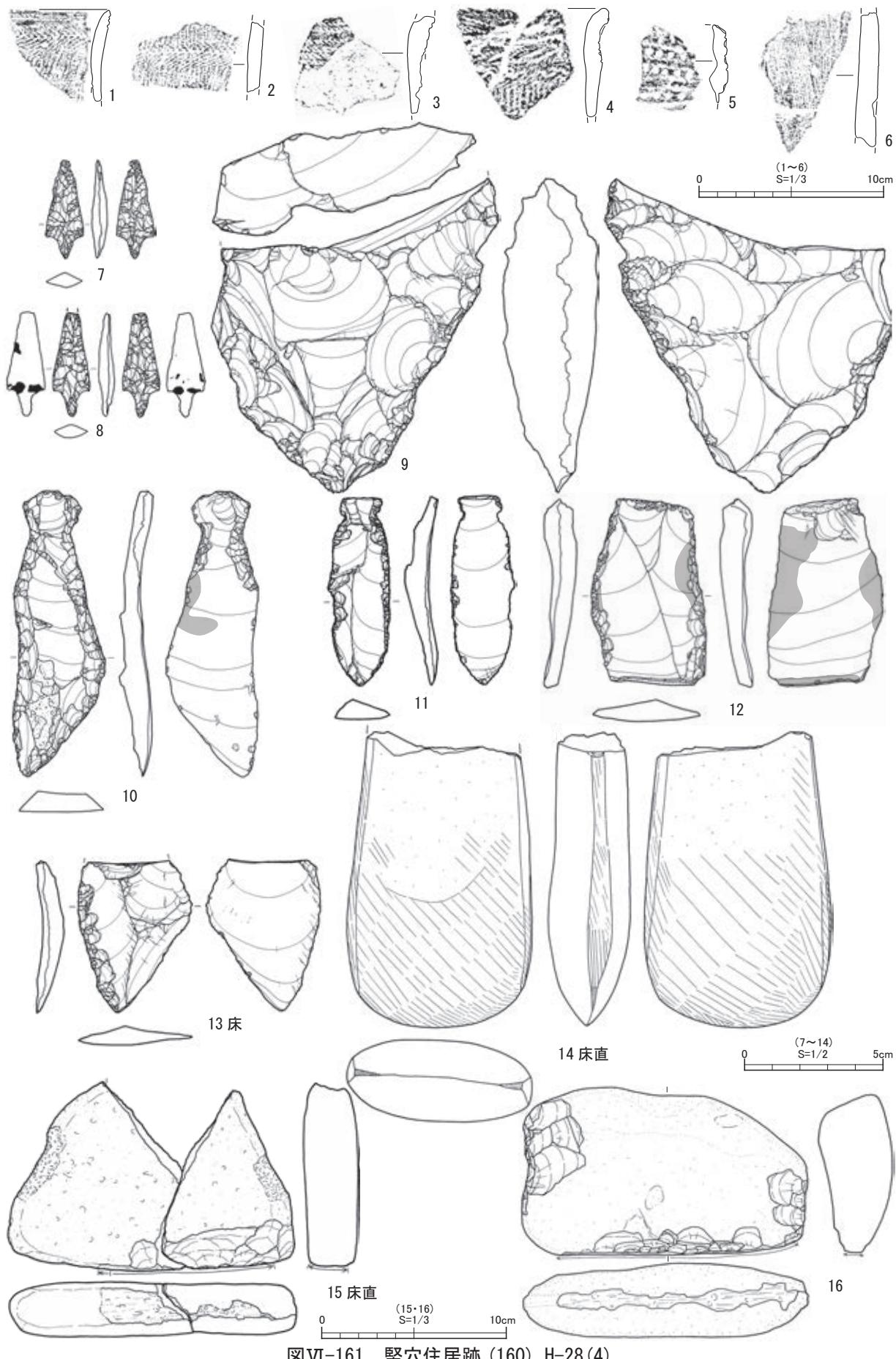
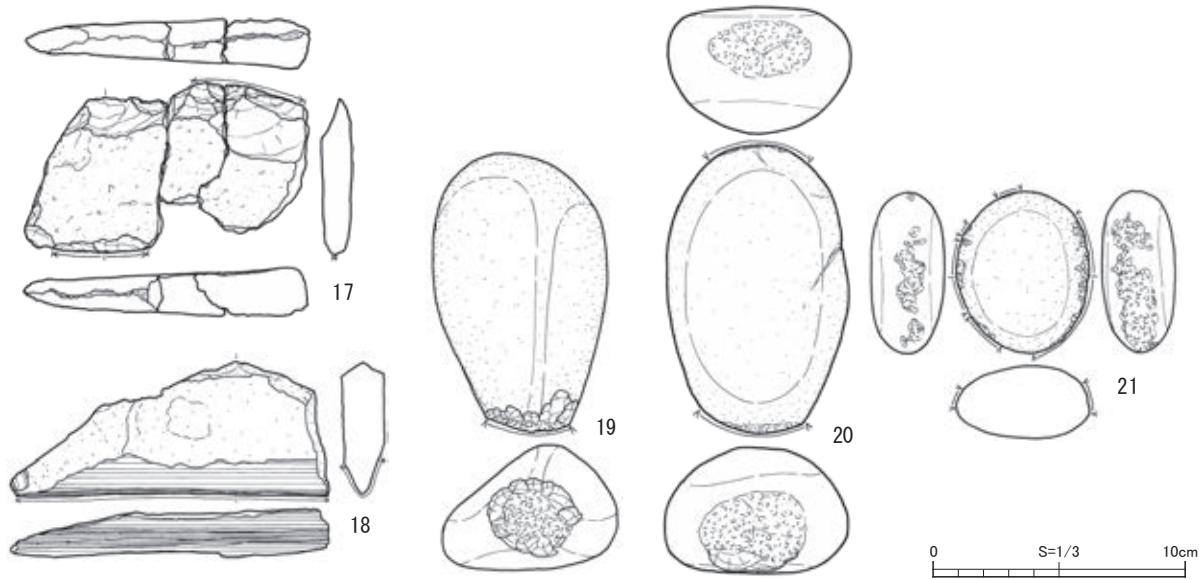


図 VI-159 窪穴住居跡 (158) H-28 (2)





図VI-161 竪穴住居跡 (160) H-28(4)



図VI-162 壇穴住居跡 (161) H-28 (5)

イフ。両者とも縁辺のみの加工で、11は軽微である。12・13はスクレイパー。12はI a類、13はIV類。14は石斧。研磨整形の刃部以外は原石形状が残る。15は北海道式石冠。平面三角形の扁平な石材の左右側縁に敲打による抉りが作出される。正面右下には下縁からの剥落があり、敲打による使用によって本体も折損している。16はすり石I a類。17は扁平打製石器IV類。右2点はH-28覆土下層、左側の破片は廃棄域(088区RM層)出土である。18は石鋸。19～21はたたき石。19はI a1類、20はI a2類、21はI c類。

(鈴木)

壇穴住居跡29 (H-29) (図VI-163～165、表VI-2、図版90・100・101)

確認・調査：C地区中央の標高24～25mの緩斜面から低位部への変換点に位置する。II層を除去後、III層上部でB-Tmの広がりを確認した。堆積状況・下端・壁面確認のため、B-Tm分布範囲の中央で交差するトレンチを設定した。その結果、一部盛り上がる床面と壁面を確認し壇穴住居と認定した。東側で確認した大規模な搅乱が不安定な床面の要因と考えられる。土層観察用のベルトを2本設定し、トレンチにより確認済みの下端・壁面から平面形を想定してIII上層上部から壇穴内調査を開始した。

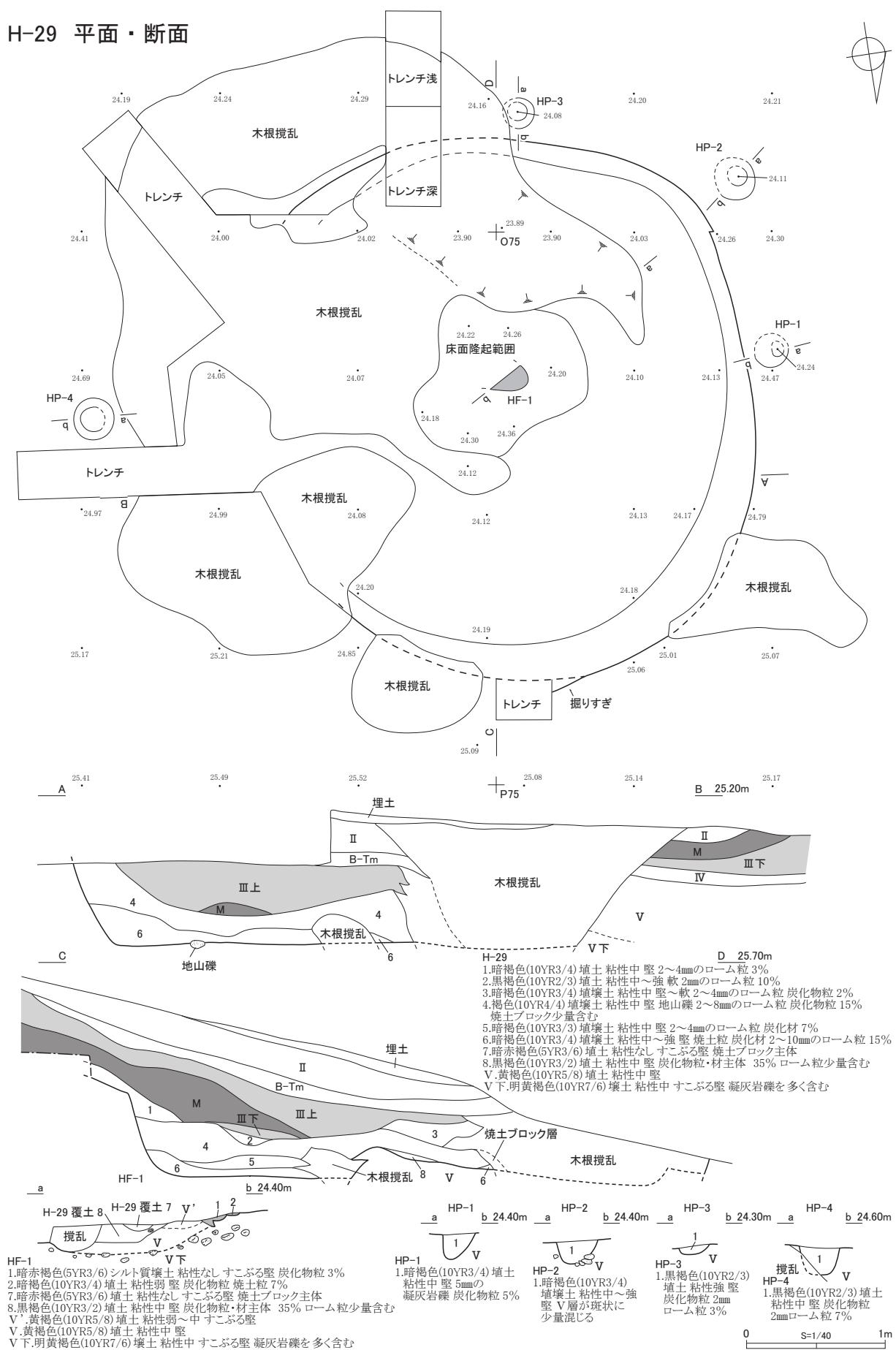
土層：覆土は床面に広く暗褐色土(覆土6)、中央の一部に黒褐色土(覆土8)が薄く堆積している。それらの上位には部分的な範囲でHF-1起源とみられる焼土ブロックを主体とする暗赤褐色土(覆土7)、暗褐色土(覆土1・3・5)、黒褐色土(覆土2)がみられ、全体的な範囲で褐色土(覆土4)が堆積している。また、床面から覆土6の下部にかけて大型の炭化材が広い範囲で確認された(図VI-164)。焼失住居の可能性が高い。なお、これらの覆土の上位にIII下層やM層(縄文時代前期後半ではなく、中期後半に形成されたと考えられる層)が堆積している。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、中央の一部が木根搅乱の影響で周囲より盛り上がった状態であった。壁は若干開き気味に立ち上がる。緩斜面の縁にあるため、北側の壁は60cm程度と比較的深く、南側の壁は薄く10cm前後となっている。

付属遺構：付属遺構はHP-1～4とHF-1である。HP-1～4はいずれも住居南側の外柱穴である。HF-1は地床炉で住居中央の床面から検出した。

遺物出土状況：出土遺物の総数は244点で、土器等が60点、石器等が184点である。土器等はII群b類7点、III群b類53点が、石器等は石鏸2点、両面調整石器1点、Rフレイク1点、剥片52点、

H-29 平面・断面

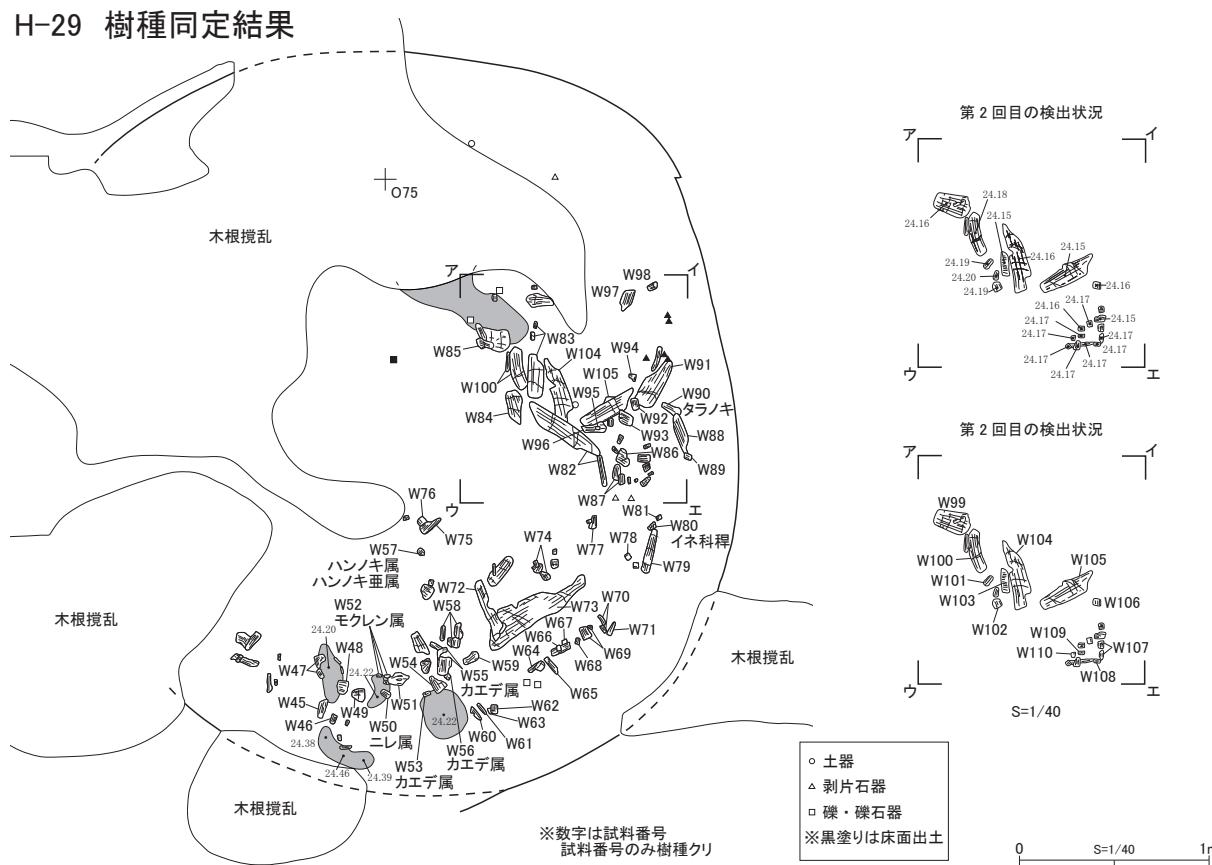


図VI-163 積穴住居跡 (162) H-29 (1)

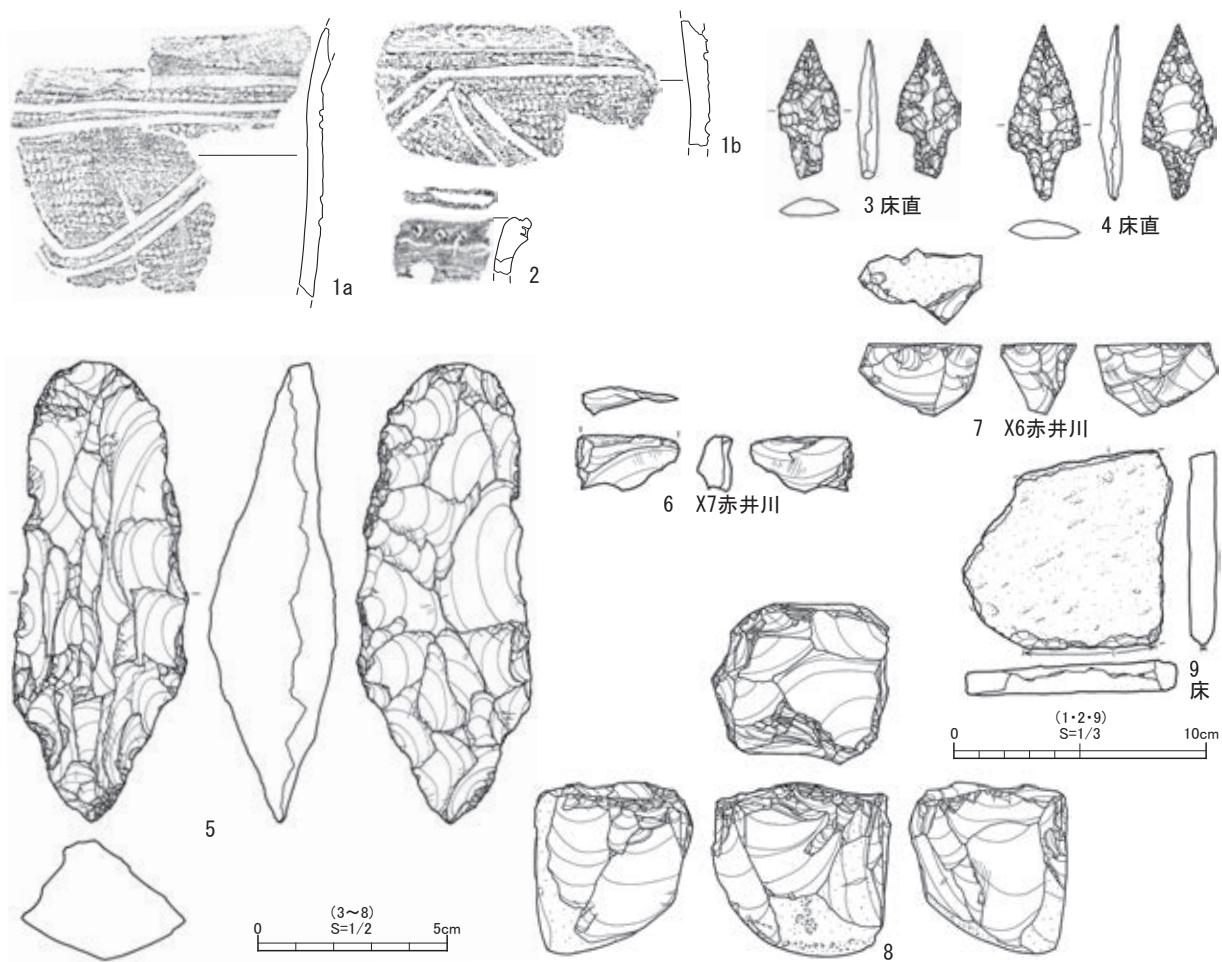
H-29 炭化材・遺物分布



H-29 樹種同定結果



図VI-164 竪穴住居跡 (163) H-29(2)



図VI-165 積穴住居跡 (164) H-29 (3)

石核5点、扁平打製石器1点、たたき石1点、礫121点が出土した。また、構造材と考えられる66点の炭化物について樹種同定を行い、モクレン属(1)、ニレ属(1)、クリ(58)、ハンノキ属ハンノキ亜属(1)、カエデ属(3)、タラノキ(1)、イネ科(1)と判定された。クリが大半を占め、全体的に出土し、大きさも多様である。方向性が異なり、一部に上下関係をもつ部分もみられた。モクレン属、ニレ属、カエデ属は住居の北側から検出された。モクレン属は2~3cm程の細材、ニレ属は5cm程の細材、カエデ属は2cm程の細材と10cm程の炭化材が斜めに接していた。ハンノキ属は住居の中央付近にみられ、幅4cm程の炭化材であった。タラノキ、イネ科は住居の西側から検出された。タラノキは幅8cm程で、周囲のクリ材と交差するようにみられた。イネ科は幅10cm程の広がりを持ち、屋根材の可能性が考えられる。

時期：HF-1の炭化物は4,140 ± 30yrBP (K04-D29)、床面出土の炭化物は4,150 ± 30yrBP (K04-D30)の年代値が得られている。年代測定値と出土遺物、住居構造から縄文時代中期後半榎林式期と考えられる。
(直江)

掲載出土遺物：(図VI-165-1~9、図版212)

土器：1・2はIII群b類。1は榎林式相当。くびれた頸部に複数の沈線が横環し、その下部に2本1組の弧線文が連続する。地文はLR縄文を斜位に回転させ、条が水平になる。2は肥厚した口縁部に中空工具による刺突が巡る。

石器：3・4は石鏃IIb類。4には素材の反りが残る。5は両面調整石器。正面下部は中央がこぶ状で厚い。

6は黒曜石製剥片。左側面にざらついた原礫面が残る。7・8は石核。7は黒曜石製のVI類。ざらついた角礫面を打面としている。6・7は産地分析で「赤井川」産と判定された (K04-X7・X6)。8は転礫素材の石核II b類。9は扁平打製石器VI類。板状素材の下縁のみ剥離が残る。 (鈴木)

竪穴住居跡 30 (H-30) (図VI-166～172、表VI-2、図版 102～104)

確認・調査：C地区東部の標高24m前後の低位部に位置する。II層を除去後、III層でB-Tmを含むII下層の円形の広がりを確認した。堆積状況・下端・壁面確認のため、II下層分布範囲の中央で交差するトレンチを設定した。断面を確認したところ、暗褐色土を最下層とする床面と壁面を確認し、竪穴住居と判断した。また、覆土1層上部で焼土(HF-1)を検出した。周囲に遺物の集中もみられたことから(図VI-168)、住居の埋没過程の窪みを利用した後世の居住跡と思われる。土層観察用のベルトを2本設定し、トレンチにより確認済みの下端・壁面から平面形を想定して、覆土1層上部の居住跡を調査後、竪穴内の調査を開始した。

土層：覆土は床面に広く暗褐色土(覆土4)、北～西側の壁際に黒褐色土(覆土5)の三角堆積がみられる。それらの上位には部分的に暗褐色土(覆土3)がみられ、全体的な範囲で黒褐色土(覆土1)が堆積している。また、HF-1に関連するとみられる被熱礫を多く含む黒褐色土(覆土2)が覆土1の上部から確認されている。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、壁は若干開き気味に立ち上がる。北側が緩斜面となっているため、北側の壁は75cm程度と比較的深く、沢に面した南側の壁は薄く20cm前後となっている。

付属遺構：付属遺構はHP-1～17と貼り床、HF-1～5、炭化物集中1～6である。4本柱の住居構造とみられる。北西側は攪乱のため検出できなかつたが、3本の主柱穴(HP-11・16・17)を確認した。深さは40～60cmと不均一だが径は25cmとほぼ同様である。主柱穴の内側の範囲にその他のHPの大半が検出された。特徴的なものとして浅い皿状のもの(HP-1～5・7・9・10・12・13)、バケツ形に上方が開くもの(HP-14)が存在する。なお、HP-15は砂ピットである。また、HP-14・15は貼り床の下位から検出された。

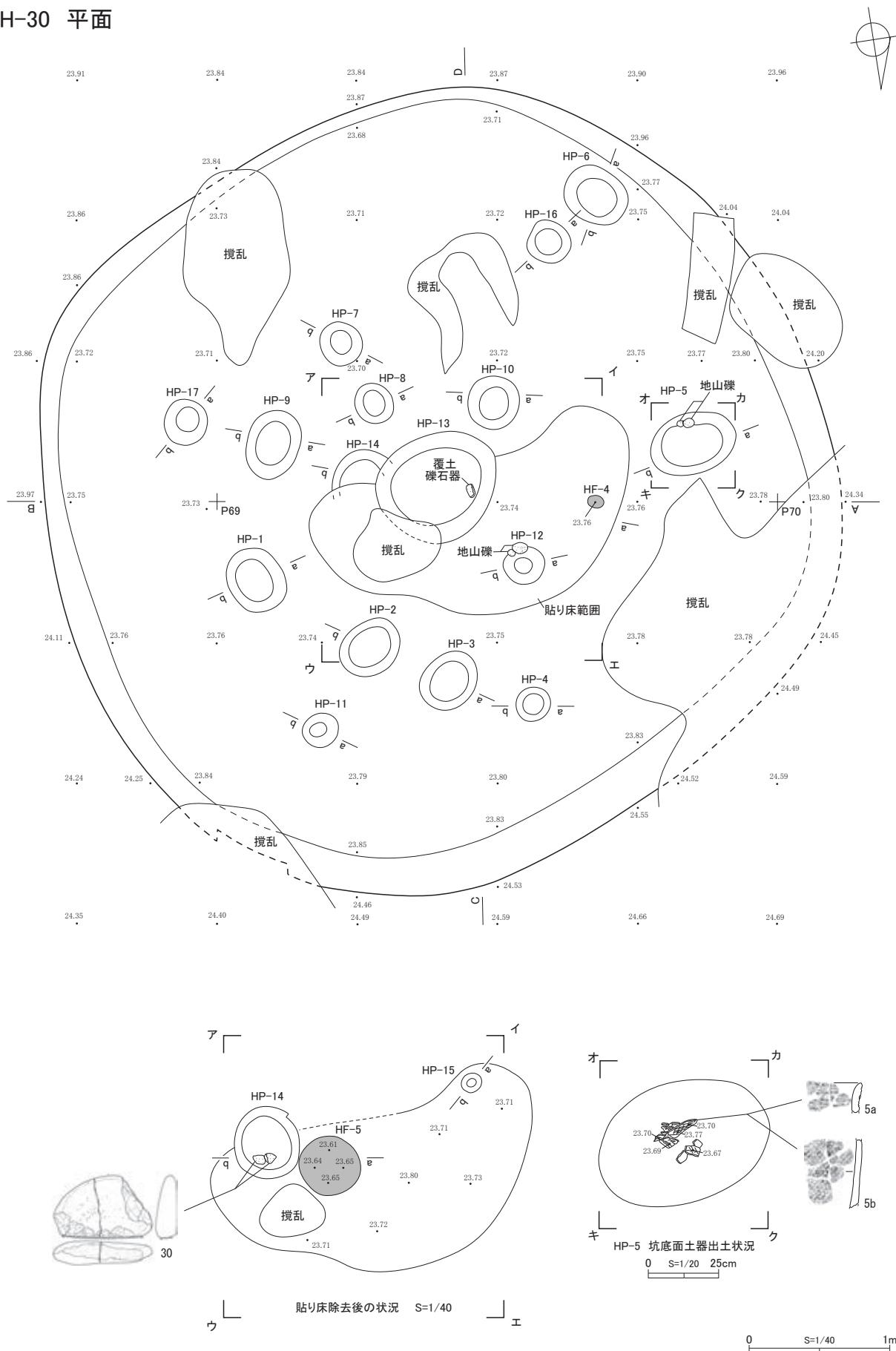
貼り床は主柱穴を結ぶ方形の範囲(想定)内の中央やや北寄りに検出された。2.5m程の不整形で東西方向に長軸を持ち、炭化物粒を少量含む。

HF-4・5は住居の床面に関するものである。HF-4は貼り床上位の小型で薄い地床炉である。HF-5は貼り床の下位にあり焼土ブロックや炭化物粒を多く含むのが特徴で、焼土形成後に攪拌を受けたような状況である。HF-3および炭化物集中4～6は覆土4層の下部から検出されたもので、住居廃絶後の比較的早い段階で形成されており、焼失に伴う構造材の可能性がある。HF-1・2および炭化物集中1～3は覆土1層上部から検出された地床炉である。炭化物集中はいずれもHFの周辺にみられた。またHF-1の南側に被熱した粗粒の礫の集中が検出された。これらHF-1・2と同時期のHPも存在すると思われるが、覆土中からの掘り込みは確認できておらず、配置状況や遺構の規模、覆土の様子から関連するHPを抽出することはできなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は2,100点で、土器等が614点、石器等が1,486点である。土器等はII群b類379点、III群a類26点、III群b類26点、IV群a類175点、時期不明8点が、石器等は石鏃2点、石槍1点、両面調整石器6点、つまみ付きナイフ3点、スクレイパー7点、Rフレイク6点、Uフレイク1点、剥片921点、石核3点、石斧1点、石のみ1点、北海道式石冠2点、扁平打製石器8点、すり石8点、たたき石7点、原石3点、加工痕のある礫2点、礫504点が出土した。また、HP-5の坑底からII群b類の土器片がまとまって18点、HP-14の坑底からすり石が2点出土している。

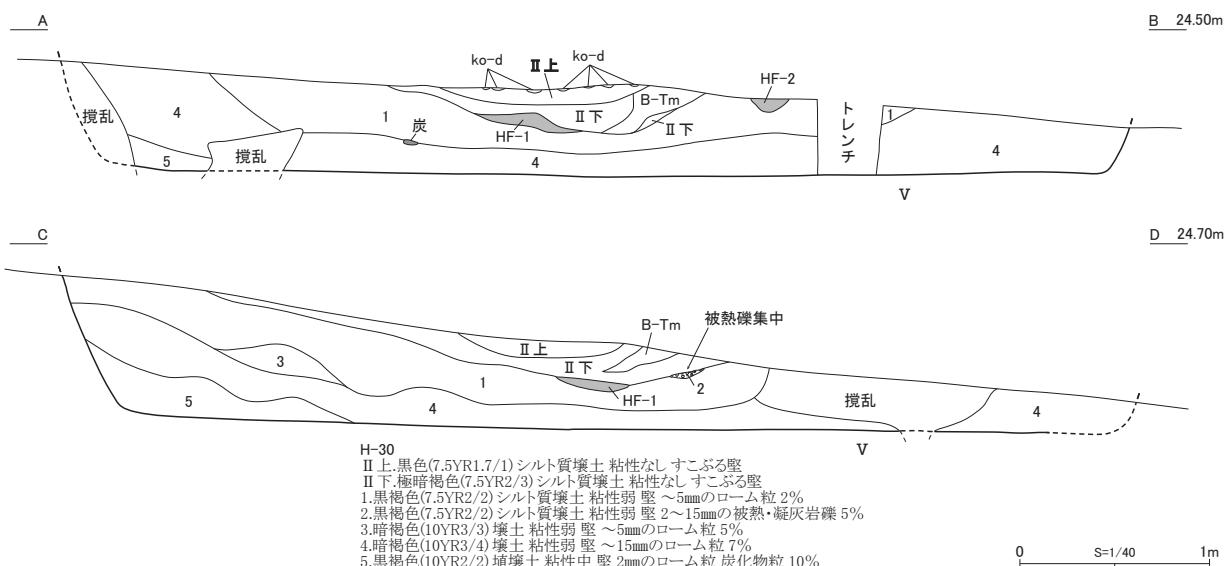
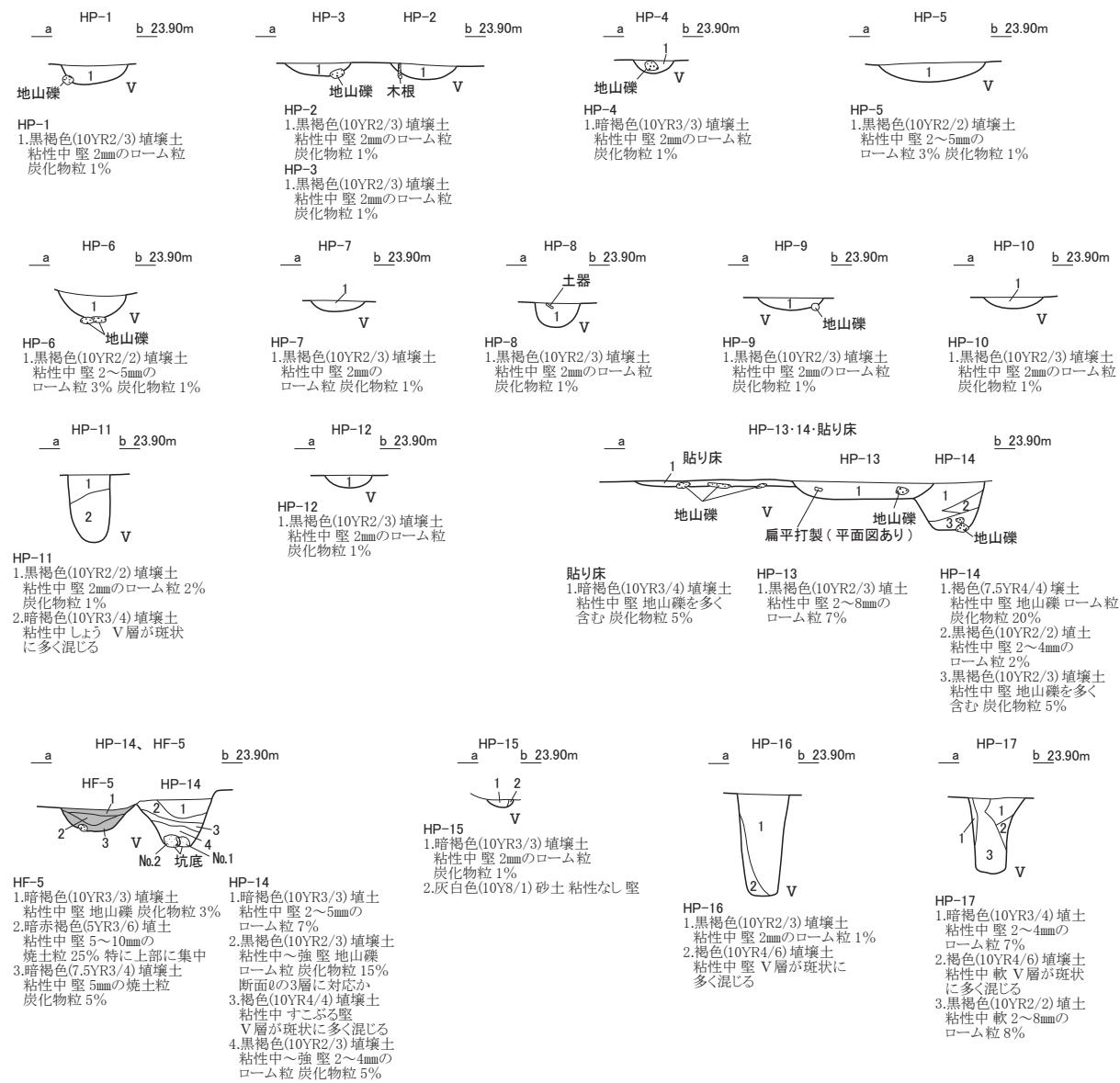
時期：覆土上部にあるHF-1の炭化物は4,130±20yrBP (K04-D31)、覆土下部にあるHF-3の炭化物

H-30 平面



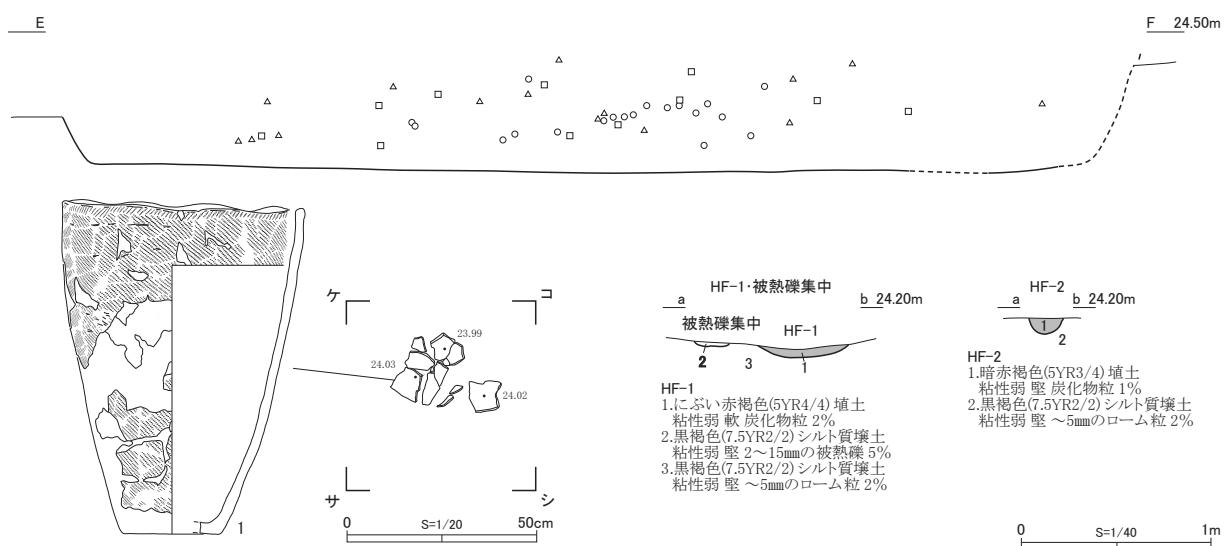
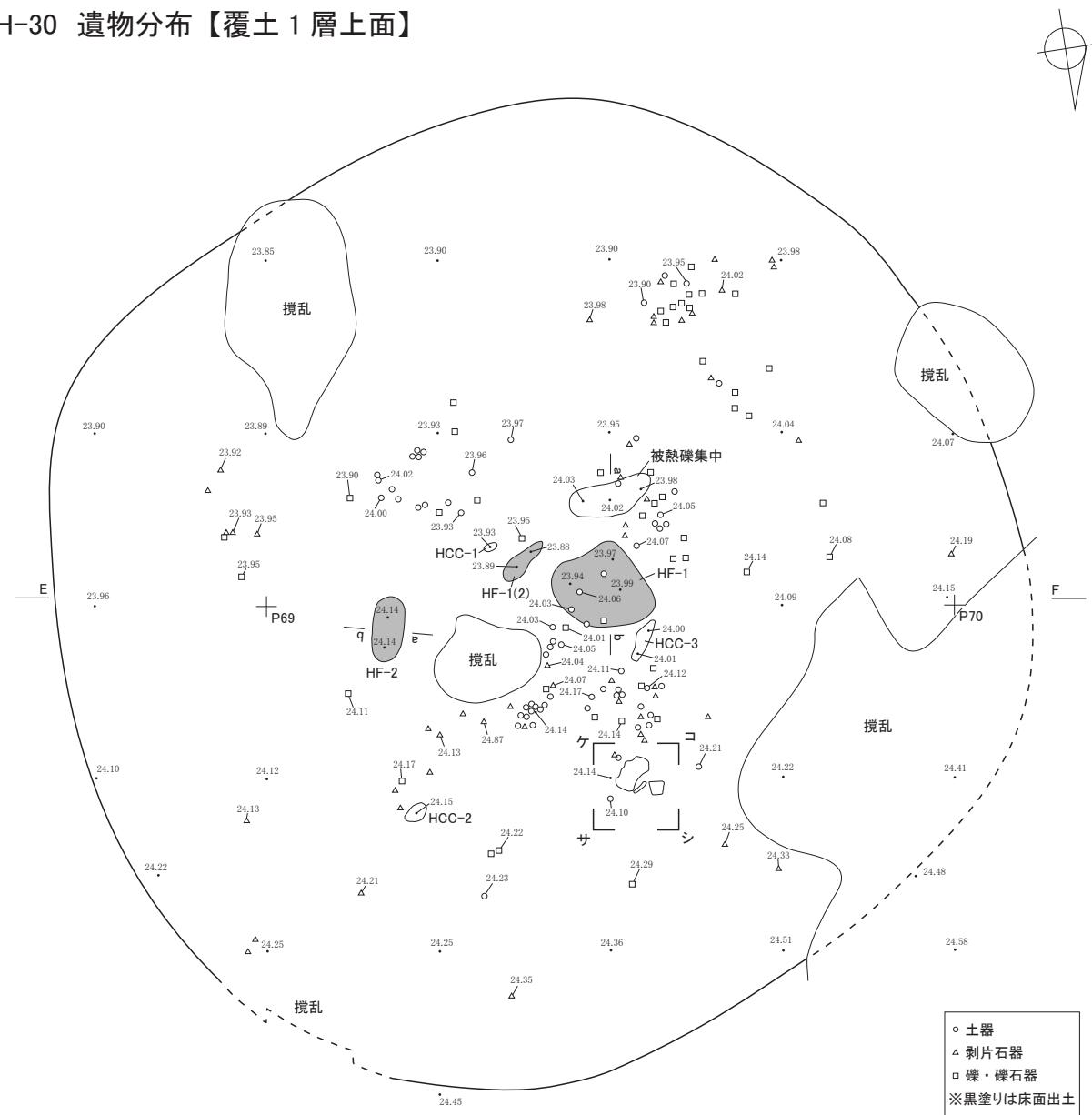
図VI-166 積穴住居跡 (165) H-30(1)

H-30 断面



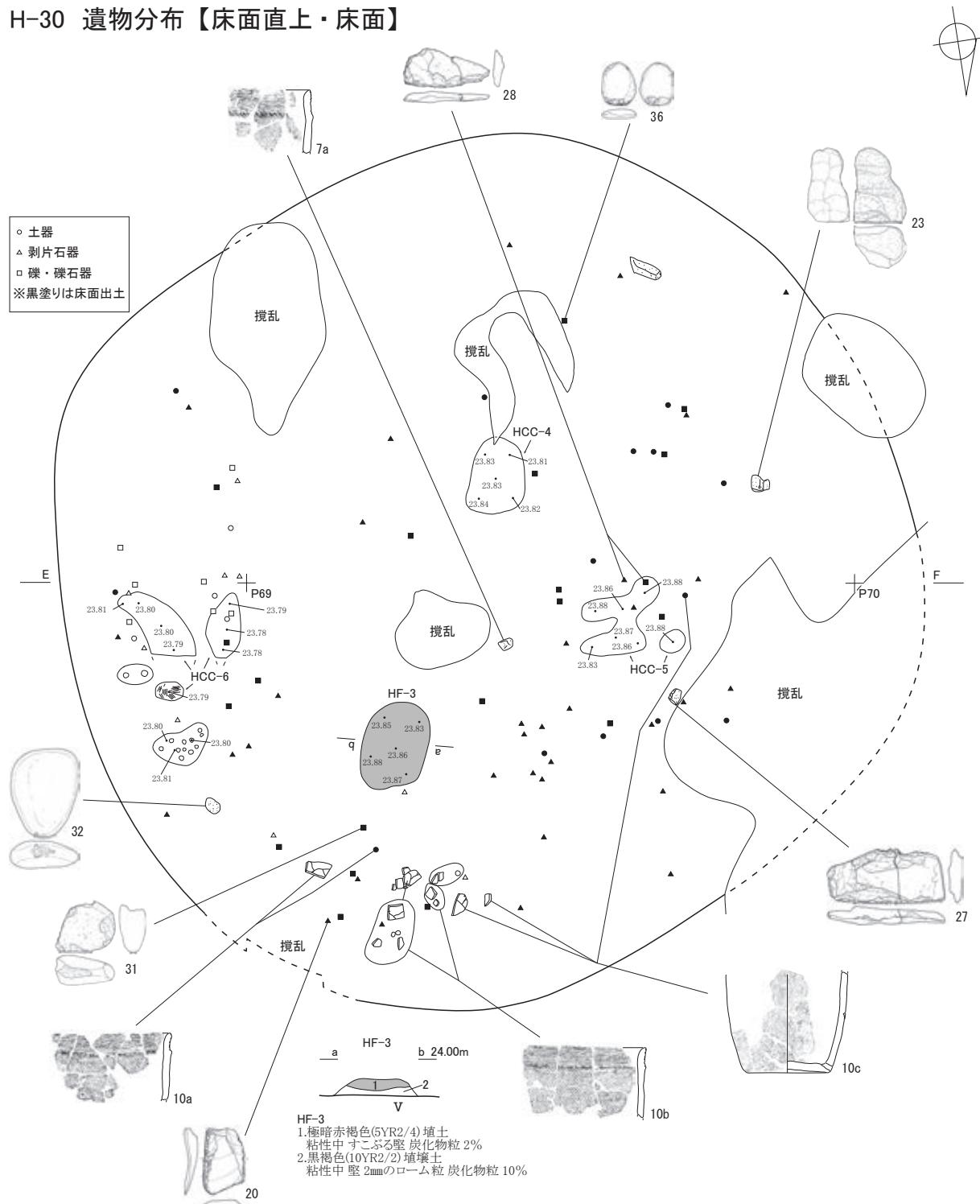
図VI-167 穫穴住居跡(166) H-30(2)

H-30 遺物分布【覆土1層上面】



図VI-168 竪穴住居跡(167) H-30(3)

H-30 遺物分布（床面直上・床面）



図VI-169 竪穴住居跡 (168) H-30(4)

は $4,680 \pm 20$ yrBP (K04-D32)、床面にある HF-5 の炭化物は $4,670 \pm 30$ yrBP (K04-D33)、貼り床の炭化物は $4,710 \pm 20$ yrBP (K04-D34) の年代値が得られている。この年代値と床面出土遺物、砂ピットの存在から住居の帰属時期は縄文時代前期後半円筒下層 d2 式期と考えられる。また、埋没過程で形成された HF-1・2 は年代値から縄文時代中期後半のものと思われる。 (直江)

掲載出土遺物：(図VI-170-1～図VI-172-37、図版 212・213)

土器：2～10 は II 群 b 類。2 は円筒下層 b1～b2 式。不整綾絡文。3 は円筒下層 b2 式。沈線で区画された口縁部に不整綾絡文が施文される。4 は円筒下層 d1 式。縄線と結束第1種羽状縄文が見られる。5～10 は円筒下層 d2 式。5 の口縁部は波状で、外反し、口唇に沿って縄線が施文される。口唇部には縄の側面による刻みがある。胴部は多軸絡条体の回転文である。6 はくびれて外反する口縁部。斜位の縄線が充填される。7 は肩が張り出し、口縁部はくびれる。2 本 1 組の縄線が口縁中段、下部にあり、上下に斜めの短縄線が綾杉状に加えられる。口唇と肩に斜めに縄の側面による刻みが施される。胴部は多軸絡条体の回転文である。8 は低く丸い波状口縁で、肩が張り、内部には段がある。口唇と肩に沿った縄線で菱形状である。肩の下には結束第2種羽状縄文があり、胴部は多軸絡条体の回転文である。9 は弱いくびれの口縁部で、斜めの縄線が充填される。胴部は多軸絡条体の回転文。10 は底部からほぼ垂直に立ち上がり、肩からくびれてわずかに外反する深鉢。口縁部には斜めの縄線が充填され、胴部は多軸絡条体の回転文である。円筒下層 d2 式の土器は器体が厚く、内面はミガキにより光沢がある。

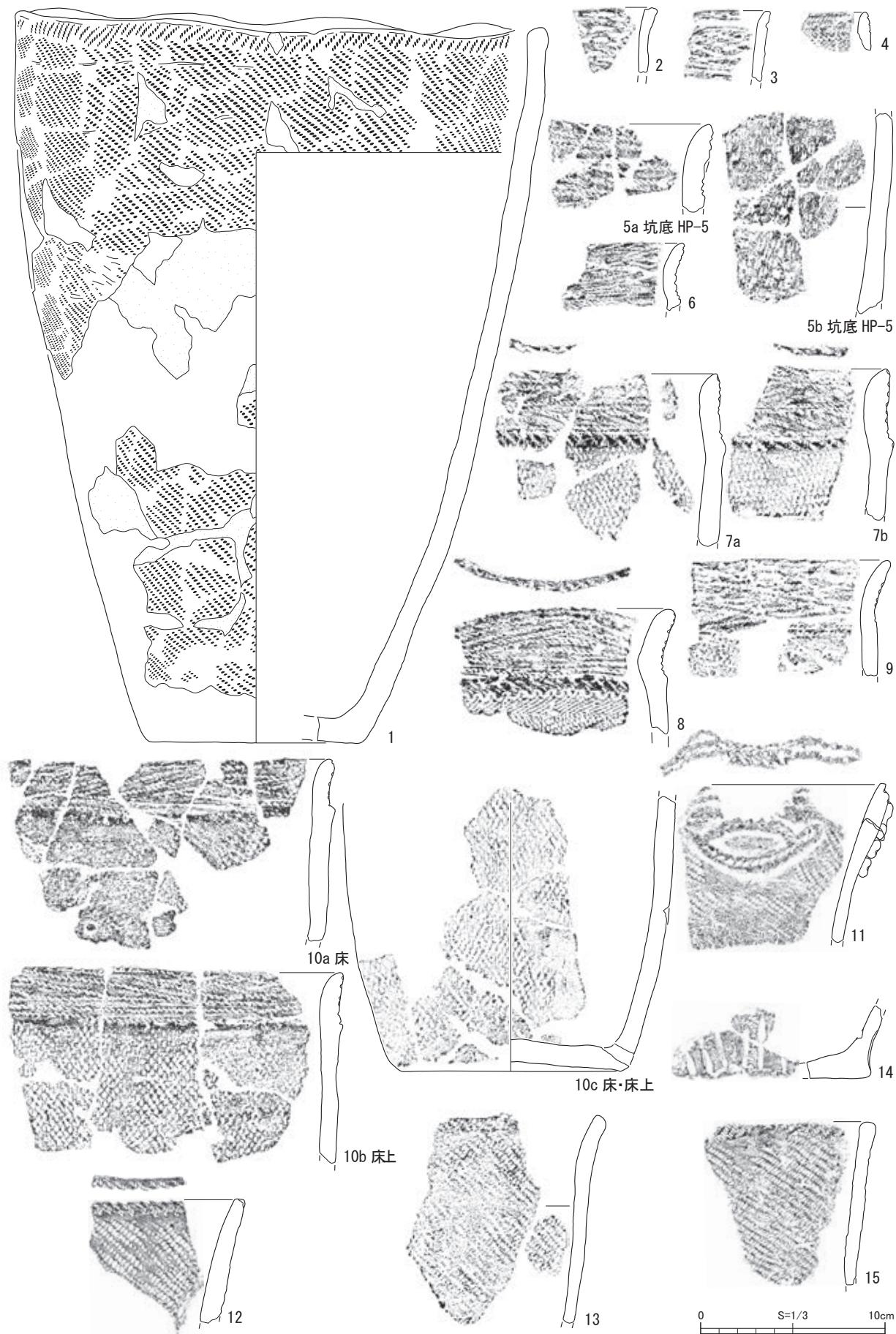
11・12 は III 群 a 類。11 は M 字状の突起のある口縁部。粘土紐の貼付に縄線が付けられる。12 は口唇部外面に縄の側面で刻みが加えられる。

13・14 は III 群 b 類。13 は RL 斜行縄文、14 は内底面の断面が丸く、底部付近に縦の沈線が施文される。1・15 は IV 群 a 類。1 は底部からほぼ直線的に口縁部まで立ち上がり、低く小ぶりな波状口縁である。口唇直下に LR 縄文が横回転で施文される以外はすべて縦回転である。口唇部は磨かれ、断面はコの字状である。砂を多く含み、厚みもあるため重量感がある。15 は 1 と同一個体とみられる。

石器：16・17 は石鏃。16 は I b 類、17 は II b 類。18 はつまみ付きナイフ。反りのある先端が尖る。19～21 はスクレイパー。19・20 は I b 類、21 は IV 類。19 の左側縁は整然と押圧剥離により加工され、下部は尖頭状である。21 の肥厚したヒンジの末端部は腹面側に加工が施される。22b・23 は全面敲打によって整形された北海道式石冠の破片資料である。22a は 22b と剥片 22c との接合資料で、本体部分は出土していない。22b を下面からの剥落で大きく欠損した後、薄い 22c も同様に剥落するが、石冠の裾部を大きく欠損した後も利用されていたようである。22b・c の下面是段差がなく、22b 剥落から 22c 剥落まで本体のすり減りはほとんど見られない。22b は H-30 床面、22c は G79 区出土で、離れた位置に分布する。23 は正面下部に剥落があり、本資料も下面の敲打により折損したとみられる。本体の 3 分の 1 程度に相当するであろう。24～28 は扁平打製石器。24 は I 類、25 は III 類、26・27 は IV 類、28 は VI 類。24 は両面下部に剥落があり、下面の平坦面が消失する。28 は剥落した素材を再利用している。29～31 はすり石。29・30 は I a 類、31 は VI 類。32～35 はたたき石。32 は I a2 類、33 は I a3 類、34 は I d 類、35 は III 類。36・37 は加工痕のある礫。36 は扁平礫の端部に交互剥離が加えられる。37 は扁平橋円礫の長辺に連続的な剥離が施される。 (鈴木)

豊穴住居跡 31 (H-31) (図VI-173、表VI-2、図版 105)

確認・調査：調査区中央北側の標高 27.0m 付近の斜面部上部に位置する。III層掘り下げ中に調査区壁際で調査区外に続く半円形の黒褐色土の広がりを確認した。調査範囲の輪郭に直交するように土層観察用のベルトを設定し、二分割して調査を行った。本住居は全体のほぼ半分に相当すると推定される。



図VI-170 竪穴住居跡 (169) H-30(5)